第 13 章　最後の游（たび）
――雷州から常州まで

■伏波将軍廟碑

元符3（1100）年、蘇軾65歳。

6 月 20 日の夜に海南島から海を渡って対岸の徐聞に到達した蘇軾は、3 年ぶりに大陸の土を踏んだ。船着場の近くにある伏波将軍廟に詣で、往復ともに海の旅を無事に終えたことを感謝してこの碑文を記した。

漢の時代に二人の伏波将軍がいた。二人とも嶺南の民に対して功績があった。前の伏波将軍は邳離侯の路博徳で、後の伏波将軍は新息侯の馬援である。

南越（嶺南）は（古代の）三代以降も中国の内には入らずに、秦がしばらく役人を置いたものの、すぐにまた夷の地となった。（漢代の時代）路博徳は始めて夷の国を滅ぼして九郡を開いた。しかし、後漢に至って、二人の女性が反乱を起こし、六十余城を震駭させた。このとき光武帝は天下を平定したばかりで、民は疲れて戦いを嫌い、西方では玉関を閉じて西方諸国との関係を断っていたので、まして南方は官軍がわざわざ出向くまでもないところだとされた。もしも馬援がいなかったならば、嶺南はそのまま夷の国となっていたであろう。このことから二人の伏波将軍の廟が嶺南にあることは等しく理由

があることで、昔から伝えられていることからは、どちらの将軍の廟であるのか一つには定められない。

私は先に海を渡って朱崖（瓊州の南）の地に行こうとしたときに、（大陸から）南の島の山の連なりを望み見ようとしたのだが、それはあるかないかのようで、遥か彼方に一本の髪の毛のようなものがあるばかりであった。船を用意し、いまにも渡ろうということになって、恐れる気持ちが湧き、魂を失うばかりとなった。

そのときに、海のほとりに、伏波将軍の祠があると聞いた。元豊年間に伏波将軍を忠顕王に封じてから、海を渡る者は必ずここで運を占うようになった。

「いついつの日は渡るによい日でありましょうか」

と、尋ね、吉とされたなら渡るのである。人々は、量りの分銅のようにそれは正確で、欺かれることはないと信じている。嗚呼、伏波将軍の徳が盛んでなければ、このようなことが果たしてあるだろうか。

漢代以降、朱崖や儋耳には州が置かれたこともあれば置かれなかったこともあった。揚雄はこのように書いている。

「朱崖の地を棄てたところで皇帝の威光を損なうことはないとするのは、人の衣を着た我が民を、鱗をまとう魚のところに棄てるようなものである」

漢代にこのようにいわれたお蔭で、漢の末から五代十国時代に至るまで、中国が乱れたときにはそれを避ける者の多くが海南島にくるようになり、いまもかつての衣冠や礼楽がきちんと残っているのである。棄ててもよいとはもはや誰も言わない。

海を南北に渡る者は伏波将軍に指南を仰ぎ、神に仕えていたって恭しくする。

私軾は罪をもって儋耳(たく)に謫されること三年、いままた海の北に帰ることができた。行き帰りがすべて順風であったのは、神が祈りに応えてくれたものであろう。この碑文を作り、銘を記す。その銘に曰く。

至険莫測海与風、(ひどく危険なこと――海と風は予測がつかない)

至幽不仁此魚竜。(ひどく暗いこと――魚や竜には思いやりがない)

至信可恃漢両公、(とにかく信じること――二人の伏波将軍に頼るのだ)

寄命一葉万仞(まんじん)中。(そして、万仞の大波の中で一枚の葉に命を託すのだ)

自此而南洗汝胸、(ここより南に行くとき、将軍は胸の内を洗い清め)

撫循民夷必清通。(辺地の民をきっと正しい道へと導く)

自此而北端汝躬、(これより北に行くとき、将軍は身を正しく努める)

屈信窮達常正忠。(力を尽くして正しく忠を貫く)

生為人英没愈雄、(将軍は生きて優れた人で、亡くなってますます英雄となった)

神雖無言意我同。(神は無言であるけれど、私の申し上げることに同意するであろう)

(蘇軾は、伏波将軍(ふくはしょうぐん)が嶺南(れいなん)の地を中国の版図の内に収めたのは偉大な功績であったと記している。嶺南は元来、漢民族の住むところではなかったのだから、漢民族の王朝の支配を受けることは土地の人にとって必ずしも幸せであったとはいえないはずだ。だからこそ2人の女性が反乱を起こしたのだろう。海南島(かいなんとう)で3年を過ごした後でも、未開の人々を文明国の民にすることが善であると蘇軾は考えていたわけだが、現代に至っても同じような誤謬に陥る者が少なからずいるのだから、蘇軾に批判的な眼差し

を向けるのは意味のあることではないだろう）

■自雷適廉宿於興廉村浄行院

蘇軾は徐聞から雷州に行き、弟子の秦観（第 12 章 332 ページ）に会った。秦観も処罰を軽減されて嶺北の衡州に移ることが赦されていたのだが、蘇軾が到着するのを待ってまだ雷州に留まっていた。

6 月 25 日に秦観と別れ、廉州（合浦）へと向かった。この詩は途中の興廉村の浄行院に宿ったときに詠んだもの。

海の南北はどこも荒涼としている。

仏寺さえもまるで鶏小屋のようだ。

榕樹の林の中を行くと、

空に跨って飛ぶ箱型の筏のようなものが見えてくる。

それがすなわち浄行院であった。

門の前に、冷たく碧い水が湧く井戸があり、

我が両足の泥を洗い流す。

高い堂には新しい瓦が葺かれていて、

部屋を区切る戸は四角形だったり台形だったりする。

牀に倒れ伏すとたちまち深い眠りに落ち、

鼻息は荒く、虹を吐くばかり。

僮僕は我がそばを離れずにいてくれて、

ここに半日ばかり留まる。

朝に一艘の小舟に乗り、

酔い心地のままに十里の溪を通り過ぎる。

醒めてみると、

果たしてここはどこなのか。

老いてさらに帰路に迷うのである。

■雨夜宿浄行院

「雨の夜に浄行院に宿る」という題の詩もある。

我が草鞋はもはや利や名を争う場に踏み入れることはない。

一枚の葉のような舟に身を寄せて渺茫とした世界に漂うだけである。

林の下で牀を並べて夜の雨を聴く。

この淒涼とした静けさを照らす燈火もない。

（3句目の原文は、「林下対牀聴夜雨」（林下の対牀 夜雨を聴く）で、「夜雨対牀」といえば、兄弟で過ごす最も望ましい時間であるとして蘇軾がかねてから掲げていたことである。このときに牀を並べたのは、前の詩に見えた童僕なのだろう。燈火もない中で、弟のいない「夜雨対牀」をしみじみと味わっているのだ）

■書合浦舟行

任地の廉州（合浦）に着いたのは7月4日。浄行院からの移動に苦労したことがこの短文に記されている。

私は海康(雷州)から合浦(廉州)に行こうとし、連日の大雨に遭い、橋梁はことごとく壊され、岸辺が見えないほどにまで水が広がった。

興廉村の浄行院からは小舟に乗って官寨に至った。そこから西はどこも水が漲り、橋も舟もないと聞かされた。ある人が、蜑舟(水上生活をする蜑民の舟)に乗って海を渡って白石に行くよう勧めてくれた。

その日は六月の晦で、月がなかった。大海の中に碇を下して宿った。天と水とが触れ合い、空いっぱいに星が散りばめられていた。私は舟上に坐して四方を顧みて、大きく嘆息して言った。

「私は何の数(運命)によってこの危うい舟に乗っているのか。すでに舟で徐聞に渡り、そしてまたこの災厄に遇うとは」

息子の過はかたわらで鼾をかいて眠っていて、呼んでも応えなかった。私は『易経』『書経』『論語』についての著作を携えていた。世の中にはそれを写した別の本はない。それらを撫して、嘆いてこのように言った。

「天未喪斯文、吾輩必済」(天の未だ斯の文を喪さざれば、吾輩は必ず済らん)(天がこれらの書物を失くそうとするのでなかったら、我らはきっと無事に渡れるであろう)

果たしてその通りになった。

七月四日、合浦で記す。時に元符三年である。

（(1) 大陸の民である蘇軾は船で海を渡るのを必要以上に怖がったようである。(2)『易経』『書経』『論語』の研究書を海南島でまとめたことは第12章100ページで見ている。唯一無二のその原稿が失われてしまうことを蘇軾は恐れたのである。それだけ労力を注ぎ、出来栄えに自信があったのだろう。この三つの書物への蘇軾の愛着ぶりはこの後でも見ることになるが、残念ながら『論語』の研究書は現代には伝わらず、他の二書も読もうとする者は極めて希である。(3) 蘇軾の言葉、「天未喪斯文，吾輩必済」は、孔子が匡の国で災厄に遇ったときに言った言葉として『論語』が伝える「天之未喪斯文也、匡人其如予」（天の未だ斯の文を喪ぼさざるや、匡人其れ予を如何せん」（天にこの学問を滅ぼす意志がないのなら、匡の国の人が何かをしようとしても、私はびくともしないはずだ）に基づくもの。正しい学問を後世に伝えようとする孔子の強い意志を示した言葉である。「斯文」は文字通り「斯の文」であるが、『論語』のこの言葉から、孔子の学問、あるいは儒学、あるいは学問全般を指すようになった）

■跋張広州書

廉州に到着した蘇軾は、知事の張仲修の助力を得て官舎を仮の住まいとした。蘇軾が来たことが知れると、ひっきりなしに人が訪れるようになり、自慢の一品を蘇軾に見せようとする者も多くいて、蘇軾が少しでも褒めようものならすぐに一筆求められた。蘇軾は気安く応じたようで、7月7日には希白（宝月禅師）の書に、7月11日には張田の書にそれぞ

れ記した跋文が残っていて、ここでは後者を見ておこう。張田は蘇軾の先輩に当たる官員で、その才能を欧陽脩に認められ、地方官を歴任し、特に広州知事であったときに市域を拡充する土木工事を行うなどの治績があった。それでここの表題では「張広州」と記されている。

（張田には、軍職に就く王凱に嫁いだ妹（仁寿夫人）がいた。妹は、兄が広州知事になったので、その権威を借りて、南方の特産である真珠を売って利益を得ようと考えた。広州は南方との交易の中心地であったから、一族の中に広州知事になる者が出ると、ひと財産が築けると喜ぶ者がきっといて、知事もまた己を欲を縦にしてその者の自由にさせるのが常であった。そのような世間の風潮に流されようとする妹を張田がたしなめたというのが以下の話である）

張田が妹の仁寿夫人に宛てた手紙にこのようにある。

「広州には真珠や香薬が極めてたくさんあり、町には銭がたっぷりある。忝くも私は市舶使の役目を授かり、ただし、前人に效って自身を汚そうとは思っていない（代々の知事のようにやましい稼ぎに手を染める気はない、という意味）。唐朝の三百年間で、広州を治めて宋璟、盧奐、李朝隠だけが廉潔であったと称えられている。我が宋朝においては廉潔であったという者はいまだに聞かない。私は欽賢堂を作り、古の清潔な知事の画を描き、朝に夕にこれを仰ぎ見ている。我が妹は賢く、理を知る者であるから、きっとこのことを聞いて喜んでくれるであろう」

（直接に妹を諫めるのではなく、兄が清潔であるとの評判を得れば妹は喜ぶであろうと、書いたのである。

このようにやんわりと諭されたら、我が身を恥じて改めるのである）

廉潔は哲人（徳を修めた人）にとっては細事でしかない。しかし、古今の歴史を見るに、国の境での患いはいつも貪ることから生じている。国の境を守る者に廉潔な役人を得たときには、外国も中国も安らかでいられる。だから、廉潔は細事ではないのだ。……（中略）……もしも張公が長く広州を治めていたならば、四海の文物は皆ここに招き寄せられたことであろう。嗚呼。

元符三年七月十一日。

■書聖兪贈欧陽閥詩後

廉州には、欧陽脩と同族であろうと推測されている欧陽闢（字は晦夫）がいた。欧陽闢は梅堯臣（欧陽脩の少し先輩）の門弟であった。欧陽闢は蘇軾を訪ね、41 年前に梅堯臣から贈られた詩を見せた。蘇軾は筆を執ってその詩を書き、この短文を添えた。

（最初に掲げてあるのが「門人の欧陽秀才が江西に遊ぶのを送る」という題の梅堯臣の詩。梅堯臣はこのとき都にいて、科挙に落第した欧陽闢がしばし故郷に帰るのを見送ってこの詩を詠んだ。終わりのところにある「桂の枝が栄える」との言葉の通りに欧陽闢が試験に合格したのは、それから実に 32 年後であったという。蘇軾に会ってこの詩を見せたのはその 9 年後である）

客心如萌芽、（旅心が芽生え始めると）

忽与春風動。（春の風ともにたちまち動いてとまらない（科挙の合否が決まるのは春である））

又随落花飛、（落ちて飛ぶ花とともに）

去作江南夢。（江南（こうなん）に夢を見ようとするのだろうか（科挙に落ちて南方に帰ることを暗示する））

我家無梧桐、（我が家には梧桐（あおぎり）がないから）

安可久留鳳。（その木にしか止まらない鳳凰（ほうおう）（欧陽闢（おうようびゃく）のことをいう）を引き留めることはできない）

鳳棲在桂林、（鳳凰が棲むのにふさわしいのは桂の林（朝廷のことをいう））

鳥哺不得共。（ほかのつまらない鳥とは一緒にならないのだ）

無忘桂枝栄、（桂の枝が栄えること（科挙に合格すること）を忘れないように）

挙酒一以送。（酒を挙げてここに君を送る）

これは宛陵先生（えんりょうせんせい）梅堯臣（ばいぎょうしん）の詩である。

我が父（蘇洵（そじゅん））と梅堯臣が交遊したときには、私と弟はまだまだ若く、世間には全く知られていなかったのだが、梅堯臣が非常に誉めてくれた。我が家には老人泉（ろうじんせん）という泉があり、梅堯臣がそれを詩に詠んだ。

泉上有老人、（泉のほとりに老人がいた）

隠見不可常。（泉はいつもあるのではなく隠れたり現れたりする）

蘇子居其間、（蘇先生（蘇洵（そじゅん））はそこにいて）

飲水楽未央。（泉の水を飲んで楽しみは尽きることがなかった）

泉中若有魚、（泉のなかに魚がいると）

与子同徜徉。（先生とともに気ままに泳ぎ）

泉中苟無魚、（泉の中に魚がいないと）

子特玩滄浪。（先生は波とともに遊んだ）

歳月不知老、（歳月が流れても先生は老いることがなく）

家有雛鳳凰。（先生の家には鳳凰の雛（蘇軾兄弟）がいた）

百鳥戢羽翼、（他の百の鳥は先生の前では翼をおさめて）

不敢呈文章。（あえてものを言うことがなかった）

去為仲尼嘆、（先生は（泉のもとへと）去ったときには世に用いられないことを嘆いていたけれど）

出為盛時翔。（いまこそ勢いよく飛翔しようと（泉のもとから）出てきたのだ）

方今天子聖、（いまはまさに聖天子の時代）

無滞彼泉傍。（泉の傍らでぐずぐずしてなどいられないのだから）

（この詩は、44 年前に科挙を受ける息子二人を連れて蘇洵が上京したときに、梅堯臣が詠んで与えたものであろう。蘇洵は長く故郷に逼塞していたけれども、ついに息子とともに天下に名を馳すときがきたのだと、大いに励ましたのである）

梅堯臣が亡くなって今では四十年になる。

私は南に遷って合浦（がっぽ）（廉州）を過って、その門人の欧陽闢に会った。欧陽闢は梅堯臣の送別の詩を見せてくれた。

欧陽闢は六十六歳、私は一歳だけ下で、ともに髪も髯も真っ白で、困窮するのもほぼ似ている。そこで手を取り合って大いに笑い、

「梅堯臣が鳳凰だと誉めた者も、いずれもこのありさまであるわい」

と、言い合った。

天下の人々は、梅堯臣は詩のために困窮したというが、我等二人は梅堯臣の詩の

ために困窮させられたのである。大いに笑うべきことである。

（梅堯臣の詩風はまことに地味であったけれど、欧陽脩を始めとして宋代の士大夫が梅堯臣こそが宋詩の始祖であると深く慕ったのは、この二つの詩に見られるような温かみが詩の底に流れているからであろう）

■梅聖俞之客欧陽晦夫使工画茅庵己居其中一琴横牀而已曹子方作詩四韻僕和之云

以下、欧陽闢（字は晦夫）に関わる詩をいくつか見る。詩題は、「梅堯臣の客人であった欧陽闢は茅の庵に住み、画師に描かせた画を掲げ、一張の琴が牀の横にあるだけである。曹輔（字は子方）が四韻の詩を作って欧陽闢に贈ったので、私はそれに和した」。

晋の時代の王徽之は、雪に誘われて友の戴逵に会いに行った、

ところが、途中で興が尽きたとして、

一人ひっそりと船をかえしてしまった。

そうとは知らずにいた友は、

長い雪の夜を誰と過ごしたのだろうか。

雪の画を掛けた部屋の中にいる貴君は、

王徽之であるのか、戴逵であるのか。

粗末な衣をはおり、戸を半ば閉ざして、

弦の切れたままの琴を奏でつつ、

鬚をひねってこの詩に和すのである。

（(1) 画は雪を描いたものであったのだろう。蘇軾は雪にまつわる幾つかの故事を引いて、曹輔(そうほ)の詩に和そうとしている欧陽闢(おうようびゃく)のことを詠んでいる。(2) 曹輔の名は第 9 章 189 ページで見ているが、このときに曹輔が廉(れん)州にいたわけではないようだ）

■欧陽晦夫恵琴枕

欧陽闢(おうようびゃく)（字(あざな)は晦夫(かいふ)）から琴枕(きんちん)を贈られたので、この詩を作った。琴枕とは何であるのか、この詩から推測するしかない。

後漢(ごかん)の時代のこと、南方に難を逃れていた蔡邕(さいよう)は、

眠れぬ夜に天井を見上げていて、

その椽(たるき)から竹の良材を見出して笛をこしらえたという。

何時の誰であったのだろうか、

見出したのは周囲が一尺もあろうかという竹、

太すぎるし、ごつごつとしてとても笛にはならない、

二つに割いて袖に入れられる琴にしたらよいだろうと、

琴柱(ことじ)を具えて弦を張ったのだった。

その琴はいろいろなところへと流れ伝えられて、

とうとう陶淵明(とうえんめい)(すなわち蘇軾のこと)のところに到ったのである。

陶淵明その人は、

己の頭巾で酒を漉して、それをそのまま枕にしたというが、

私はこの琴を枕にして眠るのである。

陶淵明が詩に詠んだ琴の名曲『孤鸞』『別鵠』は聞こえてこないにしても、

琴枕に眠る私の鼻息が鼾鼾と鳴り響いて、

自然と曲を奏でることであろう。

（『孤鸞』『別鵠』の曲名を詠み込んだ陶淵明の詩は第 11 章 124 ページおよび第 12 章 60 ページで見ている）

■欧陽晦夫遺接䍦琴枕戯作此詩謝之

これも欧陽闢（字は晦夫）から贈られた琴枕についての詩。琴枕に合わせて接䍦（頭巾）も贈られたことがこの詩題からわかる。

息子を連れて五嶺（嶺北と嶺南を分ける山地）を越えて今は七年、

老いての旅に、黎人の衣冠を身につけるまでになった。

林を通り抜けるときには、白髪頭に藤蔓で編んだ帽子を載せ、

裸足で水を渡るときには、頭上の花飾りを濡らさないよう気遣ったのだった。

古くからの知り合いがそのような姿を見たなら、

きっと驚いて大笑いしただろうが、

ちっとも構いはしなかった。

土地の風俗に馴染むのは、そこの人々を安心させるためであるのだ。

合浦(がっぽ)でこうして貴君と会えたのは夢の中のよう、

鬚を引いて現実であると確かめ、

手を握り合ってともに涙にくれる。

接羅(せっり)を縫ってくれたのは貴君の妻、

その絹地は霧のように細やかである。

琴枕(きんちん)を贈ってくれたのは貴君の息子、

その弦は氷のような染み入る音を立てる。

頭巾を逆さまに載せれば、かの山簡(さんかん)(竹林の七賢人の一人)のように見えようか、

音を出さずに琴を抱いて、かの陶淵明(とうえんめい)に思いを寄せようか。

それよりも、私は汝陰(じょいん)の六一老(ろくいちろう)(欧陽脩(おうようしゅう))を憶(おも)うのである。

その秀発(しゅうはつ)した眉宇(びう)は春の巒(やま)のようで、

羽衣鶴氅(ういかくしょう)(隠者の衣服)をまとった姿は古(いにしえ)の仙人のようで、

二本の柱が高く支える白い絹の頭巾をかぶっていたのだった。

今に至るも六一老の画といえば必ずその姿、

凜(りん)として韓愈(かんゆ)に似て、顔はより赤く塗られている。

あれから先輩方は皆この世を去り、

私は痩せ衰えて、衣はぶかぶか、冠はゆるゆるで傾いてしまう。

貴君の詩は六一老の語に似て、

ときに梅公(ばいこう)(梅堯臣(ばいぎょうしん))の渋さも帯びている。

（(1) 藤蔓の頭巾をかぶり、頭に花飾を載せるのは海南島の先住民の風俗であるという。(2) 後半は欧陽脩の思い出。欧陽脩は汝陰（潁州）に隠棲し、蘇軾がそこを訪ねたのは 29 年前、36 歳のときであった（第 3 章 116 ページ）。(3) 一説には、この詩は終わりの部分が欠けているという。確かに締めの言葉がないようである。(4) 琴枕を詠んだ詩がさらにもう 1 首あるが、故事を羅列した詩で訳すのが難しい。大陸に戻って以前のように人々と頻繁に詩の応酬をするようになると、故事てんこ盛りの詩が多くなるのは致し方ないようである）

■廉州竜眼質味殊絶可敵荔支

廉州で竜眼を食べたところ、その質も味も絶品で、荔支に匹敵するものだったので、この詩を詠んだ。竜眼は荔支に似た果実で、両者を比較した文章を第 11 章 178 ページで見ている。

竜眼と荔支は異なるものではあっても、
その父祖は同じである。
柑に甘と橘があるようなもので、
どちらがよいとかたやすくいえるものではない。
西海のほとり(廉州のこと)は不思議なところで、
仙界の園に琪樹(霊木)が並んで玉を成らせていると見えたのは、
竜眼が桃李の花のように累累と実をつけているのだった。

空から星が隕ちてきたのではないかと疑われ、

実の一つ一つから艶のある乳が流れ落ちてくる。

あるいはこれは真珠で、

故郷の海へと還ってしまうのではないかと心配になる。

竜眼の記述が『図経』という古い地理書にないのは、

遠隔の地にあったためにこの美味が知られなかったからだろう。

それで、皮が皺しわの荔支だけが、

立派な皿の上で輝く色を見せていたのである。

汝が世界の涯にあるのは恥辱ではない、

なぜなら、

楊貴妃に好まれたばっかりに国を滅ぼす一因になったとの汚名を免れたからだ。

（(1) 竜眼からいろいろな空想を膨らませている。廉州（合浦）は昔から有名な真珠の名産地であったから、竜眼から真珠を連想したのである。(2) 荔支にまつわるあまり芳しくない歴史は第11章176ページの詩で見ている）

■合浦愈上人以詩名嶺外将訪道南嶽留詩壁上云閑伴孤雲自在飛東坡居士過其精舎戯和其韻

詩題は、「合浦（廉州）の愈上人は詩が巧みで嶺北にもその名が知られている。愈上人は南嶽を訪れようと、壁に詩を留めて旅立った。その詩に『閑伴孤雲自在飛』（閑に孤雲に伴って自在に飛ぶ）とある。東坡居

士は上人の精舎を過り、戯れにその韻に和した」。南嶽は中国五山の一つの衡山で、五嶺の北にある。

孤独の雲は岫を出て、

伴を求めることはない。

上人の錫杖は空を凌ぎ、

気の向くままに飛んで行ったのだ。

かの玄奘法師は、天竺へと旅立ったときに、

庭の松に向かって、

「私が帰るときには枝を東に向けるがよい」

と、言った。

いま上人の精舎の松に尋ねると、

枝は西を向いている。

まだまだいつ帰るとも知れないのである。

■題廉州清楽軒

蘇軾は廉州の清楽軒に三泊し、この短い訪問記録を壁に記した。

釈迦は(愛恋の情が生じるのを避けるために)同じ桑の木の下で三泊するようなことはなかったという。ところが、東坡居士はここに三泊もしてしまった。

ここを去っての後にも、私がこの清楽軒のことを思うようにと、張仲修知事が考えたからに違いない。

庚辰八月二十四日に題す。

■跋秦少游書

雷州で別れた弟子の秦観（本章 4 ページ）のことを思って、秦観の書にこの跋文を添えた。

秦観の近頃の草書は東晋の時代(書聖といわれた王義之が活躍したころ)の風味がある。詩を作ってはますます奇麗(美的完成度が高い)である。この人を閑にしておいてはいけない。ついには百技を兼ね備えるようになるはずだ。技芸が進んでも道(道徳的完成度)が進まないのならばそれはよろしくない。秦観は技も道もふたつながらに進む者である。

（書、画、詩などの芸術は全人格的な表現であって、人間として優れた者であってこそ優れた芸術を生み出せるのだと、蘇軾は考えていた。秦観はそうした理想の人物に近いと、この跋文で絶賛しているのである。しかし、蘇軾に厳しい後世の学者の中には、秦観のような軽薄な人物と喜んで交わったことが、蘇軾が第一級の人物になれなかったことをよく示していると断じた者もいた）

■記合浦老人語

合浦（廉州）の老人との会話を記録した文章。たぶん蘇軾が創作した寓

話であるのだろう。

元符三年八月、私は合浦（廉州）にあって蘇仏児という老人の訪問を受けた。年は八十二で、酒を飲まず、肉を食べず、両目が爛然と輝いて、まるで童子のようである。老人はこのように言った。

「わしは十二歳で戒律を守って暮らすようにし、修行を始めた。妻はなく、三人兄弟で、皆が戒律を守って道を心に念じている。一番上は九十二歳、次は九十歳だ」

老人は生死の事を論じ、すこぶる知見に富んでいる。町の東南六七里に住んでいる。

ある日、町の東で老人が野菜を売っているのを見た。老人は、

「心に御仏を思え。肉を断つ戒律を守るだけが大事なのではない」

と、言っていた。それで、私は、

「その考えはあまりよろしくなかろう。普通の人たちは得心するのが難しく、安易な方に流れやすいものだ」

と、言った。老人は大いに喜んで、

「確かに、その通りだ」

と、言った。

■与鄭靖老

皇帝が代替わりをしてから、保守派の復権が着々と進められ、蘇軾の処分はさらに軽減され、舒州団練副使（名目だけの官職）として、嶺北の地

である永州に移動することになった。ただし「安置」の処分はまだ解除されなかった。蘇軾は廉州にいること 2 カ月足らずでまた旅に出ることになり、慌ただしくその仕度をする中で、鄭嘉会（字は靖老）に宛ててこの手紙を書いた。鄭嘉会は蘇軾が海南島にいる間に大陸から書物などを送ってくれた人物である（第 12 章 112 ページなど）。

雷州に至って張君俞に会い、貴公の長いお手紙を受け取り、はなはだ欣び、はなはだ慰められましたことは言葉にならないくらいです。廉州に到りますと、ここの知事が言うには、貴公はすでに邕州を去ったとのことで、驚いて所在をあれこれ尋ねましたが、よくわからないでいましたところに、またお手紙を頂戴して釈然としました。新しい詩を拝見し、いずれも秀傑の語、まことに結構です。

お別れしてから百の病に罹り、いちいち言えばきりがありませんし、いずれにしても言うに足りないことばかりです。『志林』（随筆集）はまだ完成していません。『書伝』（『書経』の注釈書）十三巻は草稿ができあがりました。それには貴公よりお借りした書物が頼りとなりました。貴公がどこに行かれたのかわからなかったので、その書物はこちらには敢えて携帯せずに、一つの篋に封じて、息子の蘇邁のところに送って、貴公の場所を訪ねてお返ししようと考えていました。その便がまだないので、広州の何徳順道士のところに寄せ、深く囑んでおります。紛失するようなことは決してありません。

私はここには中秋のころはまだ留まって、たぶん八月末に出発することになるでしょう。北に向かって江にまで至りましたなら、竹の筏を作って江を下り、容州を経て、藤州、

梧州に至るでしょう。邁とは家族を連れてきてもらう約束をして、梧州に至ったときに会うことになるでしょう。次男の迨は恵州に至ることになっています。梧州からは舟を雇って賀江を溯ってから上陸し、水と陸を幾たびか経て永州に至るでありましょう。老いてのこの旅、果たしてどのようになるでしょうか。いつしか会えましょうか。時節柄自重されますように。

（(1) 手紙を届けてくれた張君兪がどのような人物であるかはよくわからないという。(2) 手紙の中ほどで、海南島で取り組んだ著作について触れ、鄭嘉会が島に送ってくれた書物は役だったと礼を述べている。それらの書物は何徳順に託したとあるが、何徳順は広州の道士である（第 11 章 72 ページなど）。(3) 手紙の終わりの部分には、新たな任地である永州への旅の予定が記されている。嶺南の地は地形が複雑で、直線的には移動できない。廉州からまずは水路や陸路を使って北へと進み、潯江に当たったなら東に向かって流れを下って梧州に至る（手紙に竹の筏とあるのは文学的修辞である）。一方で、長男と次男はすでに恵州を発って廉州に向かって移動中で、すでに広州にまで来ていると見られ、長男はそこから家族を連れて潯江を遡って梧州で合流し、一方で次男は恵州の住まいを引き払うためにいったん引き返すことになると、蘇軾は考えていたようだ。そして一家全員が梧州に集結したところで、賀江を北へと遡り、嶺南と嶺北を分ける山岳地帯を越えて永州に向かうのである）

■瓶笙詩

蘇軾が廉州を発つに際して催された送別の宴で、劉幾仲が「瓶笙」を

吹き、蘇軾がこの詩を詠んだ。劉幾仲は廉州の役人で、「瓶笙」は察するに陶器で作ったオカリナのような楽器なのだろう。序文がある。

庚辰の歳の八月二十八日、劉幾仲とともに別れの酒を飲みかわした。觴を重ねる中で、笙簫の声がした。杳杳として遠く、空と雲の間にあるかのようで、抑揚、往返はほぼ音節に中っていた。おもむろに観察すると、対になった瓶から音が出ていて、水と火の作用を得て、自ずと吟嘯するようになったもののようである。しばらくすると音は止んだ。一座の者は驚き、過去に聞いたことがないと感嘆し、『瓶笙詩』を作ってそれを記すよう私に請うたのだった。

瓶笙の声、

それは孤独の松が風に吟じる声、

細く冷冷と響き、

長く長く、仙界の繭が月に達する糸を吐き出すかのように続く。

さながら女仙の女媧の笙である。

かの韓愈は笙を詩に詠んで、

蚯蚓が鳴くとか、蒼蠅が嘯くとか、おかしな比喩を使った、

まことに笑ってしまう。

この瓶の発する音は、宮や商の音階に自然に適い、

作為的なところがなく、かの名人の昭文の琴にも劣らない。

ところが、東坡先生はすでに酔い潰れてしまっていて、

「どうやら耳鳴りがするようだ」

とかぶつぶつ言って、一向に目覚めないのである。

（後半は明るくジョークを飛ばしている。唐代の偉大な先人である韓愈をからかうような言辞を吐くのはいつものことで、それだけ尊敬の念が厚いのである）

■留別廉守

廉州（合浦）を発つにあたって知事の張仲修に別れの詩を贈った。上と同じ宴席でのことであるのかもしれない。

細い葦を編んで豚肉を包み、粘土を塗って焼き上げる。

出来上がった餅はさながら月を嚼むよう、

中に酥と飴が入れ込んである。

この餅を褒めた東坡の詩を、

合浦の人々がいつまでも歌い続けていると、

私が遥か遠くに行ってしまった後にも、

私は聞くことになるだろう。

「さあ、真一酒よ、元気でいるがよい、

　これからも宴席で人々を酔わせるのだぞ」

（送別の宴で、蘇軾のために用意された肉饅頭を褒め、代わりに自作の真一酒（第 11

章172ページなど）を贈ったのである）

■書秦少游挽詞後

蘇軾は8月29日に廉州を発ち、間もなく悲しい報せを受け取った。弟子の秦観（字は少游）が亡くなったのだった。

庚辰の歳の六月二十五日、私は海康（雷州）で秦観と別れた。振る舞いも話すこともごく自然で、普段と少しも異なるところはなかった。ただ自分で作った挽詞一篇を見せてくれたので、人々はそれを怪しく思った。私は、秦観はもとから死も生も等しく、己と外物に区別がないと捉えていて、戯れに挽詞を作っただけで、何ら怪しむに足ることではないと思った。

秦観はその後で（朝廷の指令に従って）北に帰る旅に出て、藤州に至って、八月十二日に光化亭で亡くなった。嗚呼、そのようになると自分ですでにわかっていて挽詞を詠んだのだろうか。

（先に秦観の草書に添えた短文を見たが、それを蘇軾が記したときには秦観はすでに亡くなっていたようである）

■次韻王鬱林

蘇軾は先に鄭嘉会宛ての手紙に記していた道順に沿って進み、9月6日に鬱林県に至り、そこの王知事の詩に次韻した。

老年に至ってからの我が流落は言葉にできるようなものではない。

海のほとりで、自らの手で春の泥をひっくり返す作業もした。

むかし漢の時代に、砂漠の地で戦って捕虜となり、

旗がぼろぼろになっても、白髪頭となるまで生き抜いた者（蘇武のこと）がいた。

むかし秦の時代に、高い地位にあったのだが、

激変する世の中を、自ら瓜を栽培して売ることで生き抜いた者（召平のこと）がいた。

私のこれまでの多難がどうであれ、

それは天の意によるものではない。

苦難から離れて残りの年月を送れるとしたら、

それはすべて皇帝の恩によるものである。

自身の誤りによってできた創をぬぐってくださるとの都からの使者を迎えたけれど、

老いた鶴が再び表舞台で鳴くようなことはないだろう。

（(1) 幾つもの故事を引いて、知事の詩に次韻した儀礼的な作品ではあるが、蘇軾の本心を覗き見ることもできるだろう。(2) 蘇武も召平も蘇軾が好んで引く故事である。とくに、蘇武は同姓であり、同じように長い労苦の末に帰還したことから、この先も何度も引いている。(3) 第 5 句目の「平生多難非天意」（平生の多難は天意に非ず）は、これまでの困難は天の定めではなく自分の過ちが招いたものであるという意味であるのだろうが、蘇軾が間違っていると天が断じて罰したのではないと読むこともできるだろう。(4) 最後の句は、もはや中央政界で活躍するようなことはないと謙遜して言

っているように見えて、政争に巻き込まれるような目にはもう遭いたくないと言っているのかもしれない）

■藤州江下夜起対月贈邵道士

9 月 10 日に容州に至ったところで、道士の邵彦粛に会い、邵彦粛はそのまま蘇軾に同行し、一緒に船に乗って藤州にまで下った。邵彦粛とはこのときが初対面ではなく、海南島に向かう途中で一度会っていたようである。

江のほとりにあって、

月が我が心を照らし、

水が我が肝を洗う。

直径一寸の珠、

あるいは、白玉の盤となって、

月は江の中へと堕ちる。

もとよりそれが我が心であったのだ。

江に月の光が満ちて、

江の水はもはや流れて行こうとしない。

ここに起って舞う者は誰なのか。

李白のように、月と我と影と三人だけと看るのではない。

嶺南(れいなん)は熱毒の地ではあっても、

ここに江の月の寒さがある。

私は知る、

天地の間において、

誰もが清安(せいあん)でいられるのだ。

枕辺に白い濁り酒があり、

白い露がきらきらと満ちている。

独り酔って、また独り醒め、

夜の気(き)が清く漫漫(まんまん)と広がってゆく。

そうだ、邵道士(しょうどうし)を呼んで、

琴を取って月の下で弾(ひ)いてもらおう。

そのままともに一葉の舟に乗り、

夜に蒼梧(そうご)の早瀬を下って行こうではないか。

（(1) 海南島(かいなんとう)から海を渡ったときに「月があかあかと照り輝き、その光を雲がかげらすことはもうない」と詩に詠んでいたが（第12章349ページ）、ここではよりはっきりと月が我が心であるとしている。(2)「立って舞う者は誰なのか」の答えは、天地の間に生きる全ての人である。(3)「蒼梧(そうご)の早瀬」は藤州(とう)から 50 キロほど下流にある。(4) この詩は大陸に帰還して以降の最もよく知られた作品であり、字句が比較的平易であるので、原文と読み下し文を添えておこう）

江月照我心、(江月は我が心を照らし)

江水洗我肝。(江水は我が肝を洗う)

端如径寸珠、(端に径寸の珠の如く)

墮此白玉盤。(此に白玉の盤を墮とす)

我心本如此、(我が心は本より此くの如く)

月満江不湍。(月は満ちて江は湍ら不)

起舞者誰歟、(起って舞う者は誰れ歟)

莫作三人看。(三人の看を作す莫かれ)

嶠南瘴癘地、(嶠南は瘴癘の地なれど)

有此江月寒。(此の江月の寒さ有り)

乃知天壤間、(乃ち知る天壤の間に)

何人不清安。(何人か清安なら不らむ)

牀頭有白酒、(牀頭に白酒有り)

盎若白露溥。(盎として白露の溥くあるが若し)

独酔還独醒、(独り酔い還た独り醒め)

夜気清漫漫。(夜気は清く漫漫たり)

仍呼邵道士、(仍って邵道士を呼び)

取琴月下弾。(琴を取って月下に弾ぜしむ)

相将乗一葉、(相い将いて一葉に乗り)

夜下蒼梧灘。(夜に蒼梧の灘を下る)

（この詩と、先に海南島から大陸に向けて海を渡ったときの詩（第 12 章 348 ページ）を合わせて読むなら、上の詩で見た「平生の多難は天意に非ず」の真意がよりはっきりと見えてくるであろう。蘇軾の心は、とりわけ苦難を経てから後は、月のように澄んでいるのであるから、もとより天が罰するようなことはない。「平生の多難」は人の世に生きる者としては避けられないもので、「平生の多難」を受けてこそ心はますます澄むのである）

■徐元用使君与其子端常邀僕与小児過同遊東山浮金堂戯作此詩

藤州には、10 年前に蘇軾が杭州知事であったときに交流のあった徐疇（字は元用）が知事として赴任していた。詩題は「徐疇知事とその子の徐端常が私と息子の過を迎えて東山の浮金堂に遊んだ。戯れにこの詩を作った」。

昔、徐知事とはともに、
かの天竺寺で杭州の春を愛でた。
この浮金堂の愛すべき風光はまさに小天竺、
やはり立派な高僧が来て開いたのであろう。
ここの松は遠く旅する私のように老い、
この酒は知事に似て醇（心が清く温かい）である。
舟を藤州の町の下に繋いで、

鐔江(たんこう)のほとりで月を愛でる。

江(かわ)の月は夜ごとに好(よ)く、

山の雲は朝ごとに新たになる。

知事にはまことに麒麟というべき立派な子がいて、

私には節くれだって役に立たない材木のような子がいる。

二人の老人は白い頭巾、

二人の若者は黒い頭巾、

老人は酔って松の下の石に伏し、

若者に助けられて江の渡し場へと帰る。

浮き橋が半ば水に沈んでしまったから、

裾をくり上げて、波立つ碧い水を渡ろうではないか。

■送邵道士彦肅還都嶠

道士の邵彦肅(しょうげんしゅく)は蘇軾と同行すること 10 日間ほどで、容(よう)州の都嶠山(ときょうざん)に帰って行った。その送別の詩。

紛紛(ごたごた)の世の中で擾擾(ばたばた)と生きるこの身、

もしも乞いて自由を得られるのなら、

茅の廬を都嶠山(ときょうざん)に結んで、

仙人(しょう)(邵道士)と隣り合うであろう。

貴君は若いときから欲が寡(すくな)く、顔色は常に好(よ)い、

老いても名を求めず、語る言葉はいよいよ真(しん)である。

晋(しん)の時代に、許邁(きょまい)には妻があったけれども、

道(みち)を学んでついに山に遊んだのだった、

――それは貴君のこと。

晋の時代に、陶淵明(とうえんめい)は酒を買う銭がなかったので、

人に仕えたのだった。

――それは私のこと。

貴君は私と同行すること十日、

また山へと帰り去って行く。

この世界が消え去るまでの万劫(まんこう)の時の流れの中で、

貴君と遊ぶこの縁(えにし)を結んだのであった。

■書贈邵道士

邵彦粛(しょうげんしゅく)と別れるに際して、『楞厳経(りょうごんきょう)』にある言葉を書いて贈った。邵彦粛は道士でありつつ、仏道にも通じていたのだろう。

耳は芭蕉の茎のよう、心は蓮の花のよう、百の節があっても穴が通じていて、万の竅(あな)が玲瓏(れいろう)と響き合う。来るときは我が一つの身であっても、去るときには八万四千の門がある。

この義は『楞厳経』にあって、世にはまだ知られていない。

元符三年九月二十日、都嶠の邵道士に贈る。

（蘇軾が記した『楞厳経』の言葉の意味は全くわからないのだが、邵道士とのここでの出会いが美しい詩を生んだのであるから、訳者としては自分の非力を理由にこの短文を割愛するのは忍び難く、とにかくここに掲げることにした）

■将至広州用過韻寄邁迨二子

蘇軾は当初の計画通りに梧州に到達したものの、息子たちの到着が遅れたためにそのまま川を下って広州に向かった。広州にまであと少しというところで、息子の蘇過が 2 人の兄（邁と迨）に詩を送り、蘇軾がそれに次韻した。

皇なる天が、

私を我が家（白鶴峰の住まい）から追い出し（で海南島に行かせ）たのは、

老いに臨んで道を学ばせるためであったのだろう。

いま息子たちのために、

戒律を破って（島を出たこという）、北に帰ってきてしまったのだから、

道を学んだかいもないのであって、

ただただ笑ってしまう。

雲が開かれ、青い空に天の眼が見えてきた、

頭(こうべ)を巡らせても、もう海の水は見えてこない。

南蛮人(なんばんじん)が唱え、黎人(れいじん)が歌う声の余韻は、

なおも耳に遠く響いている。

長男は大勢の幼子を導いて、

四年の間、白鶴峰の家を守ってきた。

次男は病んで医学を学び、

肘を三度折るような苦労の末にそれをほぼ理解するようになった。

三男は自ら耕して私を養ってくれて、

暇を得ると読書に勤しんだ。

私はまたぞろ詩と酒に苦しめられ、

道から去ることいよいよ遥か彼方ということになってしまった。

この紛紛(ごたごた)とした生き方はいつになったら定まるのやら。

行くところがあるのなら、そこで老いればよい。

諸君等もこれからは、

柳宗元(りゅうそうげん)に習って辺境の地の民に詩書を教えるようなことはしなくてよいし、

別段おもしくもないだろうから、山歩きにふけるようなこともしなくてよい。

私と呑気に遊んで暮らし、

せいぜいさっぱりと掃除でもしてくれたらそれでよいのだ。

（(1) 息子に向かって自身の思いをあれこれつぶやいている。(2) 広(こう)州に至る途中で、船の事故があって、大切にしてきた墨を入れた箱が失われてしまったということを陸(りく)

游の随筆『老学庵筆記』が伝えている）

東坡は儋耳から帰り、広州に至るところで、舟が敗れ、墨を入れた四つの箧を失った。平生から宝としてきたものを皆なくしてしまい、息子たちから得た李墨の一丸と潘穀墨が二丸だけとなった。それから毗陵（常州）の捐館舎に至るまで、その三丸の墨だけを用いたのである。

（ここにある「李墨」は南唐の李廷珪が作った墨で、「潘穀墨」は潘衡の墨（第 12 章 224ページ）であるのだろう）

■和孫叔静兄弟李端叔唱和

蘇軾は広州でようやく長男ら家族と合流でき、大勢の人々の歓迎を受けた。広州には、杭州出身でかつて交流のあった孫鼇（字は叔静）がいて、孫鼇がその兄弟や李之儀（字は端叔）と手紙で唱和し合った詩を見せてくれたので、蘇軾がそれに和した。李之儀は、蘇軾がかつて定州知事であったときにわざわざ都から自分のもとに呼び寄せた人物である（第 10 章 371 ページ）。

病んだ骨は痩せて折れそうである、

白い髯は抜けてさらにまばらだ。

喜ぶのは、国政が新たになったと聞いたこと、

その上、懐かしい人々が書いたものを見る。

燭を灯しての宴はまことに夢のよう、

杯を傾けて酒を残すようなことはしない。

天の涯にいるように遠く隔たった老いた兄弟(孫兄弟および蘇兄弟)が、

胸の内を語り合うのはいつのことであろうか。

■広倅蕭大夫借前韻見贈復和答之

広州副知事の蕭世範（字は器之）が上の詩に和したので、それにまた和した。2 首のうち 1 首を訳す。

其の一

流謫の地から生きて還れたのは、

三国時代の虞翻より少しはましだったのだろう。

しかし、早くに官職から退かなかったのは、

漢の時代の疏広と疏受には遠く及ばなかったのである。

これまでは書物を誤って読んでいたのであって、

間もなく死ぬころになってようやく正しい道を聞いたのである。

流謫の日々には、

風や波の音で夜中も起き、

病気と災難が繰り返された。

いま蕭先生が詩を贈ってくださったことで、

我が憂いを少しばかり述べることができた。

（(1) この年の 1 月 7 日に、蘇軾は「三国時代の虞翻と同じように遠く流されたまま赦されずにいる」と詩に詠んでいたが（第12章301ページ）、思いがけず赦免されたのだった。(2) 漢の時代の疏広とその甥の疏受の「二疏」が高位に就くとすぐに 2 人揃って退隠したのは官員の出処進退のあり方の理想であるとして、蘇軾はしばしば言及している（第11章264ページなど））

■書贈孫叔静、書孫叔静諸葛筆、書孫叔静常和墨

上で名を挙げた孫馨（字は叔静）は、筆や墨の逸品を幾つも持っていた。蘇軾はそれらについて短い文章を記している。

今日は孫馨の家で官法の酒を飲み、団茶を烹て、衙香を焼き、諸葛の筆を用いた。どれも北に帰るによって得られた喜びである。

（官製の酒や上等の茶を飲み、貴重な香を焚き、高級な筆を使うといった海南島ではできなかったことがここではできると素直に喜んでいる。諸葛の筆は名品として知られ（第6章80ページなど）、次の文章にも記されている）

久しく海の外にあって、旧くから持っていた筆はどれも駄目になってしまい、ついには鶏の毛の筆も用いるようになった。それは操ろうとしても我が手を拒んで思うようにならなかった。いわば、酷吏（法を過酷に運用する役人）がいくら拷問を加えても魏元忠（唐代の名

臣)が屈しなかったのに似ていようか。今日は孫鼇が使っているところの諸葛の筆を用いたところ、かくも思い通りに書けるので驚嘆した。

(魏元忠は、則天武后のときに権威にへつらわずに直言した人。その存在を煙たがった酷吏によって無実の罪を着せられ、激しい拷問を加えられたが、耐え続けた。むしろ魏元忠に近い立場にあった蘇軾が、魏元忠によって手こずらされた酷吏のように鶏の毛の筆に手を焼いたというところがちょっとしたブラックユーモアになっている)

孫鼇はいつも剣脊墨を用いていて、極めて精妙である。その刻文に「太室常和」とある。常和とはきっと少室山の間道人であろう。間道人は墨を売って得た銭で嵩山に三清殿(道教の寺院)を建てたのだった。その墨は甚はだ堅く、黒い。近年の善い墨では朱覲のものだけがこれに及ぶ。朱覲は九華山の人である。

(「剣脊墨」は背中が剣のように尖った形状をした墨であろうか。太室山と少室山は嵩山の中にある峰)

■王晋叔所蔵画跋尾五首

広州には王晋叔という画の所蔵家がいて、官員として遠く広州に赴任してきていても数々の画を携えていた。蘇軾は王晋叔に何枚もの画を見せてもらい、そのなかから徐熙と趙昌が描いた 5 枚の画に詩を添えた。2 人とも宋代の画家である。5 首のうち 2 首を訳す。

徐熙の杏花

江南の風流人といえば、晋代の王氏と謝氏、

貴君はきっとその末裔であるのだろう、

天の涯ともいうべき広州に赴任するに当たっても、

所蔵するところの書画を携えてきている。

いまの梅雨の時季には彩色は暗くくすんでしまいがちであるが、

徐熙が墨で描いた杏の花は、

かえって洗い出されたかのように照り輝いている。

趙昌の四季の画から躑躅

長江を遡ると、

翠の絶壁に楓の林が連なり、

躑躅が千層にも折り重なって、

そのあでやかさは見るに忍びないほどである。

この画を開くと、

我が帰路がいよいよ近いと知れてくる。

剣南樵叟(趙昌のこと)が丹い色を施したためである。

(蘇軾は赤く彩色された躑躅に特に郷愁を誘われたのだろう。趙昌は「剣南樵叟」(剣南の樵の叟)と自称し、蘇軾の同じく蜀の人であったから、なおさらであっ

た）

■書王公峽中詩刻後

王晋叔の父の王周はかつて蜀に赴任したときに三峡で詩を詠み、それを石に刻んで夔州に置いた。蘇軾はその拓本を見せられ、ますます郷愁の念に駆られてこの短文を記した。

私は蜀の人であるから、夔州のあたりを何度も行き来した。あの山、あの川、あの草、あの木、黙って数え挙げることができる。老病流落して帰る日がないままに、暗い靄の中で、時に夢のように想うだけである。庚辰の歳に、忝くも永州に移ることを許され、南の海を渡って、王進叔公にお会いし、お父上が三峡の石に刻まれた幾篇もの詩を見せていただいた。反復して玩味するに、赤甲、白鹽、灩澦、黄牛のありさまが、くっきりと我が眼の内に在るかのようである。

十月十六日軾書く。

（蘇軾は思い出すままに三峡の地名を挙げている。例えば「黄牛」は第 1 章 28 ページの詩に詠まれている）

■韋偃牧馬図

同じ頃に、王晋叔の所蔵品であるかどうかは確かではないが、韓幹と韋偃が描いた馬の画を見て詩を詠んでいる。韓幹も韋偃も唐の玄宗皇帝の

時代の人。ここでは後者の詩を見ておく。

神の工(たくみ)のような妙技によって描かれた画は、

いずれも天帝(てんてい)のもとに収蔵されてしまう。

王緒(おうちょ)、曹霸(そうは)、韓幹(かんかん)といった名工の画は、

天に行ってしまっていまはどれも地上に留まっていない。

人間世界に残された名画は、

ただ韋偃(いえん)のこの馬の画だけである。

誰にために名馬「驊騮(かりゅう)」を描いたのか。

今に至るまで、馬は楸(ひさぎ)を蹄(ひづめ)でぐいと踏みつけ、

馬飼いは疲れ切って沙丘のほとりに倒れ伏している。

ここはかの沙苑(さえん)(皇帝の牧場)、

秋の草がどこまでも広がり、

馬は駿鬣(たてがみ)を風になびかせ、颼颼(しゅうしゅう)と音を立てて走り回っている。

竜の子のようなこの名馬も、

沙苑ではつまらない駄馬と一緒にされて、

藁や豆を食わされているのを恥じているかのようだ。

王侯の車を引いて手綱で操られるのは馬の望むところではない。

昔から、仁者にも盗賊にもそれぞれに生きたい場所があるのだ。

■衆妙堂

広州にはかねてからの知り合いである道士の何徳順（本章 22 ページなど）がいた。海南島にいる間に、何徳順の依頼で『衆妙堂の記』（第 12 章 144 ページ）を書いているが、その衆妙堂を実際に訪ねてこの詩を詠んだ。

心を静かにしても古の真人（道に達した人、仙人）を観ることはできない。

私はここに衆妙堂の門を観る。

そもそも物は種々雑多であるが、

それぞれ根源に帰るならば、

衆のなかに一があって、

道がそこに存在しているのである。

何道人は晨に起きると東の軒を開き、

趺坐して朝日に一酔する。

その余光が玻璃の盆を照らし、

反射して窓や机を清めかつ温める。

何道人は月の光を身に収め、日の気を食らおうとしている。

しかしながら、我が身中には、もとより日も月もあるのだ。

いったい誰がそれをまた呑まそうとするのか。

（訳者のような俗人にはさっぱりわからない詩である）

■往年宿瓜步夢中得小詩録示民師

広州の役人である謝挙廉（字は民師）は、蘇軾が来たのを千載一遇のチャンスと捉え、自身の著作を携えて蘇軾を訪問した。蘇軾はそれを見ると、昔、揚州の瓜歩に船を泊めて宿ったときに夢のなかで得た句だとして、この詩を書いて渡した。蘇軾は揚州のあたりを何度も通過しているので、夢を見たのがいつのことであったか定めるのは難しい。

呉国の塞も蒹葭に埋もれ、

空しく碧い水の広がりとなった。

隋朝の宮殿の楊柳の並木も、

いまは川べりの堤が残っているだけだ。

春の風は、情の無い水を恨むのか。

風は東に流れる水を吹き続け、

日は西に傾くのである。

（蘇軾がこの詩を書いて渡したのは、時は速やかに流れてしまうものであるから、ますます励むようにとのメッセージであるのだろう）

■与朱行中

蘇軾はサービス精神が旺盛で、広州の東莞県にある資福禅寺を訪ねると、

そこの長老の祖堂に頼まれて、完成したばかり五百羅漢閣の由来を記す文章を書いた。その「羅漢閣記」は特に興味を引くものではないので、そのことについて触れた手紙の一文だけを見ておこう。これ自体はとりたてて面白味のない文章ではあるが、ここで特に取り上げておきたい若干の理由がある。これは朱服（字は行中）に送った手紙の一部である。朱服は改革政治を批判する意見をたびたび述べたために都から遠く離れた地方を長く転々とし、いま新たに広州知事に任命され、任地に向かって南下する旅の途中にあった。このころから蘇軾と朱服との間で何度か手紙が行き来し、後に実際に会うことになる。また、朱服は、第 13 章 350 ページで引用した『萍州可談』の著者の朱彧の父である。

小さなことなのでお知らせするまでもありませんが、東莞県の資福禅寺の長老祖堂が五百羅漢閣を建て、極めて立派なもので、十年かかっていま完成したばかりです。近頃私はその「記」を書きましたので、貴公も行かれたならきっとそれを御覧になるでしょう。……

■答李端叔

蘇軾は家族とともに 11 月初めに広州を発って永州に向かった。永州に移動するよう命じられてから 2 カ月余りが経っていた。白鶴峰の家を処分するなど、旅の準備がそれだけ大変だったのだろう。これはすでに出発

した後で、船の中で李之儀（字は端叔）に宛てて書いた手紙。李之儀の名はすでに本章35ページで見ている。

数多くのお手紙をいただいております。どれも皆届いていますのに、何もお応えしていませんでした。病み衰えて手紙を書くのがひどく億劫になってしまっただけでなく、寒暖を問うだけの交わりは無益なことのように思われもしたためで、貴君までもそこに巻き込んでしまったのは、恥ずかしくて言葉もありません。近く潁昌（許州）の赴かれるとのこと、そして御家族ともども御健勝でありますことを伺いました。

私はこれより永州に移ります。五羊（広州）から大庾嶺を越えて、吉州に出てから陸路をとり、長沙を経て永州に至ります。孫鼛君が人の手配をしてくれ、数十里にわたって船で一緒に送ってくれています。大きな波の中でこの手紙を書いています。ただこの身を保つ以外に何も望みはありません。「酌酒与婦飲、尚勝俗侶対」（酒を酌んで婦と飲む、尚お勝る俗侶と対するよりも）（酒を酌んで妻と飲むのは、俗な客人と向かい合うよりずっとよい）とは、梅堯臣が船の中で詠んだ詩で、ずっとこれを唱えています。

（(1) 李之儀は蘇軾と関係が深かったことから職を失っていたのだが、新たな任を授けられて潁昌に向かっていた。(2) 大庾嶺は嶺南と嶺北を分ける境目で、蘇軾が大庾嶺を越えて嶺南にきたのは6年前である。(3) 孫鼛は先に見た墨や筆の収集家である。蘇軾はいろいろな人に助けられて移動の旅を続けているのである。(4) 梅堯臣（本章9ページ）は家庭を大切にした実直な人で、ここに引かれた句にもその人柄がよく表れている。対して、蘇軾は先に妻を、そして南遷中に王朝雲も喪っていた）

■与程懐立

広州を発ったころに蘇軾は程懐立に宛ててこの手紙を書いた。程懐立は広州の官員。手紙の宛て先は孫馨であるとするテキストもある。どちらにしても広州周辺の地域を巡察する仕事に就いている人物に、蘇軾はある頼みごとをしたのである。その部分を訳出する。

……眉山の人で巣谷という者がいます。字は元修です。かつて科挙や武挙の試験を受けましたがどれも合格しませんでした。篤実で義理に厚い人物で、七十余歳のときに私が海南島に謫されたと聞いて、万里を歩いてでも私を慰めるために訪れようとし、新州に至ったところで病気で亡くなってしまいました。役人が蓆にくるんで葬り、その遺物は官の倉庫に入れられました。巣谷には郷里に息子の巣蒙がいて、私は人を遣わし、巣谷を故郷に葬るよう巣蒙を呼びました。路費を援助したのですが、いま私は南から永州へと行こうとしているところで、さらに援助をしております。巣蒙がまだ到着しない間は、仮の埋葬場所を守る者がいませんので、ややもすると崩れたりして野にさらされてしまうかもしれません。貴公におかれては、巣谷の不幸を哀れんで、巡検の折に新州に行かれたならば、そこの知事に特に一言添えられて、埋葬場所を少しでも修治するようその地を守る者に注意を促す指示を出してもらって、その子が至るのを待つようにするという具合にしていただけるなら、その恩は実に大きなものがあります。……

（(1) 巣谷が蘇軾を訪問しようと郷里を発ち、途中で蘇轍に会った後に新州で病没し

たことは第12章215ページで詳しく見ている。蘇軾はその後のことを、こうして手厚くはからっていたのである。(2) このころに都では蘇軾の処分をさらに緩め、「安置」を解除することが検討されていた。その決定が嶺南に届くのはまだ少し先である)

■伝神記

「伝神」とは「神（真髄、本質的精神）を伝える」で、それから人物の本質に迫って描く肖像画を指すようにもなった。これは肖像画の極意を論じた文章。ここに名が記されている程懐立が上の手紙の相手と同一人物であるとの保証はないが、別人とする根拠もないので、ここに並べて読んでおこう。

伝神（肖像画）の難しさは目にある。

（晋の時代の画師）顧愷之は、（あるとき、人物像を描いて、長い間、瞳を描き入れずにいたので、ある人がそのわけを尋ねると）このように言った。

「形を伝え、影を写すときに、最も肝要なことはすべてこの中（瞳を描くこと）にあるのだ」

目の次には頬骨と頬である。私はかつて燈火の下で自分の頬の影を顧みて、人を使って壁にそれを模写させた。眉や目は作らなかったけれど、それを見る者は思わず笑い出し、それが私であるとわかったのである。

目と頬骨と頬が似るなら、あとは似ないことはない。眉とか鼻や口は、適当に描いても似てくるのである。

人相を見てその人の運勢を見たりする術と伝神とは同じ一つの道(みち)である。その人の「天」(本性)を知ろうとするなら、衆人の中でその人が振る舞いをそっと見るのが最もよい。その人に正装させ、じっと何かを見つめさせたならば、その人は気を引き締め、姿をきちんと整えようとするだろう。それでは「天」を見てとることはできない。

およそ人の意思(気持ちの中心)はそれぞれに存在する場所がある。ある人は眉や目に、ある人は鼻や口にある。

顧愷之は(あるとき肖像画を描いて)このように言った。

「頬の上に三本の毛を加えたなら、精彩がことのほか勝るように思う」

つまり、そのときに描いた人の意思が頬のあたりにあったのである。

(役者の)優孟(ゆうもう)が、(かつての宰相でいまは亡き孫叔敖(そんしゅくごう)のことを王に思い出してもらろうとして)孫叔敖が手を叩いて談笑するありさまを演じてみせたところ、人々は死者がまた生き返ったかのように感じた。優孟は体型から何もかも似せたのではなかった。孫叔敖の意思があるところを捉えただけのことであった。

このような理(ことわり)を悟って画くなら、誰もが顧愷之や陸探微(りくたんび)のように優れた肖像画が描けるようになるのである。

私はかつて僧の惟真(いしん)が描いた曾公亮(そこうりょう)(蘇軾の先輩の大臣)の肖像画を見たことがあるが、始めのうちはあまり似ていなかった。ある日、惟真は曾公亮に会って帰って来ると、非常に喜んだ様子で、

「よし、これでわかった」

と、言って、眉の脇に三本の皺がわずかに見えるくらいに描き加え、首を臥せ加減にし、

視線を上にあげて、顔をややしかめているところを描いたところ、ついに大いに似たのであった。

南都出身の程懐立はその才能を多くの人に称えられている。私の肖像画を描いてくれたところ、大いにその全体の雰囲気を捉えていた。程懐立の振る舞いは学生のようであるけれど、蕭然として筆先の巧みさの外に心を巡らせている者である。それで私はこれまでに聞いてきたことを書いて、その筆の発展を助けるものである。

■和黄秀才鑑空閣

蘇軾は広州からは大庾嶺を目指したが、川を遡る旅は容易にははかどらなかった。広州の町から西に五十里のところにある崇福寺に立ち寄り、川に臨む鑑空閣で黄洞（字は明達）という人物に会い、その詩に和した。

明るい月はもともと自ずから明るく、

無心とはこの境地にほかならない。

月は空に掛る水の鑑、

山や河の姿をそこに写しているのである。

私は大瀛海(大洋)を見たけれども、

巨きく浸して天とともに永く広大であった。

九州(大陸)は天と海の間にあって、

鏡の中央にわだかまる蛇と何ら異なるところがない。

空と水はふたつながらに無質（堅い実体がないもの）、

互いにただ耿（きら）と耿（きら）を照らし合っているのである。

月には桂が生え、兎や蝦蟇（がま）が棲むとかいうのは、

妄りな俗説であって斥けるべきである。

私はここ鑑空閣（かんくうかく）に遊び、

欠けた月がまさにひんやりとしている。

その寒さにも、黄（こう）君は衣をはおろうともしないで、

月に対して句を発して、いよいよ警抜である。

君が流す涙を借りて、私も筆の先を湿らせてみよう。

誰もまだ言っていないようだが、

この崇福寺（すうふくじ）の林こそは、

清絶なこと五嶺（ごれい）で第一であろう。

（嶺南（れいなん）と嶺北（れいほく）をわける山地（五嶺（ごれい））で崇福寺（すうふくじ）が一番であるとは、迎えられた客人としてのリップサービスである）

■題霊峰寺壁

広（こう）州の町から西に六十五里のところにある霊峰山（れいほうざん）に立ち寄ってこの詩を詠んだ。

霊峰山（れいほうざん）の上の宝陀寺（ほうだじ）、

白髪の東坡はまたここに到り来た。

先の世にこの寺にいた徳雲和尚は、いまの私である。

この妙高台をはっきりと記憶しているのだから。

（前の世では僧であったと時折蘇軾は詩に詠む。妙高台からの風景をかつて見たような気がしたので、昔この寺にいたと聞いたばかりの徳雲の名を挙げたのであろう）

■游広慶寺題名

蘇軾は、景勝の地、清遠峡に遊んだ。6 年前にも訪れているが（第 11 章 66 ページ）、せっかくの機会を逃さなかったのである。広慶寺に立ち寄ってこの訪問記録を残した。

東坡居士は海を渡って北に還り、呉復古、何徳順の二人の道士、曇穎、祖堂、通老の三人の長老と、黄明達、李公弼、林子中が広州から送ってくれて、一緒に広慶寺に遊んだ。

元符三年十一月十五日。

（ここに挙げている人物のうち、呉復古（第 12 章 332 ページなど）と何徳順（本章 41 ページなど）の 2 人の道士は何度もその名を見ている。呉復古は蘇軾が大陸に到着した後はしばらく離れていたようだが、広州からまた同行するようになった。曇穎、祖堂、通老の 3 人は恵州の僧で、曇穎の名は第 11 章 110 ページなどですでに見ている。黄明達は崇福寺で会った人物でそのまま付いてきたのだろう。李公弼と林子中は蘇軾が

これまでに交流した人々の中に同じ名の人物がいるが、ここに同行していたとは考えにくいので、別人であろうとされる）

■与謝民師推官書

清遠峡にある峡山寺で、広州の謝挙廉（字は民師）（本章 42 ページ）に宛ててこの手紙を書いた。

先ごろお別れし、またすぐにお手紙を頂戴し、日々うるわしく過ごされていることを審らかにし、深く心が慰められました。

私は生まれながらにふしつけな剛直者で、学問に疎く才能もなく、罪を得て何年も流されましたので、士大夫の方々と敢えてまた交際しないようにしておりました。海の北側に還ってきまして、以前に親しくしていた方々を見ますと、ぼんやりと世を隔ててしまったかのような気がし、ましてこれまで一日のお付き合いもなかった貴君と交わりを求めようなどとは思いもしないことでありました。それが何度もお越しくださって、まるで旧知の間柄であったかようにしてくださいましたのは、望むべくもない幸せで、言葉もありませんでした。

お示しくださったお手紙、詩賦、種々の文章をじっくりと拝見いたしました。全体として、行く雲、流れる水のように、初めから定まった質はなく、行くべきところへと必ず行き、止まらなければいけないところにはきっと止まって、文（文章の綾・飾り）も理も自然のままで、描かれた姿は横生としています。

孔子は

「言の文にあらざるは、之を行うこと遠からず」(言葉に綾がないものは、後々まで伝わりにくい)

と、言い、また、

「辞は達するのみ」(言葉は意味が通じればよい)

とも言いました。

後者だけをみると、言葉は意味が通じればよいのであって、文(綾)がなくてもよいと疑われてしまいますが、それは大きな間違いです。言葉で物をぴたりと捉える妙技は、いわば風を繋ぎ止め、光を捕まえるようなもので、それができて、しかもそれを心にはっきりとわからせるようにできる者は、たぶん千人、万人に一人もいないのです。ましてその言葉を口に唱え、手で書いて、いよいよはっきりとわかるようにできる者はめったにいません。これが「辞は達するのみ」の本当の意味なのです。このようにして言葉の意味が通じるに至るならば、文(綾)はいくらでも用いられるようになるのなのです。

(漢の時代の)揚雄は難しくて意味が深げな詞を好んでつくって、浅くてたわいもない説をそれで文りました。そのまま正しく言えば誰でもわかることをそのようにしたのです。揚雄はまさしくいわゆる「雕虫篆刻」(ちまちま飾り立てた文章を刻むこと)をする者であったのです。揚雄の書いた『太玄経』や『法言』はまさにその類であります。揚雄は賦についてだけは後悔しましたが、それはなぜかというと、一生涯「雕虫」に工夫をこらしながらも、その音節を変化させただけだったからです。揚雄の作品は「経」(模範となる古典)と呼んでよいようなものなのでしょうか。

(揚雄より三百年前の)屈原は『離騒経』を作りました。これは(孔子の編んだ『詩経』の)国風や大雅、小雅を再び変化させたもので、太陽や月の光と競い合うといってもよいほど

に立派なものでありました。その作品は賦に似ていましても、「雕虫」の仲間とするわけにはいきません。（揚雄より百五十年前の）賈誼は、もしも孔子に会ったなら、座敷に上がって語り合うことをきっと許されたでありましょう。ところが、揚雄は、賈誼が賦を作ったことをもって低く貶め、司馬相如と同じ科だとしたのでした。揚雄の見識の狭さはいつもこのようなものです。

よく理解していただける人にはこのようなことを申し上げられますが、俗人と話すのは難しいです。文章について論じて、たまたまここにまで及んでしまいました。

欧陽文忠公（欧陽脩）はこのように言われました。

「文章は純度の高い金であり、美しい玉である。金や玉が市場においてその値段がきちんと定まるように、特定の人が口先でとやかく文章の貴さ賤しさを決めることはできないのである」

ごたごたと書きました。貴君におかれては益のないことでありましょう。はなはだ恥じ入ります。

貴君から所望されました僧の恵力の法雨堂に掲げる字でありますが、私はもとより大きな字を善く作ることができなくて、無理に作ってもきっと佳くはありません。また、舟の中は狭くて、字を写すのが難しく、御依頼のようにはできておりません。

それでも、私はこれから江に臨むところを過って、法雨堂にも行くようになるでしょう。もしも僧に記念に何か書いてほしいと言われましたなら、数句を院中に留めて、貴君が僧を思う意を慰めることといたしましょう。

今日はすでに峡山寺に至りました。ここには少し留まるだけですぐ去りますので、貴君と

はますます遠くなります。ただただ御自愛されますように。

（蘇軾は、謝挙廉には才能があると認め、文章の在り方についての考察をこの手紙に記している。揚雄を厳しく批判していることや、文章の価値は大勢の眼（ここでは市場といっている）で定まるとしていることなども興味深い）

■書羅漢頌後

清遠峡にある宝林寺で記した短文。日付がわかるので訳しておく。

仏弟子の蘇軾は海南島から還り、道に清遠峡の宝林寺を過り、敬って禅月が画いた十八大阿羅漢の像に頌歌を添えた。

元符三年十一月十四日。

（蘇軾が十八人の阿羅漢を描いた画に頌歌を添えたことは第 12 章 229 ページでも見ている。頌歌には蘇軾の仏教に対する理解の深さを見ることができるのだが、そうあるだけに訳者の手に負えるものではないので、訳は割愛せざるをえない）

■何公橋銘

蘇軾は英州に入った。着いたのは、英州の町の中央を貫く大きな川に石の橋がちょうど架けられたばかりのときで、知事の何及之（字は智甫）は早速、記念の文章を書いてほしいと蘇軾に頼んだ。川には、これまで木の橋があったのだが、流れが強くて数年で流されてしまうので、何及

之は苦労の末に石の橋を造ったのである。蘇軾は知事に案内されてその橋を見に行き、その立派さに感心し、4 字 1 句からなる韻文の銘を作った。なお、英州はかつて知事として赴任するよう一度は命じられたところである（第 11 章 1 ページ）。

天地の間、どこにでも水がある。

人は水の上をも往来し、水鳥はそこで暮らす。

水に従って行くなら、雲のように馳せ、鳥のように速い。

水が利をなすときは、千里の距離も一尺のようになる。

乱れる流れを渡るとき、水が膝にまできたらもう止まらなくてはならない。

水が害をなすと、一尺からたちまち千里にも及んでしまう。

川の始まりを見ると、蛙が飛び越え、小魚が渡れるくらいのものである。

しかし、山より溢れ出したなら、禹（治水を成し遂げた聖天子）も恐れたようなことになる。

一本の木では大地を支えられないように、

水は渦を巻き、氷を砕き、雷を走らせ、なすすべもなく、

一つの邦がたちまち二つの島に分けてられてしまい、

互いに犬の声が聞こえいても、もはや行き来できなくなってしまう。

ここに何公が剛毅にも、仁において勇敢で、

石の梁を作り始め、艱難に遭っても勤め続け、

進んでは止まり、さらに百難があっても、

公の心は石のように堅く、鉄よりも堅かった。

公が人の先に立って働けば、民も喜んで使われ、

老いも若きも、まるで我が子を負うかのようにして、石を運んだ。

これは輝く虹であろうか、それとも金の堤であろうか、

欄干が真直ぐに連なり、

百貨がそこを通るようになった。

私が何公とともに橋にくると、

歓びの声が道にあがり、人々は何公の馬の足に抱きついた。

私は感嘆して言った。

「見よ、この滔滔(とうとう)と流れる水を、

何公のように剛の者でなければ、誰がこの橋を造れようか。

願わくは、何公に、橋とともに千年の寿命を与えよ。

再びまたこの英(えい)州の知事として戻ってきて、老人たちの心を慰めよ。

漢(かん)の時代の朱仲卿(しゅちゅうけい)のように、永く土地の人々によって祀られるであろう。

私はこの銘を作るから、英州の子孫は決して忘れないように」

■次韻鄭介夫二首

英(えい)州には、かつて新法に強硬に反対した鄭侠(ていきょう)（字(あざな)は介夫(かいふ)）が流されていた。蘇軾は鄭侠に逢って、その詩に次韻した。

（鄭侠(ていきょう)は蘇軾より4歳若い。かつて王安石(おうあんせき)は改革を始めるに当たって、かねてから知

っていた鄭侠を都に呼んで、意見を聞いた。王安石は鄭侠を自分の片腕として用いる心積りであったのだが、鄭侠は新法の欠陥を幾つか挙げ、王安石に再検討することを迫った。王安石はそれに応えることなく、鄭侠にはつまらない仕事を与えた。改革が始まると、たまたま黄河下流域は干害に見舞われ、飢えた民衆が都に向かって押し寄せた。鄭侠はその悲惨なありさまを図にして神宗皇帝に提出し、改革政治を間接的に批判した。皇帝は強く動揺し、一時期は改革を停止しようとしたために、王安石は責任を取って宰相の職を辞した。しかし、呂恵卿等の改革派が猛然と巻き返しをはかり、改革は続行となり、鄭侠は朝政を謗った罪で遠くに流された。神宗皇帝没後に保守派が復活したきに、蘇轍が鄭侠を赦免するよう強く主張したことで、官職に復帰したのだが、蘇軾が嶺南に流されたのと同じころに英州に流されて、そのままになっていた）

其の一

ひとたび泥の道に落ちると、

その跡はますます深くなってしまう。

一尺の薪を得るのも桂の香木を得るような苦労をし、

まして米を得るとなると金と変わりがないほどだ。

金星は月の近くに光っているが、

暁のなかにむなしく消えて行く。

木星は今年は心の星座にあり、

それは豊年の兆しであるという。

私も貴君も、

かの蘇武が辺境の地で毛氈を齧りながら漢朝の旗を守ったのにも似る日々、

しかし、それでも、

かの鄭尚書がその足音だけで天子に知られたのと同じようになるのには、

何ら妨げがないはずだ。

ぽつんと浮く雲、

飛ぶのに倦んだ鳥、

それは自ずから飛ぶだけ。

涙を落とすようなことはせずに、静かに飛ぶのだ。

（朝政を誹謗したと疑われないよう、慎重に言葉を選んでいるのだろう、何を言っているのかあまり明快ではない。2 人とは同姓の蘇武と鄭尚書の故事を引いて、苦難の末にも再び天子に用いられるであろうと言いつつ、静かに飛ぶ雲のイメージはそれとはやや異なるように感じられる）

其の二

一生の憂患は老境に集まったものか、

貴君の心は驚かされた蚕のように安心して眠ることができない。

たまたま海のほとりに来て、歳月がいつ終わるともなく流れてゆく。

あるいは、葦の間に迷い込み、どうにか岸辺だけは見えていようか。

良い医者になるまでには、肱を三度折るくらいの労苦を経なければならず、

戦に習熟した将軍になるまでには、左右の陣を落とされるような危難がある。

子孫のために、桑、楡、梨、棗を取って植えようではないか。

貴君の寿命が川の水のようにますます増えることを祝うのである。

■提挙玉局観謝表

蘇軾は英州にいる間に、朝奉郎（名目上の官位）に復して、提挙成都府玉局観（成都にある道教の寺院を監督するという便宜上の役職で、いくばくかの俸禄が与えられる。第一線を退いた官員にいわば年金を支給するような意味合いのもの）にするとの朝廷の命令を受けた。ついに「安置」の禁が解かれ、どこに居住してもよいとされた。蘇軾はすぐにこの謝表を書いて朝廷に提出した。

臣は先に、昌化軍の貶所より勅令を奉じて廉州安置に移りましたところ、また廉州より勅令を奉じて舒州団練副使永州居住に移ることになり、今英州に至りましたところで、臣に朝奉郎提挙成都府玉局観を授け、どの地においてでもその任に就いてよいとの勅令を頂戴しました。

臣が七年の間遠くに謫され、万里の向こうから生きて還れましたのは、天の幸いによるもので、罪人の中からたちまち貴紳の仲間へと入れていただくことになったのであります。

伏して念いますに、臣は才能は人に及ばないのに、本性として衝突することが多く、強

情にも自分勝手に小さな忠義を思い込んで、狂ったように妄りに行動して、大難を引き起こしたのでありまして、全てが臣がしたことで、敢えて怨むようなことはないのであります。俄かに真人(新皇帝)による御世が勃興し、万物が改まり始まるときに、臣だけが遠く暗いところにありましたのも、臣の頑迷によるものであったのですが、廃されていたものを起こし、これまでに倍する生成の力を受けて、ついには臣もまた棄てられたままではなくなったのでありました。……(以下、新皇帝を賛美する言葉が並ぶ)……臣は老年に及んで何も求めるものはなく、粗末な暮らしも厭うものではありませんが、いまだ棺が蓋で覆われないうちは、なおわずかながらでも忠義を果たすことを懐うものであります。

■祭呉子野文

英州にいる間に、朝廷からの朗報があった一方で、悲しい出来事もあった。呉復古（字は子野）が亡くなったのである。蘇軾は呉復古のためにこの祭文を作った。

朝奉郎提挙成都府玉局観の蘇軾は謹んで清らかな酒とささやかな食べ物を供え、麻田の呉復古、遠遊先生の霊に申し上げる。

ああ、呉君は世俗とは異なる道を行き、寂かに黙って自ら求め、門を閉ざし、幃を垂らし、座って何もかも忘れ、天台山に隠れたかの白雲先生に似て、あるいは壺の内に隠れたかの壺先生に似て、自在に気を閉ざし、あるいは機を発して、高位の人々とも交わりつつ、何も求めることはなく、渇きも飢えも覚えることなく、道路を家として、ただ義

の赴くところへと帰ったのであった。老いてもなお行き、ついにやめることはなかった。私が北に還るのを送って、その道の中ばで病を得て、薬を飲まず、良い食べ物も斥け、後のことを尋ねても、ただ笑うだけであった。飄然と脱け去り、雲が散り露が晞くように亡くなったのだった。私は何をするのか、ただ感嘆し、すすり泣くのである。酒を注いで、訣れを告げる。舟よ逝け、東に飛べ。

（蘇軾と呉復古の付き合いは長く（第10章324ページ）、特に恵州に謫されて以降は呉復古は頻繁に訪れてくるようになり、とりわけ海南島での生活を支える大きな力となり、島から帰る旅にはほぼ付き添って段取りを整えるのに尽力した。こうしてみると、呉復古は嶺南での蘇軾の日々を助けるために仙界から遣わされて、その役目を終えたので仙界へと帰って行ったかのように思えてくるのである）

■呉子野勧食白粥

呉復古（字は子野）について、海南島を離れてからここまでの間に書いたと思われる短文を見ておこう。

夜、座っていて、どうしようもなく腹が減った。呉復古が白粥を食べるよう勧めてくれた。呉復古が言うには、「白粥は新陳代謝をよくし、膈（胸と腹の間）に利いて、胃を養います。僧家では五更（明け方）に粥を食べるのをまことによいとしています」と。呉復古の粥は実にうまく、食べた後にはすっきりとして、それは言葉では言えないほどである。

■答蘇伯固

自由の身となった蘇軾は英州を発ち、五嶺の大山地へと向かった。6 年前に山地を下ったときには流れに任せればよかったのだが、急流を遡るのは容易ではなく、その苦労の一端がこの手紙に記されている。これは蘇堅（字は伯固）への返書。蘇軾は杭州知事時代に蘇堅と親しくし、嶺南に流されて行く途中に九江で会っていた（第 11 章 31 ページ）。細かい事情は不明だが、蘇堅も朝廷から冷遇されていまは嶺南の地にいて、もう少しで会えるところまで来ているのだった。

お手紙を頂戴し、厚くお心にかけてくださり、感慨に堪えません。お健やかであることを審らかにしました。

今日は(英州郊外の)金山寺の下に至りました。極めて難儀ではありますが、それでも一寸ばかりずつ進んでおります。大きな船に乗ることができ、幼い者たちは助かっています。大きな船が進めなくなったら、小さな船で我慢しないとなりません。

私の人生の終わるところはまだどこだかわかりません。一切は成り行きに任せ、流れに乗って行き、止まるところで止まるだけで、行くも止まるも私が決めるのではありません。

英州を離れるときに玉局観の敕令を受けました。望外の恩遇に感じ入っております。

……(秦観、范祖禹が亡くなったことを悼む文章が続く)……弟はたぶんもう巴陵(岳州)に着いていることでしょう。宮観指揮(蘇軾と同じく、道教の寺院を監督する名目上の職)を得ましたの

で、流れに沿って潁昌（許州）に還ることを計画しています。私がそれを追って行くのは難しいでしょう。先日、途中で風の便りに貴君が下痢したと聞きました、もう安らかに回復されているでありましょうか。

（弟の蘇轍も兄と同じように、処分が順次軽くされ、そのたびに朝廷が新たに指定した場所へと移動する旅を重ねていた。洞庭湖を臨む岳州に至ったときに居住の自由を得て、かねてから退隠する場所として定めておいた潁昌を目指すことになった）

■与朱行中

上の手紙に「大きな船に乗れました」とあったが、それは新たに広州知事として赴任するために南下しつつあった朱服（字は行中）（本章 43 ページ）の厚意によるものであった。蘇軾は英州で朱服と逢い、この手紙にあるように、大きな力を貸してもらったのだった。この手紙はすでに大庾嶺を越えて虔州に着いたときに書いたものであるが、先にここで見ておきたい。

行李を運ぶ従者も貸してくださり、感謝の言葉もありません。ただ、節級（武官の位の一つ）の朱立は無法者で、漁の禁を犯してばかりいて、とうとう逃げ去ってしまいました。林聡は平民を殴って、ほとんど死ぬばかりにまで至り、法に触れることも多くありましたので、もはや連れて行くことはできまいと、虔州の役所に預けました。貴君のお手紙を受けまして、その者もお返しするようにとのことでありますが、貴君にとって難儀なことになるのを恐

れます。貴君は人を雇って自在に使っておられますので、元通りお返ししてよいとのことなのでありましょうか。ほかの二十余人はみな力を尽くして働いてくれて、過ちはありませんでした。どうか罪を与えたりしませんように。困難な旅の間はだいたいこのようなことばかりで、恥ずかしくて、人に言えるものではありません。二艘の船できて、失われた荷物はありませんでした。まことに幸いなことでした。数首の詩を添えますので、お笑いください。

（(1) 朱服は蘇軾が乗る船を手配し、荷物を運ぶ労働者として 20 人以上も貸してくれたのだった。しかし、中には扱いに困る乱暴者もいたのである。(2) 朱服に同行していた息子の朱彧は英州で蘇軾の話を直接聞く機会を得て、そのことを自身の随筆『萍州可談』に記した。海南島からの渡海の様子を記録した文章を 12 章 350 ページで見ているが、その後に続けて朱彧は次のように記している。

> 私は嶺南にいたときに、東坡が北に帰るのに逢った。気貌は衰えておらず、笑って滑稽なことを窮まりなく語った。しかし顔を視ると、土気色をしたところが多く、頬も耳もかさかさであった。別れてから数カ月後に、ようやく陽羨に及んだところで亡くなった。東坡にはもとより憂い患うところがあったし、暑さからくる毒には耐え切れなかっただろう。

（ここに蘇軾の終焉の場所が記されている。詳しくは本章の終わりで見ることになるが、そこは常州の陽羨で、15 年前にそこに土地を得ていた（第 7 章 82 ページ））

■書舟中作字

英州から川を遡って韶州の曲江に至る舟の中で書いた短文。

間もなく曲江に至ろうとして、船は早瀬に入った。船は斜めになったり、横になったりする。船を操る者の百の指が動きまわり、流れに当たる竿の音、岩の音が犖然と高まった。四方を顧みて、どこもが早い流れで波立っている。人々は顔の色を失った。私は字を書いていて少しもたゆむことがない。どうしてなのか。私があまたの変転を経てきたからであろう。それに、筆を置いて起ったところで、ここでは何一つとしてできることがない。しばらくは字を書いている方がましなのである。

■記所書潛珍閣銘

恵州の李思純が川を臨む景勝地に潛珍閣を建て、李思純はその銘を作ってほしいと蘇軾に依頼した。これは、旅の間に作り終えた銘を李思純の息子の李光道に渡したときに書き添えた短文。

私は海を渡り、広州からここ曲江に至るまでの間、北海の進士である李光道が同道して送ってくれた。それはこの文を求めるためであった。それで私はこれを作ったのである。元符三年八月、東坡蘇軾。

（(1) 最後に「元符三年八月」とあるのが正しいのなら、蘇軾が海南島から帰還して廉州にいたころとなる。そうなると、韶州の「曲江」とは地理的に合わない。ある人は、これは「紹聖四年四月」の誤りで、蘇軾が恵州から海南島に行く間のことで、

どこかそのあたりに「曲江」というところがあったとしている。「曲江」という地名は他の地にあってもおかしくはないだろう。一方で、やはり「曲江」といえば普通は韶州のものを指すので、これは「元符三年十一月」の誤りだという説もある。先に、本章 51 ページで蘇軾の同行者の中に李光弼の名を見ているが、実は李光道であったとするとつじつまが合う。以下は訳者の想像。李光道の父は、蘇軾が海南島を出たと聞いて、白鶴峰の家にきっと一度は帰ってくるだろうから、そのときに潜珍閣の銘を作ってもらうと待ち構えていた。しかし、広州までしかこないとわかり、曇潁ら 3 人の僧が行くのに息子を同行させて、蘇軾に銘の執筆を依頼しようとした。蘇軾がなかなか引き受けなかったのか、あるいは李光道としてはこの際できるだけ長く蘇軾と一緒にいたいと思ったからなのか、いつしか韶州の曲江にまで一緒にきてしまったのだろう。

⑵『潜珍閣の銘』を訳しておきたいところではあるのだが、この銘は 6 字 1 句の韻文で、まことに含蓄に富み、訳者の能力では残念ながらどうすることもできない）

■次韻韶守狄大夫見贈

蘇軾が英州から韶州に至るまでの間に、到着を待ち構える何人もの人々が使いの者を派遣し、次々に蘇軾のもとにやって来た。待っていた一人は馮祖仁で、かつて河源県の知事をしていて、道士の陸惟忠を葬った人で（第12章141ページ）、このときは官職を離れて曲江にいた。もう一人は曹渓の南華寺の長老である明老で、南華寺は 6 年前に恵州に向かう旅の途中で立ち寄っていて（第 11 章 63 ページ）、この後再訪することになる。

こうしていろいろな人の導きを得て韶州に到着すると、土地の人々の大歓迎を受け、知事の狄咸（字は伯通）から詩を贈られて、それに次韻した。狄知事を始めとする韶州の人々への挨拶の詩で、故事をいろいろ使って意味が掴みにくいので、2 首のうちの第 1 首の前半だけを訳す。

其の一

唐の褚遂良は南方に流されると聞いて一晩で髪が白くなったという。

私も髪がこの通り真っ白で、

浮き草のようなこの身を大海の中央に置いていたのである。

銭がないので、菜を植えるのを家業とし、

病になれば、心を安らかにするのを薬方としていた。

能のなさは、大きなことを言うだけで何も成し遂げなった漢代の孔融と同じ、

愚かさは、画だけが得意で他には何もできなかった晋代の顧愷之に似ている。

万里の彼方から帰ってきて、私は空しく血の涙を流す。

先の皇帝には、七年の間、宮中の西廊においてお仕えしていたのである。

……

■昔在九江与蘇伯固唱和其略曰我夢扁舟浮震沢雪浪横江千頃白覚来満眼是廬山倚天無数開青壁蓋実夢也昨日又夢伯固手持乳香児示予覚而思之蓋南華賜物也豈復與伯固相見於此耶今得来書已在南華相待数日矣感歎不已

故先寄此詩

旧友の蘇堅（字は伯固）（本章 62 ページ）から、南華寺で待っているとの手紙がきて、この詩を詠んで送った。長い詩題は以下の通り。「私は以前に九江において蘇堅と唱和した。そのときの詩に『我夢扁舟浮震沢、雪浪横江千頃白。覚来満眼是廬山、倚天無数開青壁』（我は夢にみる扁舟の震沢に浮くを、雪浪は江に横たわって千頃白し。覚め来たれば満眼は是れ廬山、天に倚って無数の青壁を開く）という句があった。これは夢がまさしく現実になったことを詠んだのだった。昨日また蘇堅を夢に見た。蘇堅は手に乳の香りのする子を抱いて、私に見せてくれた。目覚めてから考えたのは、蘇堅はきっと南華寺からの賜り物として、また会えると示してくれたのであろう。いま、蘇堅からの手紙が届いて、すでに南華寺にいて、数日間も待っているという。感嘆してやむことがなく、それでまずこの詩を寄せたのである」。得意の夢の話である。九江で唱和した詩は第 11 章 31 ページで見ている。

小舟を震沢に浮かべたのはいつであったのか、

目にいっぱいに廬山を見たのはいつであったのか、

覚めればすべて夢で現実ではなかった……。

晋の謝霊雲は弟を夢に見て秀句を得た、

――貴君と私はそのような間柄であろう。

漢の皇帝は宮中に飛んできた雁の足に結ばれた手紙を得て、

砂漠の地に蘇武が生きているのを知った、

――貴君も私もそのようにして赦されるのだ。

水の香しさから、南華寺に至る曹溪の入り口を知ることができるだろう。

眼を浄くしていれば、達磨が召していたという古い仏衣を見ることができるだろう。

南華寺において香火を捧げるのでなかったなら、

この生が真に帰依するところはどこにもないであろう。

（(1) 蘇武の故事をここでまた用いているのは、蘇軾も蘇堅も同じ姓であるから。(2) 達磨の名が挙げられているのは、南華寺は禅宗の寺で、中国禅宗の開祖は達磨であるとされているからだ）

■南華寺六祖塔功徳疏

蘇軾は韶州から曹溪に入り、南華寺を訪れると、罪を赦されて 6 年ぶりにまたここに戻ってこられたことを感謝する法要を行った。そのときに六祖塔に捧げた文章。六祖塔は唐代の禅僧慧能の墓である。

朝奉郎提挙成都府玉局観の蘇軾は、先に紹聖の初めに、恵州に謫され、南華寺を過り、六祖普覚大鑒禅師（慧能）に上謁して、その後で南に行きました。さらに海南島に謫され、赦免に遇って放還され、いま恩を蒙って前件の官を受けて、再び祖師塔の下に来ることができました。家を挙げてここに詣でて感謝を申し上げ、僧侶にお食

事と沐浴を提供し、御恩に感じる意を表し、また災いを禳って福を集める因ともいたすものであります。……(以上が前置きで、以下に疏文が続く)……

■南華寺老師示四韻事忙姑以一偈答之

蘇軾を迎えた南華寺のこのときの住持は明老といい、詩を得意としていたようだ。詩題は「南華寺の老師（明老）が四韻の詩を示された。何かと忙しく、とりあえず一偈（仏説に基づく言葉）でもって答えた」。

宿業に纏いつかれること五十年、
常に棒で打たれつつ禅に勤めなくてはならない。
いま道教の寺院を治めることとなったから、
仏徒より一つ足りない五通仙人であるのだろうか。

■談妙斎銘

南華寺で蘇軾を待っていた蘇堅は、長老の明老に榻（長椅子）を贈り、それを置いて 2 人は語り合い、その部屋を（たぶん蘇軾が）談妙斎と名付け、『談妙斎の銘』を作った。

（この銘は何が言いたいのか皆目わからないままに訳してある）

南華寺の老翁(明老)は、端静にして簡潔、浮き雲がことごとく払われた後に、ぽつんと

天に掛る月。吾が一族(同姓であることをいう)の蘇堅は、通亮にして英発、立派な玉は磨くまでもなく、天を自由に駆け巡る馬。部屋はがらんとしていて、一つの榻だけが置かれ、そこで二人が語り合うのを聞こうと、人々が町をからっぽにして押し寄せる。二人は必ず仏の教えの妙を説き、たちまち千偈を言うのだが、実は何も説かず、言葉はすべて幻、起こることもなく、滅ぶこともない。私に何を問うのか。氷を彫り、雪を磨けとは何のことか。人々は言葉を作って、あれやこれやと説くが、東坡がどうするのかというと、問いもしなければ答えもしないのである。

■追和沈遼贈南華詩

南華寺には、かつて沈遼が当時の長老に贈った詩が残っていた。沈遼は王安石と意見が合わなくて政界を去り、元豊年間の終わりに54歳で亡くなっているので、蘇軾より数年の先輩である。沈遼がいつ南華寺を訪れたのか不明だが、蘇軾はそれに次韻して、現在の長老である明老に贈る詩とした。

まことによろしいことである、

南華寺の上人は明るい鏡のように全てを知り抜いていて、

私のようなものも厭わずに迎え入れてくださる。

私は陶淵明のように、

「酒があるなら行くのだが」

とかの我儘は言わない。

上人は笑って言う。

「雲は無心であるのに、どうして峰から出てゆくのだろうか」

南華寺は静まり返り、

扉は青い苔に覆われて閉ざされたままである。

■次韻韶倅李通直二首

南華寺の訪問を終えて蘇軾は韶州に戻り、副知事の李公寅（字は亮工）の詩に和した。李公寅は、かつて都で交流があった李公麟（字は伯時）の弟である（李公麟が宋代を代表する画師であることは第 8 章 103 ページ以下に何度も見ている）。

其の一

唐の韓愈は潮州に流されたときに、

残りの旅路はまだどれくらいあるのかとここ韶州で尋ね、

その言葉に恨み事が混じってしまったのを自ら恥じたという。

私はもはや隠者に向かって帰隠の道を問うこともしない。

老いては新たに亡くなる人を悲しむことばかりあるのだが、

ここに帰ってきて、古の人のような貴君にあえたのを嬉しく思う。

かつて兄上のお近くに従ったときに、兄上の髭は白く立派であった。

いま貴君を見るに、ようやく髪が白くなり始めたばかりである。

首(こうべ)をめぐらせば、ここは天の涯のようなところ、

梅嶺(ばいれい)(大庾嶺(だいゆれい))に登って楓宸(ふうしん)(都の宮殿)を望みみたなら、

いかなる気持ちが起こるのであろうか。

（これから登って行く大庾嶺(だいゆれい)から都が見えるはずはないのだが、峠の向こう側は都もその中に入る北嶺(ほくれい)の地なのである）

其の二

青い竜眠山(りゅうみんざん)は古くゆかしい町(李公寅(りこういん)の郷里の舒州(じょ)を指す)の向かいにある。

貴君はそこに住んだらどうかと、

万里の旅から帰ってきた私に勧めてくれる。

かつて私は、兄上(李公麟(りこうりん))が描かれた画によって、

竜眠山の四つの峰に鶴が舞い飛ぶありさまを見た。

これから竜眠山に行けば、

李兄弟が鯨に跨って仙界に遊ぶのが見られるようになるであろう。

貴君らが家の学問として伝えている道教を教わりたいのだが、

私が語るのを聞いておかしな書物を読んでいるといぶかしく思うであろう。

私が丹薬を作ることに成功したなら、

風に乗って竜眠山へと飛んで、貴君に雲の衣を借りるであろう。

（蘇軾は李公寅(りこういん)から郷里の竜眠山(りゅうみんざん)に来ないかと誘われた。竜眠山にある李氏の山荘

は、李公麟が描いた画で蘇軾はかつて都で見ている（第8章265ページ）。魅力的な話ではあるけれども、まさか即座にイエスというわけにはいかない）

■李伯時画其弟亮工旧宅図

李公寅（字は亮工）がかつて住んでいた故郷の家を、兄の李公麟（字は伯時）が描いた画があり、蘇軾がそれを詩に詠んだ。

白楽天は早くに政界から引退し、

いまはどこにいるのだろうか（仙界に行ったのか）。

王維は長く閑雅の時を送り、

それは古からも例の少ないことであった。

白楽天は池のほとりの五畝の地に自分で竹を植え、

王維は自分で描いた輞川の庭の図を見つつ退隠するまでの十年を過ごした。

近頃聞いたのは陶淵明のような兄上が、

竜眠山に隠棲なさろうとしているとか、

そして、貴君は私のためにその一角を提供しようと言ってくださる。

もしも老いの最後の日々を貴君等と暮らしたなら、

我等は湖に雲のように浮かぶ水鳥と見えるであろうか。

■狄韶州煮蔓菁蘆菔羹

韶州知事の狄咸が「蔓菁蘆菔」を煮た羹を作ってくれたのでそれに次韻した。「蔓菁蘆菔」についていろいろな注釈があるが、大根とか蕪とかの類である。

私が昔田舎にいたとき、
寂しい厨のうちに珍しい御馳走があった。
いつも鼎の折れた脚を工夫して支えながら、
花が咲きかけた蕪を自分で煮たのだった。
その後、その味を失ってしまったが、
いま想うと、世を隔てたかのような昔である。
誰が知ろうか、南嶽の老人(狄知事のこと)が、
東坡の羹の作り方を了解していたとは。
中に大根の尻尾があるのは、
暁の露を含んだようなすがすがしさである。
この味わいを貴公子たちに語ってはならない、
生臭さものに酔わせておけばよいのだから。

■題馮通直明月湖詩後

馮祖仁（本章 67 ページ）の父の馮通直がかつて詠んだ「明月湖の詩」の後ろに書き添えた詩。「明月湖」はたぶん地名なのだろう。

馮老(馮祖仁の父)が詠んだ清らかな一篇の詩、

その墨はまだ枯れていない。

小馮(馮祖仁)が新らたに作る語、

それはまことに優れている。

いま児を呼んで硯を洗ってもらった。

君(馮老)に和して、名月湖に響く詩を歌おうではないか。

聞くところでは、

古の牂牁江はいまも形だけは月に似ているけれども、

その光は真珠となって合浦に行ってしまったとか。

私はいま合浦から還ってきたところであるから、

その真珠を名月湖の美しさに添えるのである。

さあ、蓮花の酒を用意してくれたまえ、

かの仙人の王喬のように鳧を履にして、

名月湖の上の空へと飛ぼうではないか。

■書馮祖仁父詩後

馮祖仁の父の詩の後ろにこの短文を書き添えた。蘇軾はよほど馮祖仁の人柄が気に入ったのであろう、絶賛している。

国家は百余年の平和が続き、嶺南からも次々に学者が出ている。しかし、韶州からは、余靖が亡くなった後は次に現れ出る者がいない。唐の時代には、韶州から張九齢に続いて姜公輔も出たのであるから、宋もその例に漏れるものではないはずである。英州の馮氏は多くの賢人、文才ある人を輩出し、河源県知事となった馮祖仁はその父君の七篇の詩を見せてくれた。燦然として唐人の詩の風格がある。馮祖仁の賢は父君から受け継いだものであったのだ。

元符三年十二月十九日。

（余靖は蘇軾より 30 年余りの先輩で、朝廷にあって皇帝に対してずばずばものを言い、欧陽脩がその剛直ぶりを賞賛した。その余靖に継ぐ者が、馮祖仁の家から出るだろうというのがこの文章の含意である）

■書南華長老重弁

南華寺の重弁長老について記した文章。蘇軾は 6 年前に恵州に赴く途中で南華寺を訪れて重弁長老に会ったのだが、今回帰ってきたときには重弁長老は亡くなっていた。

契嵩禅師は常に瞋っていて、人々は契嵩禅師が笑うのを見たことがなかった。海月慧弁師は常に喜んでいて、人々は海月慧弁師が怒るのを見たことがなかった。私は杭州にいたときに、二人が趺坐したまま化した（亡くなった）のを実際に見たのだが、契嵩禅師を荼毗に付したところ、火にも崩れることがなく、薪を増して火を盛んにするのを

五回繰り返しても崩れなかった。海月慧弁師は葬ったときにも、生きているかのような顔で、しかも微笑んでいた。二人がそれぞれ瞋りと喜びをもって仏事をなしていたことがこれからもわかった。

世の中の人々は、自分の身を金や玉のように大切に思って、すぐにそれを泥土にしてしまうことはできないのだが、至人はそうではない。私が思うに、一切の法は愛(執着心)によって壊れてしまい、それを捨てることによって法が常に存在するようになるのではなかろうか。

私は嶺南に遷って初めて南華寺の重弁長老と知り合い、一日中語り合って、道を得た人であると知った。私が嶺南より還ってきたときに、重弁長老はすでに亡くなっていた。南華寺を訪れて寺の人々を弔問し、その塔墓の場所を尋ねた。すると、

「我が師は昔、南華寺の東数里のところに寿塔を作られ、師は他の墓に葬られることを悦ばれませんでした。亡くなって七百余日を経てから、今の長老の明公(明老)は、衆人の止めるのも顧みることなく、我が師が別のよい墓所に葬られておりましたのを土から掘り起こして、寿塔に埋葬し直しました。棺を改め、衣を替えましたところ、お体は生きているかのようで、もとの衣もきれいなままでよい香りがしましたので、衆人は皆畏服したのでありました」

と、言った。東坡居士は、

「重弁長老は己の身を何物とも視ることなく、これを林に棄てて、烏や鳶の餌にするのもよいと考えておられていたので、そもそも寿塔もいらないものであったのだろう。明公は重弁長老をよく知る人で、葬り方はそれぞれ異なるのでよいと考えられたのだ」

と、言った。

そこで、茗果をその塔に供え、このことを書いて重弁長老の弟子で、その塔を守る可興師に渡すものである。

時に元符三年十二月十九日。

（蘇軾は以上の二つの文章を書き終えると、韶州を発って大庾嶺を目指した。馮祖仁が人を手配してその旅を支えたくれたが、山越えは容易ではなく、年の内には嶺北の地に至らなかった）

■九成台銘

建中靖国元（1101）年、蘇軾 66 歳。

1 月 1 日、蘇軾はまだ大庾嶺の手前にいて、韶州知事の狄咸のために、に、このいかにもめでたい『九成台の銘』を作った。

韶陽太守の狄咸が新たに九成台を作った。玉局観の蘇軾がその銘を作った。

秦が天下を合わせてより礼楽が滅んだ。それからは、（古代の理想の天子とされる舜の時代の楽曲とされる）『韶』が演奏されなくなり、すでに千三百二十三年が経った。その楽器が存在していても演奏できる人がいなくなれば、『韶』はすでに隠れたことになり、まして楽器も人もいなくなってもはや伝わらなくなってしまったのである。だから『韶』は亡んでしまったのかというと、実は亡びずに存在している。それは日、月、寒、暑、晦、明、風、

雨とともに天地の間で行われているのである。

(『荘子』の寓話に記されている)南郭子綦がいなくなってからは、「地籟」(大地が奏する音楽)を聞く者がいなくなり、まして(南郭子綦も聞けなかった)「天籟」を聞く者はいなくなってしまったのだろうか。実は耳でもって「天籟」を聞くことはできるのである。すべての形あるものには声があり、どれもが(演奏に使う)羽、旄、干、戚、管、磬、匏、弦となるのである。

試しに(舜が登って『韶』を奏したのとの伝承がある)韶石の上に登り、舜峰の下に立って、渺莽とした蒼梧の地に九疑の山々が聯綿と連なるのを望みみるがよい。江と山が呑んだり吐いたりし合い、草や木が上になびき下になびき、鳥や獣が鳴きあるいは号び、無数の竅が呼吸をして、往来し唱和するありさまが観られるであろう。そこには定まった規律がないようでいながらも、均節が自ずから成り立っているのであって、そこにこそまさしく『韶』の音楽が完全に整って存在しているのである。天下の上に完全を極めたもの(の例示としてこの『韶』の音楽)を示すことによって天下は安らかになり、人はそれに和し、そしてそれに気が応じ、気が応じたものが楽となるのである。それがすなわち(『尚書』に記されている)「『簫』と『韶』が九たび成り、鳳鳥が来て百獣が舞った」とあることの意味なのである。

九成台の上からは、そうしたことが粲然としてことごとく眼の前に見て取ることができるのである。

建中靖国元年正月一日。

(完全な音楽は自然の内にあって、理想の統治はその完全な音楽のようであるというのが古代中国の音楽理念であった)

■南華長老題名記

同じ１月１日に、南華寺の長老の明公（本章 67 ページ）から依頼されていた文章を完成させた。この文章の前半では、儒教も仏教も根源は一つであるという蘇軾および当時の士大夫に共通する考えを展開していて興味深いのだが、訳者には理解が及ばないところがあるのでそこは割愛する。

……南華寺の長老明公は始めは子思や孟子を学び、後に家を棄てて仏門に入った。ものの道理を知らない者は、儒から逃れて仏に帰ったというが、実は明公はなお儒なのである。

南華寺は六祖慧能大師が亡くなってから、その法を得眼の者に伝え、それを四方に広めてきた。だから南華寺を律寺（法を伝える寺）というのである。

宋の天僖三（1019）年に至って、初めて皇帝の詔書で智度禅師を普遂住持とした。今の明公は十一世の住持（長老）である。

明公は東坡居士にこのように告げた。

「知事に就く者は世間の法を行い、仏門にある者は出世間の法を行います。世間はすなわち出世間であって、両者は等しく、二つではありません。知事の伝授の系譜は（公舎庁舎の）壁に掲げる『題名』に記されますが、仏門にはそのようなものがありません。そもそも我が道場は実に仏祖の法を補い伝えるところでありますから、その伝授は厳しくなければなりません。私のためにどうか『題名』を記してください」

東坡居士はそれを引き受け、儒と仏は異なるものではなく同じであることを論じて、これを記すものである。

建中靖国元年正月一日記。

（蘇軾は密州知事であったときに、副知事の庁舎に系譜を記す「題名」を書いている（第5章94ページ））

■英宗皇帝御書頌

韶州滞在中に英宗皇帝の真筆を見ていて、その頌歌をこのころに作った。英宗は三代前の皇帝である。序の部分を訳す。

嘉祐年間に太常博士の周秉は文筆の才によって諸王記室（皇族に仕える秘書）に選ばれ、皇族の賢者の多くから敬愛された。ときに英宗皇帝はまだ（皇太子に選ばれる前で）藩邸にひっそりと住まわれていて、あるとき周秉に手紙を与えたので、周秉の家ではそれを宝としていた。私が曲江を過り、その孫の遠州司法参軍の周超に会ったところ、それを出して見せてくれた。謹んで稽首再拝してその頌歌を作った。……（頌歌は省略）……

建中靖国元年、蘇軾記す。

■東坡居士過竜光求大竹作肩輿得両竿時南華珪首座方受請為此山長老乃留一偈院中須其至授之以為他時語録中第一問

長い詩題は次の通り。「東坡居士は竜光寺を過り、大きな竹を求めて肩輿を作ろうとしたところ、二本の竿を得た。時に、南華寺の珪首座が要請に応じてこの寺の長老になるという。そこで一偈を院中に留めて、珪首座が至るのを待って授けることにした。後にこれを珪首座の語録の中に一つの問として納めてもらえるだろう」。この詩は南宋の曾敏行の随筆『独醒雑志』に記録されていて、この詩題を補うところのある文章が付されているので、それも合わせて訳しておこう。

東坡は北へと帰り、大庾嶺の下に至って、たまたま肩輿の杠が折れてしまったので、竜光寺に竹を求めた。寺の僧は二本の大きな竹竿を与え、さらに東坡を食事に招いた。ときに寺には主の僧がいなくて、州郡は南華寺に行って主僧の派遣を招請したのだが、まだ到着していなかった。そこで、東坡はこの詩を留めて、新たに来る僧に寄せたのである。

竜光寺で二本の大きな竹の竿を斫った。
これを嶺北に持ち帰ったなら、
人は皆、驚いて看るであろう。
竹の中には一滴の曹溪の水がある。
嶺北に至ると、
水が漲って西江の十八灘を生み出すのである。

東坡が後に実際に西江(贛水)に至り、(水量が増えるのを待って)数十日間留まってから舟を出すと、その日には江の水が大いに漲って贛水の岩は一つも見えなくて、一日で十八灘の難所を越えて盧陵に至った。

その後の船旅で、謝挙廉に会ったときに、東坡は「舟で来たときに、江が漲ってついに贛水に岩があるのを見なかった。我が竜光寺の詩はあらかじめそれを歌ったものだったのだ」と言ったので、謝挙廉が詳しく尋ねると、東坡はこの詩を挙げて経緯を話したのだった。

((1) 南華寺は本章 70 ページで見たように曹溪にある。「一滴の曹溪の水」とは新たに竜光寺に来る珪首座の徳の象徴であって、珪首座の徳がいずれ水量豊かな大河のように大きくなってゆくとこの詩はいっているのである。(2)「西江の十八灘」とは、大庾嶺の北にある贛水の急流で、そこを遡ったときのことは第 11 章 41 ページで見ている。(3) 謝挙廉(字は民師)は本章 42 ページで見たように広州にいたのだが、任地が変ったために蘇軾を追い越して北へと移動して行き、そのときに短時間会ったのだった)

■贈嶺上老人

ついに大庾嶺に至り、そこの老人に贈った詩。この詩もまた曾敏行の随筆『独醒雑志』に記されているので、そこにある文章とともに見ておこう。

東坡は帰還して大庾嶺の上に至ると、村の店で少し休憩した。一人の老翁が出てきて従者に

尋ねた。「あのお役人様はどなたでしょうか」。従者は「蘇尚書様だ」と答えた。翁は、「つまり蘇子瞻様でありましょうか」「その通りだ」。すると、翁は挨拶をしながら進んで東坡に言った。「私は人々があることないことを言って公を害ったと聞いておりました。今日、北にお帰りになるのは、天が善き人を佑けられたからなのでございましょう」。東坡は笑って礼を言い、よってこの一詩を壁に記した。

我が骨は鶴のように痩せ、髯は霜のように白く、心はすでに灰となった。

あの一抱えの太さの青い松は、私が植えたものであろうか。

翁に問う、

「貴君が大庾嶺の上に住んでいて、

　かつて南に遷った者の何人が回るのを見たであろうか」

（この詩が蘇軾の作にしては単純すぎるように思えるのは、老翁にわかりやすいようにとの配慮であったのか、ついに嶺北に帰ってこられた感動を即興でそのまま詠んだからであろうか）

■贈嶺上梅

蘇軾が大庾嶺を越えたのは 1 月 3 日から 5 日の間のことだったと推測され、これは嶺の上の梅に贈った詩。

私は梅――

私が開き終わってから、百種の花が開く。

旅人が全て往き終わっても、まだ君は来なかった。

いま君は来て、

酒を温めて飲もうとはせずに、

しきりに青い梅の実を探し出そうとしている。

いまからすでに、

細かな雨に黄色く梅が熟すのを看ようとしているかのように。

（末句は、おそらく梅の実が熟すころには、旅を終えて安住に地に至っているだろうとの思いを込めてのものなのだろう）

■予昔過嶺而南題詩竜泉鐘上今復過而北次前韻

詩題は、「私は昔、大庾嶺（だいゆれい）を過（よぎ）って南に行き、竜泉（りゅうせん）の鐘の上に詩を題した。いままたここを過って北に行き、前の詩の韻に和す」。「竜泉の鐘」とは、峠の近くに竜泉という名の泉があって、そこに鐘があったのだろうと推測されている。南に行ったときの詩は、第 11 章 58 ページで見ている。

あのときは、

黄色い葉が秋の風に巻かれて落ちつつあった。

今朝は、

緑の葉が雨に洗われて清らかである。

人はひたすら帰路を貪っている――それもまあよいだろう。

季節のものはどれも正しい順序になっている――それは中原(ちゅうげん)に近いからだ。

嶺(とうげ)からはゆるゆると下って行こう。

これまでの艱難はやすやすと忘れられるものではない。

遥かに知るのは、

いま都に召し出されているは、

漢(かん)の時代の始めに活躍した叔孫通(しゅくそんつう)のような人だとか。

叔孫通は漢朝の儀礼を新たに定めようと意気込み、

一緒に都に行こうと魯(ろ)国の儒者の三十余人を誘ったのだが、

敢えて行こうとしなかった者が二人だけいた。

私と弟はどちらになるのだろうか。

（叔孫通(しゅくそんつう)は漢朝(かんちょう)の規律を整える上でそれなりの役割を果たしたのだが、蘇軾は権力に迎合した者であるとしてあまり評価していない。皇帝が代替わりし、にわかに保守派が復権しつつある現状を蘇軾は危ぶんでいたのである）

■過嶺

大庾嶺(だいゆれい)を越えての思いを詠んだもう一つの詩。

其の一

しばし南の地にいて、

まだ土地の風俗に慣れ親しまないうちに、

北へと飛ぶに雁に従って、

帰って休むことになった。

兎は万一のときのために三つの穴を備えておくというが、

私はそれをしておかなかったので、

つまるところ「一丘の貉」、元の木阿弥となったのだった。

唐の時代に楊憑が遠く流されたときに、

徐晦だけは罪が及ぶのも恐れずに厚く見送った。

私にはそのようにしてくれる人はいなかった……。

唐の時代に韓愈が潮州に流されたときに、

後にその地の人々は廟を作って韓愈を祀った。

私はそのようにしてもらえるであろうか……。

我が故郷の蜀の地に入る剣関は、

西を望みみて七千里の彼方……

興に乗じて玉局観に遊びに行くのがまことによいのであろう。

（最後の句は、官界においてまたしても政争に巻き込まれるよりは、成都の玉局観の名目上の管理人になったのであるから、蜀に帰るのもよかろうか歌っているのだが、実際に帰郷することは考えていなかった）

其の二

大庾嶺を越えてからの七年間の行き来に、

私はどうして堪えられたのか。

曹溪(南華寺)の水を一勺汲んで、

その甘さをまた味わうことができた。

かつて海外に遷ったのは夢の裏のよう、

酔ったまま知らず知らずのうちに江南に到るのであろうか。

我が足を洗う波は、虚空に音を鳴り響かせ、

我が衣から滴り落ちる翠の気は、霧となってあたりをめぐる。

誰が山の鳥を驚かせたのか、

その声に応じて、

崖からは花が雨のようにはらはらと降ってくるのであった。

（この詩の後半は心象風景を詠んだものであろうがよく理解できない）

■北帰度嶺寄子由

大庾嶺を越えて弟に寄せた詩。

一尺の太さの青い松が、香る梅の間にある。

それはすべて先生(蘇軾)がここから去って後に栽えられたものだ。

松は笑っているのだろう、

先生の手には拄杖のほかには一物とてなく、

空しく帰り来たのであるから。

■跋石鐘山記後

ついに嶺北の地に到った蘇軾は、これより山路を下る旅となり、1月5日に南安軍に到着した。これはその地で司法掾の職にある呉春に贈った文章。

銭唐(杭州)にも東陽(婺州)にも水楽洞があって、洞穴の中を泉が流れ、自然と「宮」や「商」の音律に適った音を奏でている。(杭州の)霊隠寺から下って天竺寺に至って、また上天竺寺に上るところは、山の間の渓の道で、牛や羊のように巨大な岩が磊磊ところがっていて、空間に磬然と深い音を立て、真に鐘の声のようである。

それらはいずれも荘子がいうところの「天籟」(大自然が奏でる音楽)であって、それはあらゆるところに存在しているのである。

建中靖国元年正月五日、海の南より還って南安を過ったところ、司法掾の呉春君が私がかつて作った『石鐘山の記』を筆写したものを見せてくれた。そこで、その末尾のこれを書いておく。

(「石鐘山の記」は第7章33ページで見ている)

■南安人日次旧韻二首

南安軍(なんあん)で人日(じんじつ)（1 月 7 日）を迎え、1 年前の同じに日に詠んだ詩（第 12 章 300 ページ）に次韻した。

其の一

この人日(じんじつ)も川のほとりの村になお留まっている。

春の草がもう出るころになっても、

旅に出た人は帰ってこないと怨んでいるだろう。

詩を題して遠方の人に寄せようと筆を揮い、

杖に扶(たす)けられて高いところに登るために独りで門を出る。

柳の色は看るに忍びない……

ただ感嘆するばかりである。

花の前にくると帰るのを思う……

もう飛び立たんばかりである。

陽(ひ)を浮かべて凍(いて)つきを披(ひら)いたものの、

春の工(たくみ)はいまわずかに技を出したばかり、

それでも一年の営みはここに動き始めている。

（当面の目標としていた大庾嶺(だいゆれい)をいざ越えてみると、前途はまだまだ遥かであることを思って、いささか焦燥感に駆られたようである）

其の二

前の村に気高い隠者がいると聞いた。

私は喜んで春の光を賞し、

桂酒を携えて、日の当たる柴の門を款いた。

その人は、孫を膝に座らせたり、牀に乗せたりして、戯れているだけである。

屏風の間に置かれた金箔を貼った人形はまるで活きているかのようで、

頭の上には花飾りが風を迎えて翻っている。

我が鬢はぼさぼさに伸び、確かに老いてしまった。

新年を迎えたからといってこの旧い顔を改めることはできないのだ。

（このころの蘇軾の様子を伝える記録として、邵博の随筆『邵氏聞見後録』に、劉安世（字は器之）と遇ったことが次のように伝えられている。劉安世とは元祐年間の初めにともに朝廷にいて、そのころは保守派内の抗争が激しく、時に蘇軾が怒りを発して勇み立つと、劉安世が故事を引いて蘇軾を落ち着かせるようなことが何度かあったという）

元符年間の末に至って、蘇軾も劉安世もそれぞれ海南島や嶺南から帰り、道の途中で偶然遇い、楽しく語り合った。劉安世は(そのときの蘇軾の印象を)「浮ついたところや、猛々しいところがすっかりなくなって、昔の蘇軾のようではなかった」と人に語った。一方で、蘇軾は、「劉安世は変わらずに鉄石の人だ」と人に語った。

（(1)　劉安世(りゅうあんせい)に会ったのは南安軍(なんあん)に滞在中のことであったようで、劉安世の存在は蘇軾にとって心強かったのだろう、これから長江(ちょうこう)に至るまで同行することになる。(2)ここの詩に見えるように蘇軾はいささか弱気になっていて、劉安世が語ったように確かに衰えが目立つようにもなったのだろう。蘇軾は島を出てから髪が抜け落ち、精気が薄れたとも伝えられている）

■留題顕聖寺

1 月中旬ごろに南安軍(なんあん)を発ち、顕聖寺(けんしょうじ)に立ち寄ってこの詩を詠んだ。

遥かに広がるまばらな林、

夕暮れの鴉(からす)が集まっている。

とある村に煙が上がる、

仏教の寺院があるのだ。

世の中から隠れ住む人ならここに橘を植えるのもよい。

遠くきた旅人は百結花(ひゃくけつか)(ライラックのような花)をまず尋ねる。

浮石(ふせき)(このあたり)の地名)は冬の後で流れが乾いてしまっているが、

焦坑(しょうこう)(このあたり)の地名)では寒食(かんしょく)の前にもう茶が摘めるであろうか。

ふと疑う、

いま私は夢の中にいて、

故郷に帰ってきているのではなかろうか、

翠(みどり)の竹と白い沙の繞(めぐ)る川べりのこの村こそは……。

■与朱行中

1 月下旬に虔(けん)州に到着した。虔州では幾つかの河川が集まって大きな贛(かん)水(すい)となるのだが、水位が低くて船が出せないというので、しばらくここに留まることになった。その事情を朱服(しゅふく)（字(あざな)は行中(ぎょうちゅう)）（本章 64 ページなど）に送った手紙から知ることができる。

そちら（広(こう)州）に行く者に手紙を託しましたが、きっと届くでありましょう。

このところ雲が停滞して雨が続いております。貴君におかれては御健勝であろうと、遠く想っております。私は貴君の御助力を蒙ってすでに虔(けん)州に到達しました。少し留まって、水かさが増えるのを待って水を渡るつもりです。半月ほどして行くことになるでしょう。

南海は静かに治まり、楽しむに足るところで、貴君はそこで妙なる詩を詠まれて、南から北へと聞こえてくるものと想っています。後にまたいつ会えるともわかりませんが、万万自重されますように。

（ここには、雨が続いていて、半月ほどで出発すると記してあるのだが、水位はなかなか上がらず、足止めはずるずると長引いてしまう）

■鬱孤台

虔(けん)州はこのあたりで一番の都市で、南に向かう旅の途中でもしばらく滞

在していた。再び鬱孤台を訪れ、第 11 章 49 ページで見た詩に次韻した。

吾が生は寄せるが如きのみ。

嶺南も海の外もぶらりと旅をしてきた。

ここより贛水の岩が三百里にわたって連なる。

寒々しく流れる川はいまは五尺の幅しかない。

北に見える楚の山々には霰でも降っているのか。

南の熱気に溢れた地では久しく秋がなかった。

これより行くところを望み見ようとしても雲に断たれている。

我が魂は、

かつていた雪を珍しがるところへと吹き戻されてしまいそうである。

暁の鐘が、時に従って寺から響いてくる。

暮れの太鼓が、町の幾つもの楼上で鳴らされる。

我が帰路は千の山々の間で迷い続けている、

我が命を疲れさせながら百の州を見てまわっている。

昔、南に遠征した軍団の中にいた君子は、

猿や鶴とともに仙界に行ったとか。

私はそうはならずに、

異国から来た商人にでもなった気分でここにしばし留まっている。

とりあえず毛皮の裘が残っているから、

それで取引きして釣舟を買ってみるのも悪くはないだろう。

（(1) 初句の「吾生如寄耳」（吾が生は寄せるが如き耳）は蘇軾の得意の言葉である。

(2) 蘇軾は大庾嶺を越えて南に行くときに、仙界に招かれることを空想していたのだが（第 11 章 58 ページ）、幸いにも帰還してみると、今度は嶺北の地にすぐには馴染めないような不思議な感覚があったのだろう）

■虔守霍大夫監郡許朝奉見和復次前韻

虔州知事の霍漢英と監郡朝奉の許氏が上の詩に和して蘇軾に贈ったので、その詩にまた和した。

大きなこの邦は静かに治まり、

貴君等は小さな部屋でのんびりと詩を吟じている。

雨が注いで贛水が漲るなら、

廉泉には春の水が溢れて流れるであろうから、

よい茶を貴君等とともに烹て、秋からの疲れを洗い流そうと思う。

秋には、故郷の名産の味を思い出して望郷の念が起こり、

冬には、川洲に橘が熟すのを見て初めて冬の衣を身に着けた。

昔の人だってさまざまに苦労があった、

揚雄はいつまで経っても安住できるところがなかったし、

王粲は故国を失って楼閣に登って哀しく歌うしかなかった。

私に残された日々はもう数えるほどしかなく、

夢は幾つもの州を越えて故郷へと帰ってゆく。

私がここから去ろうとしているのは、酒の誘いから逃れるためではなく、

実際に貴君等の詩に和すために、ちゃんとここに留まっているのである。

旧い箧(はこ)に貴君等の新しい詩を入れただけで、

清らかな風が舟いっぱいに満ちる気分となった。

■用前韻再和霍大夫

上の詩に霍漢英(かくかんえい)と許氏(きょ)が和したので、それぞれに詩を返した。霍知事に返したものを訳す。

虔(けん)州といえば、

劉彝(りゅうい)や趙抃(ちょうべん)が流されたところ、

劉彝は詩文を記しつつ酒を楽しみ、

趙抃は川や山を巡り歩いた。

そうしたことは見習うべきこととして父老の間に語り伝えられている。

貴君もまた父祖からよき手本を受け継いでおられる。

私は大庾嶺(だいゆれい)を越えて梅に降り注ぐ雨に会い、

家に還るころには麦の秋を迎えるであろう。

雁を侶(とも)として旅を続け、

川洲で餌を求めるかのようにしてここに留まっている。

野は広く、白い二本の川が横たわり、

堅牢な町に百の楼閣が聳え立つ。

私は道を進む途中で赦免の詔を看て、

思いがけずここ虔州に来ることができた。

貴君の心はすでに呉越の地に赴任することを思っているようだが、

私の旅はどこへ行きどこに留まるのかはまだ定まっていない。

帰りの道でも、とにかく粥は食べなければならないものであるのだから、

知事殿には何はともあれお米を乞い願うとしよう。

（(1) 劉彝も趙抃も改革政治に批判的であったために都を追われて虔州に流されたことがある。趙抃が蘇軾の恩人であることは、第 11 章 167 ページなどで見ている。(2) 霍知事の詩には、蘇軾にとっても馴染みの地である杭州や蘇州あたりに移るのを希望するようなことが詠まれていたのだろう。蘇軾は居住の自由を得たものの、行き先はまだ定まっていなかった）

■贈虔州術士謝晋臣

虔州の術士である謝晋臣に贈った詩。謝晋臣がどのような人であるかは不明。同じ土地に長く留まるといろいろな人の訪問を受けて、あまり面白味のない儀礼的な詩を詠むようになるのは仕方のないことなのだろう。この詩は恵州で作った「周循州に答える」という詩（第 11 章 223 ページ）

から 2 句を流用し、自身を漢代の蘇武に比するというこのころのお馴染み手を使っていて、手抜きのような気もするのだが、それでもとにかく 1 首を構成して贈っているのは蘇軾のサービス精神の表れなのだろう。

砂漠で捕虜になっていた蘇武のように、

私は海の外から帰って来た。

成都で売卜をしていた厳君平のように、

術を得た貴君に尋ねたいことがある。

我が前生は恐らくは慧能のような禅の修行者であったはずなのに、

弟子たちは誤って私を韓愈の再来であるかのように言う。

死んで後には、

私は仏道の奥へと順次進んで行ったと言い伝えてもらいたいのだが、

生まれたときには、

私の星が韓愈と同じ位置にあったために似た運命をたどったのだった。

貴君に頼みたいのは、

我が生涯の年月を占って、

生まれてから死に至るまでの事を全て数え上げてくれること。

（(1) 厳君平の故事は第 12 章 20 ページで、韓愈と同じ星のもとに生まれたということは第 12 章 256 ページで見ている。最後は、相手が占いを得意とする術者であることから、自分の運命がどのように定まっているのかすっかり話してほしいと、戯れに言

ったものである。(2) 同じころに、虔州の景徳寺の栄師に贈った詩があり、仏語を多用していて、私が最も頼りにしている岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳解『蘇東坡詩集』(1927 年) には、「この辺の詩は、すべて東坡晩年に作に係り、御本人は、余程悟り切った積もりであろうが、果して、如何なものか。それに、古今の註家は、仏理にくらいから、箋釈も到底不十分であるし、訳解者に於いては猶更の事であるから、先づ大抵にして片づける外はない」と、真面目とも戯れとも知れぬコメントが付記されている。訳者として完全にお手上げて割愛する以外にない。また、土地の隠者である陽孝本 (字は行先) が蘇軾が鬱孤台で詠んだ詩 (本章 95 ページ) に和したので、それにまた和した詩もあるが、難しい故事を使っていて、やはり割愛する以外にない)

■与宋漢傑

虔州滞在が思いがけず長引くなかで、蘇軾は懐かしい人の息子から手紙を受け取り、この返事を記した。

私は初めて任官したときに、御父上のお手伝いをさせていただきました。御父上に厚く遇していただきましたことは、これまで忘れたことがありません。遠くに流落し、皆様方の御消息を聞くことができずにずっと残念に思っていました。そこに長いお手紙を頂戴し、昔のことにも話が及び、繰り返し慨嘆しております。

三十余年の昔も、昨日の朝のように思えますが、そのころの人々はほぼ亡くなってしまい、私もかろうじて生きて帰れただけです。人の世はひとつの大きな夢で、下を見て上

を向く間に百の変化があるというのは、まことにその通りです。

兄上の唐輔君はいまどこにおられるのでしょうか。まだお手紙を差し上げてはおりませんが、この手紙のあらましをお伝えいただけますでしょうか。

私は水が増えるのを待って進む予定です。

（この手紙にある「御父上」とは、蘇軾が初めて鳳翔に赴任したときにそこの知事であった宋選（第 2 章 35 ページ）である。当時蘇軾は 27 歳であったから、実際には 40 年近い昔である）

■鐘子翼哀詞

虔州では父の蘇洵に所縁のある人と会い、この文章と哀詞を作った。蘇洵はかつて虔州にまできて白楽天の墨蹟を見たのだが（第 11 章 55 ページ）、そのときに同行したのが鐘棐（字は子翼）という人物で、蘇軾はその息子に会ったのである。

私が十二歳のときに我が父は江南より帰ってきてこのように言った。

「私は南の地に遊んで虔州に至った。虔州には隠君子の鐘君がいて、その弟とともに遊び、一緒に馬祖巖に登ったり、天竺寺に入って白楽天の墨跡を観たりした。私は飲めないけれども、鐘君はよい酒を用意してくれた」

このときは、父のことはまた世に知られておらず、万里を旅して、宿屋でよい場所を人に奪い取られてしまうくらいであったのだが、鐘君だけは父は衆人に異なるとして敬ってくれ

たのだった。

それから五十五年が経ち、蘇軾は海南島から還って贛水のほとりを過り、父が巡った跡を訪ねたところ、故老は皆いなくなっていて、鐘君も没してすでに三十一年であった。その子の鐘志仁、鐘志行、鐘志遠に会って、手を取り合って泣いた。

鐘君に哀しみを捧げる者がいないことを念って、この詞を贈るものである。

鐘君の諱は棐、字は子翼。博学、篤行は江南において特に秀でていた。欧陽脩、尹洙、余靖、曾鞏も皆が鐘君のことを知っていたのだが、しかしついに世の中と遇うことなく没したのだった。

かつて儂智高が嶺南で反乱を起こしたときに、その勢いは江西を揺るがすものであったから、虔州知事の曹観は、州の民衆から財産を徴発して戦うための備えをなそうとして、鐘君に相談したところ、鐘君は、

「儂智高はきっと大庾嶺を越えられないでしょう。事がないのに民衆を駆り立てると、民衆は驚いて逃げてしまいます」

と、言った。曹観が、

「いざというときにはどうするのか」

と、問うと、鐘君は言った。

「同じ舟に乗っていて風に遇ったならば、嶺南の人だろうが嶺北の人だろうが左右の手を合わせて使うでしょう。まして同じ虔州の民なのです、不幸にして急な事態に至ったならば、官も民も一つの家の者です。どれが官の財産でどれが民の財産というようなことはもはやないのです。ですから、あえて徴発するまでもないのです」

曹観は納得して徴発を止め、虔州の人々は安らかであったのだった。

……（以下に、鐘君を悼む韻文が続く）……

（途中で名を挙げている欧陽脩（おうようしゅう）ら 4 人はいずれもかつての名だたる文化人である）

■乞数珠一首贈南禅湿老

虔（けん）州には崇慶禅院（すうけいぜんいん）があり、そこに経典を納める蔵を作ったことを記念する文章をかつて蘇軾は書いていた（第 11 章 174 ページ）。その文章中にも名が見えていた長老の惟湿（いしょく）（ここの詩題では「南禅湿老（なんぜんしょくろう）」と記されている）に、この詩を贈って数珠を所望した。

貴僧に従って数珠を求めるのは、

我が老境のもろもろを消し遣るためである。

悟りを得るならば千の仏をも動かすというけれど、

私はまだ千の仏によって動かされるだけだ。

儒生は変化の理（ことわり）を推測して、易（えき）によって天地の移ろいを知り、

道士は宇宙の根源に立って、火と水から仙薬を作り出すとか。

私は老いてしまってそのどちらももはやできず、

永遠の時間を呼吸に内に見ようとするだけである。

黙って坐ってこの塵の世界を閲して、

無限の回数を行き来しようとする。

しかしながら、私が実際に身を寄せるところはまことにちまちまとしていて、

蚕が身を縮めて繭の中にいるようなものである。

たまたま海の上から帰ってきたところ、

ここ崇慶禅院こそは蓬莱島のように清らかなのだった。

（この詩は、この訳だけを読むとそれなりに筋が通っているかのように見えかもしれないが、原詩そのものは訳者にはほとんど理解不能で、いつもの「ずっぽ訳」にすらなっていない。惟湜長老はむろん難なく理解したのだろう、すぐに返事の詩があり、それ以来、「和我弾丸詩、百発亦百反」（我が弾丸の詩に和して、百発して亦た百反る）という具合に、瞬く間に 2 人の間で詩が何度も行き来し、蘇軾が返した詩が 4 首残っている。いずれも訳者にはチンプンカンプンであるので訳すことはできない）

■和猶子遅贈孫志挙

孫勰（字は志挙）という人物が訪ね来て、かつて蘇遲（蘇轍の息子）から贈られた詩を示したので、それに和した。孫勰の父の孫立節（字は君介）と蘇軾兄弟がかねて縁があったことは後の文章に記される。

高官の召す衣や車は大きな鞴のようなもの、

一時代の人々を溶かして鋳型にはめて鍛えるので、

鋳型に身を委ねるならば、饑えや貧しさに甘んじるようなことにはならない。

昔、郗愔は息子を溺愛していたので、

息子が権威者に媚びていたのを、息子が破滅するまで気がつかなかった。

昔、王述(おうじゅつ)もやはり息子を溺愛していたので、

息子が権威者との婚姻関係を結びたいと申し出て、初めて怒りを発した。

私も息子も甥も鋳型にはめられるのを望まなかったので、

身を失って遠く遥かな地に墮(お)ちて、

老いを寄せるところさえないありさまとなってしまった。

十年来の旧友を看て回ると、

わずか数人の者だけが他と異なっている。

孫立節君(そんりゅうせつくん)(孫勦(そんりょ)の父)は他人に依らずに独り立ち、

武人らしく、門には鋭い戟(ほこ)が何重にも交わる厳めしさがあった。

貴君はその奥深くで育ち、

親類や近隣の人々に会うこともなく勉学に励み、

兄弟は皆が秀傑であるなかでも、貴君の英気は第一とされたのだった。

私は海の外から帰ってきて、

崆峒山(こうどうさん)(虔州(けん)にある)の春に間に合ったのを喜んでいたところ、

町の西に住む陽行先(ようこうせん)から珍しい本を借りることができたばかりでなく、

貴君が訪ねてきてくれて、

以前から親しくしていたかのように歓び合えたのだった。

貴君が示された五百言もの清らかな詩は、

どの句もまことに優れていて、

火によって修練するのはまだ十分ではないにしても、

丹砂(たんさ)から銀が生まれ出るのは間違いないであろう。

我が家には息子や甥が六人いて、

素朴な学問を修めて、時代の新しい流行を追うものではないので、

詩文はそれぞれ燦然(さんぜん)と輝いているのだが、

老人の言葉のようにくどくどしいところがあるのかもしれない。

かの六人の子たちを私はいつも忘れることはできない。

なぜなら、私に従ったために何度も災難に見舞われたからだ。

願うのはかねてからの好(よしみ)を敦(あつ)くして、

貴君と六人が、かの竹林の七賢人のように、

永く交わりを結んでもらいたいものである。

■用前韻再和孫志挙

上の詩に孫勲(そんきょう)（字(あざな)は志挙(しきょ)）が和したので、また和して返した。

世に言われているのは、

多数の人の勢いは天に勝るとか、

逆に、天の定めは人に勝るとも言われている。

漢(かん)の皇帝は、寵愛する鄧通(とうつう)に餓死する相があると聞いて、

鉱山を一つ与えて鄧通を大いに富ませてみせた。

乱暴者の郭解(かくかい)は貧乏であったけれども、

将軍も恐れるほどの力を持っていたので、

漢の皇帝は、郭解は本当のところは貧乏ではないのだと言った。

立派な御殿ができてよろこんで巣を作った燕も、

たちまち驚いて逃げ飛ばなければならないことも起こるし、

権威者の陰謀に首尾よく加わって手柄を立てようとした者も、

うっかり露見して冷たい笑い声をあびせかけられるようなことにもなるし、

良縁に結ばれてとんとん拍子で出世を遂げたと思ったら、

旨い酒をしこたま飲んでの夢だったということもある。

世間にもてはやされたり、世間から恥辱をこうむったり、

そのたびに悲しんだり、歓んだり、果てしがないのであって、

つまりは、人間世界を見回すと、

一つとして真なるものはないのである。

私は道観の掃除を命じられたので、

これからは天帝(てんてい)に香火を捧げ、

我が書斎には「思無邪(しむじゃ)」(思い邪(おも)無(よこしま)し)と名付け、

我が座敷には「徳有隣(とくゆうりん)」(徳(とく)は隣(となり)に有(あ)り)と名付け、

どこであれ行くところを郷里とし、

賢者に仕え仁者を友とするつもりだ。

この孫(そん)君は経術に通じ、

漢代に篤学で讃えられた井大春のようである。

楚の地の南のはずれのようなところに孫君が生まれ出たのは、

淑気がここに積もり積もったからである。

唱える詩は高い境地にあって、

この地において和す人は少なく、

私が来なければそれに親しむ者はいなかったのである。

譬えるならば、

嶰谷の竹がいかに優れていても、

かの笛の名手の伶倫がいなければよい音は出ないのである。

俗人の学問は鄙むべきもので、

阿呆な妖怪が戯れるようなことをしてみせたり、

華美で新奇であることばかりを競ってみせたりして、

つまりは、紙に記したものを銀に換えようとするものなのである。

願うのは、孫君は篤実を第一として、

浮ついた言葉やくどくどした言い回しをしないように。

困窮するのも栄達するのも造物者のまま、

得るも喪うも根本においては均しいと知るべきである。

大きな倉に知識を蓄えて、時に及んで順に発揮してゆくように。

（(1) 終わり近くにある「窮通付造物、得喪理本均」（窮通は造物に付し、得喪の理は本より均しい）の 2 句は、いくつかの和陶詩で詠まれていた思考を集約したも

のといえるだろう。(2) 蘇軾は見込みのある青年に出会って、自身の経験から得たものをできる限り伝えたいと思ったのだろう、この詩で懇切丁寧に人生哲学を説いている。孫勰は大いに感動したに違いない。(3) この後、崔甲という人物が自分で書いた文章を携えて蘇軾を訪問し、見るとなかなかに立派なものであったので、尋ねると孫立節の甥であるとわかり、この詩と同じ韻を用いてまた一篇の詩を賦している。その詩は、この詩と同様の主旨で言葉が難しくなっているので割愛する)

■剛説

孫勰の父の孫立節（字は君介）について記した文章。虔州滞在中に記した詩文の中で最も力の篭った作品である。孔子の言葉を引いて「剛」について論じ、孫立節の事績を記している。

孔子は言った。

「剛毅、木訥は仁に近い」

また、このようにも言った。

「巧言、令色は仁が鮮い」

孔子が剛を好んだのは、剛であることそのものを好んだからではない。仁であるのを好んだのである。孔子が佞を悪んだのは、佞であることそのものを悪んだのではないはない。仁でないのを悪んだのである。

私はこれまで多難の歳月を送ってきて、常に身をもってこのことを吟味してきた。災厄か

ら私を免れさせてくれた人は、いずれも何もないときにも慎み深い人であった。私を危ういところに押し落とした人は、いずれも異変のあるときを喜ぶ人であった。私はこのことから剛者は必ず仁で、佞者は必ず不仁であると知ったのだった。

建中靖国の初めに私は海南島より帰り、かねて知っていた人々に会ったり、あるいは存没を尋ねたりして、かねて剛であった人を追って論じてみたところ、ある者は不幸にして亡くなっていたのだった。例えば孫介夫君、諱は立節は、まことに剛の者であったというべき人である。

かつて我が弟は条例司(改革の初めに設置された新法の各条を吟味するための部署)に属する官僚となり、ほかの者と議論が合わなくて身を引いて去ったのだが、そのときに王安石は孫君に言った。「吾が条例司には、まさに貴君のように広く物事に通じて、機敏な者を得たいものである」と。孫君は笑って、「あなたは間違っています。私より勝る者を求めてください。私のような者は、あえて条例司には入ろうとしないのです」と、言った。王安石はすぐに執務室に入ってしまい、孫君も足早に退出した。

それから孫君は(王安石に嫌われて都から遠ざけられて)鎮江軍の書記となり、一方で私は杭州の副知事となって常州、潤州のあたりを行き来したので、孫君とは京口で会ったのだった。新法が実施された初めのころ、官吏を監督する役目の者はいずれも新進の若輩者で、濡れ雑巾をしぼるように役人を馭し、士大夫をまるで礼遇しなかったのだが、孫君のことだけは、「これは丞相に抗ってあえて条例司にならかなった人である」と言って、敬い憚ったのだった。

謝麟が(先住民族である)溪洞の統治に関わったときに、宜州知事の王奇は蛮族の反

乱を鎮めるために戦って死んでしまった。このとき、孫君は桂州の節度判官であったが、朝廷の命令でこの事件で罪のある官吏を取り調べることになった。謝麟は地位の高い者、低い者、合わせて十二人を収監して孫君に託し、吟味した上で全員を斬ってしまおうとしていた。孫君は自分の考えに従ってそのようにはしなかった。謝麟は孫君を罵った。孫君は言った。「裁判は実情をよく吟味しなければなりません。官吏は必ず法を守らなければなりません。ぐずぐずと軍を進めなかったのは、武将たちの罪です。武将たちはすでに罪に伏しています。その上に他の者にまで刑罰を与えるべきではないのです。もし法によらずに人を斬ろうするのなら、貴公自身がなさってください。私は関与いたしません」。謝麟は孫君が拒んだことを朝廷に訴え、孫君は謝麟が裁判に干渉したことをやはり訴えた。刑部では孫君が言う通りでよいとなって、十二人は皆が死なずにすみ、ある者は別の官職に遷ったのだった。私はこれによってますます剛の者は必ず仁であると知ったのだ。不仁の者は、十二人が死ぬばかりのところから一言をもって活かすようなことはしないのである。

孔子の時代には君子が多かったといわれている。しかし、孔子は「まだ剛者を見ない」と言った。剛者はなかなか得られないことをその言葉で明らかにしていたのである。

世間ではこのように言われている。「剛でありすぎるとぽっきりと折れてしまう」。しかし、士が患うのは剛でないことだけである。長く剛を養い成就させようとしてもなお足らないことを恐れるべきである。剛でありすぎるのではないかと心配させて、ぽっきりと折れてしまうだろうと脅かしたりしてはならないのである。折れるか折れないかは天によるのであって、剛であることの罪によるのではない。このように論じるのは、並みの人が剛を失ってしまう

のを心配するからである。

孫君のしたことで記すべきものは非常に多い。ただこの二つの事だけを書いてその子の孫勰と孫勵に贈り、剛者の必ず仁であることを明らかにして、孔子の説が信であることを説くものである。

■与銭済明

虔州にいる間に蘇軾は銭世雄（字は済明）にこの手紙を送った。銭世雄は、蘇軾が杭州副知事であったときからの知り合いで、蘇軾が恵州にいたときには、蘇州副知事であった銭世雄は卓契順を使者として送っていた（第11章128ページ）。それ以降何度か手紙の行き来があり、蘇軾が海南島を出てからも折に触れて銭世雄から手紙が来ていた。銭世雄は恐らく蘇軾との交際が問題視されたのだろう、蘇州副知事を解任されて故郷の常州に帰っていた。常州には以前に蘇軾が買った土地があり、かつて長男や次男がしばらくそこに住んでいたこともあるので（第11章30ページなど）、銭世雄は蘇軾に常州に来ることを強く勧めたのだろう、この手紙では常州に住むと決めようとしていると書いている。

私はすでに虔州に来ていて、二月十日あたりにここを離れるでしょう。今回の旅の終わりには常州に行って住むと決めようと思っています。ただ、郡中にちょうどうまい具合に買い取ることのできる家があるかどうかわかりません。もし住居がないのならば、真州に

行ってもよいでしょうし、舒州でもどこでも構いません。常州の東の門の外で裴氏の邸宅が売りに出されていると聞いたことがあります。しかるべき筋の人に問い合わせて、もし住居にできるのなら、価格を尋ねて力の及ぶ範囲であれば、すぐに交渉することになるでしょう。金陵（南京）に着いたなら、また別の人を遣わして相談したいと思います。もしこのことが遂げられたなら、貴君とは杖をついて往き来できることになり、我が残りの歳月を楽しく過ごせるでありましょう。……（以下、他の人の消息などが記される）……

（(1) 常州に住むとまだ決まったわけではなかった。これから必ず通ることになる長江沿いの真州であってもよいし、舒州に来るよう李公寅に誘われているし（本章 74 ページ）、弟の蘇轍が向かいつつあった潁昌（許州）（本章 63 ページ）に行くことも一つの有力候補としてあり、むしろ常州よりも潁昌の方がより実現性があると蘇軾は実は考えていたようだ。(2) ここで皇帝が代替わりしてからの弟の蘇轍の動きを簡単にまとめておくと、元符 3（1100）年 2 月、やはり嶺南の地である循州に置かれていた蘇轍は、処分を緩められて永州安置となり、大庾嶺を越えて移動する途中で、4 月に岳州に移るよう命じられてそのまま北上を続け、11 月に居住に自由を得た。このときにはすでに長江沿岸まで到達していた蘇轍は、以前から土地を得ていた潁昌（許州）に住むことを決め、翌年の春、つまり蘇軾が虔州に滞在している間に、潁昌に到着していた。もしも、兄弟が居住の自由を得るのがもう少し早かったならば、蘇轍は虔州あたりで兄の到着を待つこともできたのかもしれないのだが、2 人はわずかな差で会えずに相前後して北上したのだった。(3) 蘇軾が虔州に到着したころの 1 月 14 日に向皇太后が亡くなった。保守派の復権を進めてきていた向皇太后が亡くなったことは蘇軾兄

弟の運命に影響するようになる）

■端硯石銘

南華寺で会った蘇堅（字は伯固）（本章 68 ページ）の子の蘇庠が父の手紙を携えて虔州にまできたので、端渓の石で作った硯を贈って、この銘を添えた。

蘇堅の子の庠、字は養直は妙齢で異才がある。この端渓の硯を贈る。その銘に曰く。

私の友に三つの優れものがある。渓から取った石、松を変化させた煤、竹から作った筆。蓬麻の紙に、山の泉の水のような墨を滴らせる。（筆に任せて線が）折れるなら折れよ、曲がるなら曲がれ。我が直を全うさせる（本性のままに表現する）のである。

■答蘇伯固

蘇堅（字は伯固）からの手紙への返事。

人が来てお手紙を頂戴しました。お別れしてからの日々の佳勝をお聞きし、心が深く慰められます。親しい方々のことを思い、帰心が募ります。それよりよいことはないのでしょう。まだ計画は定まっていませんが、安らかな気持ちになりたいものです。貴君のお心を知ったからには、それにお応えすべきでありましょう。近いうちに黄寔君に会って相談

することになるでしょう。

私は虔州に留まることすでに四十日になります。舟はあってもなお贛水のあたりにいます。苦労も費えもなかなかのものです。病のために長く臥せったり短く臥せったりしながらも、幸いにもいつも癒えております。しかし、従者がすでに六人も亡くなりましたことには驚かされました。

住まうところは舒州でなければ常州なのでしょう。老病の身でありますから、ただ退隠するのが上策です。弟はすでに潁昌に帰り着いたと聞きました。またいつ会えますことか。何はともあれお健やかでいてください。

（文中に名の挙がっている黄寔は蘇轍と姻戚関係があり、このころ長江中下流域で官職に就いていて、その手助けを得たらどうかと蘇堅からアドバイスがあったのだろう）

■次韻江晦叔兼呈器之

上の手紙にあったように、虔州滞在はすでに 40 日を超え、いますぐにでも発ちたいと思っていたのだが、さらに 20 日ばかりも留まらなければならなかった。その間に新しい虔州知事として江公著（字は晦叔）が赴任してきた。江公著とは旧知の仲で、蘇軾が杭州知事であったときにも会っている（第 9 章 177 ページ）。江公著が詩を詠んだので、それに和して劉安世（字は器之）にも示した。劉安世は南安軍で会ってから（本章 93 ページ）一緒に虔州に来ていた。江公著も劉安世も気心の通じる友人であ

ることからこれは楽しい戯れの詩である。

劉君が言うには、

「空を横切ってゆくには、

何も鵬とか 鰲 とかに跨がるまでもありません、

胡床に座っているうちに、

一歩ごとに高くなってゆくのですぞ」

これは枕に就いての夢。

私は春の夜の夢に、

ちっぽけな舟に乗って海を渡って行った、

あたりに波はなかった。

帰ってきたら、

何とまた茶顛の江君に会ったのだった。

私は病ばかりが多いのだが、

何とあの酒顛の劉君が、陶淵明に倣って酒を止めたのだった。

私は笑いながら自慢する。

「南の涯というところはですな、

ちょうどいまごろに、

庭にはらはらと 榕 の葉が下るのですぞ」

（この詩には、蘇軾自身の手による以下の三つの注が付いている。①劉安世はかつ

て夢で飛んだ話として、自身の身体と椅子が空中に浮きあがるのを感じたと言った。②かつて私は杭州にいたときに、江公著に「(唐代の) の陸羽は茶 顛 でありましたが、貴君もまったく同じですな」と言った。③陶淵明に『酒を止める』という詩がある。劉安世は若いときには誰も敵う者がいないくらいに酒を飲んだのだが、いまはまるで飲まなくなった。陶淵明の詩は第 12 章 10 ページで見ている)

■寒食与器之遊南塔寺寂照堂。

3 月 4 日の寒食の日に劉安世（字は器之）と南塔寺の寂照堂に遊んでこの詩を詠んだ。

町の南から響く(南塔寺の)鐘と太鼓の音、

いつも清く新しい音を闘わせている。

これこそが南の涯に流された者の熱い塵を洗ってくれる。

流された者とは、いま(南塔寺の)鏡空堂に上った客、

その誰が仏道の奥深い境地に達するのだろうか。

暁に目覚めさせる風によって、

紅い花びらが地を掃って飛び行き、

緑の葉が蔭をいっぱいにつくるころに、

雨が春を洗い去ってしまうのだろう。

さあ、杏の花よ、

来年の寒食のときにも、覚えておいてくれ、

かつてこの翁と隣に並んでいたことを。

（この翌年に、杏の花は悲しく記憶を呼び戻さねばならなかったのである）

■和代器之

劉安世（字は器之）は詩があまり得意ではなかったようで、蘇軾の上の詩に和そうしなかったので、ならばと、蘇軾が劉安世に成り代わってこの詩を作った。

雨が町の外の原を過ると、

一段と新たな雰囲気になる。

春の花を尋ねる車や馬が通っても、

塵ひとつ立たない。

今日は寒食であるから、

天のもとでは、昔からどこでも冷たい食事をすると決まっているのだが、

我等二人だけはこの静かな寺での遊びに興じている。

唐の時代に嶺南に流された沈佺期は、

都の新しい暦では清明節はいつなのかと詩に詠んだけれど、

我等はその真似をして嘆くようなことはしない。

やはり唐の時代に南方に流された宋之問は、

寒食の日に春の終わりに感じる入る詩を詠んだのだが、

我等もそれには同調するものである。

来年は梨の花の開く都において、

群賢や四隣の人々と宴席を設けることになるであろうか。

■南安軍学記

同じ日に、南安軍の学校に関するこの文章を記した。

古には国の為すべきことが四つあった。井田(古代の土地制度)、肉刑(身体を害う刑罰)、封建、学校である。いまは亡んでしまい、かろうじて学校だけが残っている。

古には学校で為すべきことが四つあった。そのうち大きな二つは士を取ることと、政を論じることで、小さな二つは楽器の演奏と、詩歌を誦じることであった。いまは亡んでしまって、わずかに誦じることだけが残っている。

……(以下に、幾つかの経典を引用して上の命題を展開する)……

古には士を取り政を論じることが必ず学校で行われていた。士を取らず政を論じないのなら学校がないのと同じであった。後漢の時代には学校がこれまでになく盛んで、学校で学ぶ士が数万人もいて、人を活かすも殺すも学校の士の言論次第で、朝廷の高官もその前には頭が上がらず、その行くところを常に見定めなければならなかった。士を取り政を論じることにおいては古に近かったのだが、突如として「党錮の禍」(宦官との政争に敗れ、気骨のある儒家は国に反逆する者として獄に下された)が起こったのだった。それ

は王者の政が為されていないままに士が私意をもって下において勝手に振舞ったためでであって、禍に敗れるのも当然のことだったのである。

宋の朝廷は慶暦、熙寧、紹聖以来、三度にわたって学校に意を注ぎ、都から遠く離れたところにも必ず学校が置かれるようになった。南安軍は江西地方の南の境にあって、儒術が盛んであることは閩や蜀などと等しく、そこに地方を治める手腕で名高く、行く先々で学校を建てていた曹登が知事として来たのであるから、南安軍の学校は江西地方で第一となったのである。曹登は仁の人で、義において勇で、学校を建てることは自分の責任ある仕事であるとして、困難をものともせずに、期限を設けて必ず作りあげた。土地の士はそれを見て感動して発奮し、自ら建設に力を尽くした。官が用意した費用は銭九万三千で、それ以上の助力は必要としなかった。学校には百二十の部屋があり、礼殿、講堂も具わって、大きな邦の君主の住まいのようである。学校になければならないものは全て揃い、数百人に食事を与えられるようになっている。紹聖二年の冬に建設を始めて四年の春に完成した。学校ができて曹登は去り、いまは潮州の知事となっている。

私は海南島から還って南安軍を過り、以上のことを詳らかに聞いた。士は曹登の徳を称えて止まず、その本末を並べただけでなく、糧を包んで三百里余りも私に従ってきて、この事実を記すよう願った。

学校を建てるのは王者の仕事である。だから(訳を省略した部分にあったように古代の聖天子の)舜が学校を始めたのである。しかし、舜の事績は遠く、近づくことはできない。しかし、知事が賢人であるならば(やはり訳を省略した部分にあった)鄭子産のようにはなれるのであ

る。学問に勉めるならば、古の人に愧(は)じるものではないのだ。

建中靖国(けんちゅうせいこく)元年三月四日、眉山(びざん)の蘇軾が書く。

（(1) 慶暦(けいれき)年間に学校建設を主導したのは范仲淹(はんちゅうえん)で、熙寧(きねい)年間には王安石(おうあんせき)と神宗(しんそう)皇帝が、紹聖(しょうせい)年間には復権した改革派が主導した。慶暦年間の施策が十分な成果を挙げなかったことは第 3 章 15 ページで触れている。王安石の提議した学校および科挙の改革について蘇軾が強く反対したことは第 3 章 32 ページで見ている。(2) 終わりにあるように南安(なんあん)軍の人が蘇軾に付いてきて執筆を頼んだのは、蘇軾の書いたものは士大夫(したいふ)の間で広く読まれて影響力があったからなのだろう）

■絶句

寒食(かんしょく)の後で詠んだ詩。

桑畑に囲まれた侘しい旅宿で春が暮れてゆき、

思いはいつまでも尽きない。

屋根の角で鳩が鳴き、雨が降ろうとしている。

昨日はすでに寒食(かんしょく)の後の火をつけたのだが、

花を吹く風が起こり始めたために、

一枚また衣を羽織ることになった。

■器之好談禅不喜遊山山中筍出戯語器之可同参玉版長老作此詩

劉安世（字は器之）とはうまが合ったのだろう、戯れの詩をまた詠んでいる。詩題は「劉安世は禅を語るのを好み、しかし山に遊ぶのは喜ばない。山中に筍が出たので、劉安世を山に誘い出すために、戯れに一緒に玉版長老のもとに参ろうと言ってこの詩を作った」。玉版長老とは何か、この詩に詠まれている。

ここは、昔、懐海禅師がいた百丈山のような林だ。
ここで法統を嗣いでいるのは、
見ての通り、「横枝」である。
石がごろごろする道も恐れずにきたのは、
横枝の中でも抜きん出た「玉版師」に参禅するためなのだ。
私は柏の樹によりかかって、
「ほら、あれが玉版師だよ」
と、籜竜児（筍の異名）を指さす。
瓦礫からも禅をよく語る貴君が、
「横枝」も「玉版師」も筍の異名であるとは、
よもや知らなかったわけではあるまいに。

（劉安世は計略にはまって山に連れて行かれたのだが、新鮮な筍を焼いて食べさせられて、その日を楽しく過ごしたのだろう）

■書秦少游詞後

昨年の秋に亡くなった秦観（本章 25 ページ）が夢の中で作ったという詞を書いてそれに短文を添えた。

秦観はかつて処州にいたときに、夢の中で詞を作った。

山路雨添花、（山路にて、雨が花に寄り添うと）

花動一山春色。（花が動いて山全体が春の色になります）

行到小溪深処、（進んで小さな谷の奥深いところに到ると）

有黄鸝千百。（無数の鶯が鳴いています）

飛雲当面化竜蛇、（雲が湧き立って見る見る竜に変化し）

夭矯転空碧。（うねうねと空の青へと広がってゆきます）

酔臥古藤陰下、（酔って古い藤の陰の下に臥すと）

了不知南北。（南も北もわからなくなります）

供奉官（武官の名）の儂沔は湖南の人であるが、左遷された人に喜んで従って旅をするので、呂陶（蘇軾と交流のある人）も褒めている人物である。秦観のことをよく知っていて、詳しく話してくれて、私にこの詞を教えてくれて、涙を流したのだった。それでこれを書いて

渡した。

建中靖国元年三月二十一日。

（(1) ある随筆によると、雷州に流されていた秦観は罪を赦されて北へと帰る途中、藤州の光華亭で酔い、目覚めて泉の水を汲んで飲むと、そのまま亡くなった。上の詞がその運命を示していたのだとされた。(2) 儂沔は秦観の従者として、その最後の日々を見聞きして、蘇軾に語ったのだろう。(3) 呂陶の名は第 8 章 222 ページで見ている）

■王子直去歳送子由北帰往反百舎今又相逢贛上戯用旧韻作詩留別

蘇軾が恵州にいたときにはるばる虔州から訪ねてきた王原（字は子直）がいた（第 11 章 160 ページ）。その王原に贈った詩。詩題は、「王原は去年、弟が北に帰るのを送って、行き来すること百回にも及んだ。いままた贛水のほとりで逢ったので、戯れに以前の韻を用いて別れの詩を作った」。「百回」というのは無論誇張であるが、蘇轍が帰るのに何かと力を尽くしたのだろう。「以前の韻」とは第 11 章 160 ページで見た詩のことである。

(かつて恵州に向かったときに)私は米が尽きてしまい、

衣を質に入れて救ってくれようとする人もなかったのだが、

貴君だけは万里の道を送ってくれたのだった。

(虔州から)舟を出すにあたって、

また貴君と連れ立って行きたく思っているので、

家に帰って奥方を相談してきてほしい。

聞くところでは、丹薬がもう火の上でできているとか。

だから頭が真っ白になるのも気にかけていないのだ。

しかも、山辺に田があって、鶴も飼っているのだから、

朝廷で俄か成り金が出世しようが気にも留めないのである。

(王原が実際に蘇軾に同行したかどうかは明らかではない)

■虔州呂倚承事年八十三読書作詩不已好收古今帖貧甚至食不足

詩題は、「虔州の呂倚承事は年は八十三、書を読み詩を作ってやむことがない。古今の帖（書家が書いたものを綴じた冊子）を収集するのを好み、ひどく貧乏で、食べる物にも事欠くほどである」。「承事」は退官した人に与えられる名誉職である。

漢代の大学者であった揚雄は老いて男子がなく、

漢代に文才をもって聞こえた馮衍は最後まで不遇であった。

呂翁もまた金銭とはついに縁がなく、

たった一人の娘がいるだけである。

家には古今の帖を蓄え、

箱は墨の色で照らされている。

飢えが来て、何もない机によりかかったまま、

煮て食える文字は一つもない。

からっぽの腸がごろごろ鳴っているのを、

五千巻の書物によって支えているのである。

蜩(ひぐらし)や蛩(こおろぎ)のような声を立てて詩を吟じ、

時に賈島(かとう)や可明(かめい)(二人とも唐代(とうだい)の詩人)のような名句を吐くのである。

呂翁のために村の長者にいおう、

徳を守って年齢を重ねた人は敬うべきで、

まして呂翁のような人は世に何人もいないのだから、

わずかばかりでもよいから時には支援していただきたい。

■次韻江晦叔二首

思いがけず虔(けん)州で多くの日を費やした蘇軾は、ようやく 3 月の終わりに劉安世(りゅうあんせい)とともに出発した。これは虔州知事の江公著(こうこうちょ)（字(あざな)は晦叔(かいしゅく)）の詩に次韻したもの。この詩をいつ詠んだのかはっきりしないが、虔州を発ったときの作と見ることもできなくはないので、そういうこととして訳す。

其の一

私は老い、家はどこにあるのか。

幸いにも、風雨を呼ぶ竜は眠っていてくれて、

天候に恵まれて出発できることとなった。

酒を載せた船が李白（りはく）を送り返したように、

私は船で帰って行く。

官を辞した陶淵明（とうえんめい）を子供らが出迎えたように、

私を待っていてくれる者がいる。

幸いにも、仙人のような劉（りゅう）君が一緒であり、

たちどころに詩を吟じる江（こう）君が見送ってくれたのだ。

小さな楼閣での送別の宴に劇飲し、

月が昇るのを見て、参（しん）の星が横たわるまでに至ったのである。

其の二

川の南の岸辺からの鐘や太鼓の音、

夢から驚いて目覚めると、

私は海の外からここに帰り来ていた。

浮き雲のように世間の事は改まり、

一つの月のようにこの心の明るさは変わらない。

いまは盆を傾けるかのように雨が落ち、

詩は水を翻すかのようにたちどころに完成する。

二つの川は争うようにして旅人を送ってくれて、

木の杪の先に橋が横たわるのがもう見えてきている。

（(1) 岸辺に起こった鐘や太鼓の音は、蘇軾を見送るためのものであるのかもしれない。(2) 其の一では「竜は眠っている」と詠んでいたが、其の二では雨が激しく降っている。それによって、虔州の北で合流する二つの川（貢水と章水）の流れが速まり、これまでの滞りを取り戻そうとするかのように船は一気に進んだのであろう。そして、水かさが増したことで、十八灘の難所の岩も水に沈んで速やかに越えることができたのだった。この後で、謝挙廉に追い越されたのである（本章85ページ））

■与孫志同

虔州を発つに当たって孫勲（字は志挙ないし志同）（本章105ページ）に書いた手紙。

衰え朽ちて困窮した者には、昔親しかった友人も振り返らないといいますが、貴公は遠く訪ねきて、二カ月にわたって旅の泊りを重ね、厚く尽くしてくださいました。明日の朝に出発すると決めました。貴公はきっと見送りに追ってこられるかと思いますが、古いことわざに、「千里遠く送っても、つまりは別れることになる」といいます。私も貴公も道を学ぶ者でありますから、いつまでも恋々とするのを望みません。まして貴公は家を離れて行き来することすでに千里にも及びます。決してここから先も自身で舟を漕いで付いてこられたりしませんように。

（孫勲の家は虔州の虔化県にあって、虔化県は蘇軾が滞在していた虔州の中心地とは五百里余り離れている）

（何遠の随筆『春渚紀聞』には、虔州での逸話として次のようなことが記録されている。

先生が海の外から還って贛水のほとりに至って、川の南に寓居していた日々に、町のあたりを行くときには先生は薬を入れた嚢を携え、疾病のある者に遇うと必ず薬を出して与え、あわせてその処方を教えた。寺観に至ると、好事の者や僧侶や道人などで公の墨跡を欲しがっている者が、先生が遊びに行くところをあらかじめ探って、佳い紙を用意して、紙の終わりに自分の名前を記して机に積み上げて、威儀を正して先生の来るのを待っていた。公はそれを見ると笑い、何も問うことなしに筆に任せて紙に墨を潤し、紙にある名に従って人に与えた。日の暮れ方になって書くのに疲れても、まだ机の上の紙が多く残っていることがあったので、笑ってこのように言った。「もう日が暮れてしまう。小さな字で一つ一つ埋めていったので全部の紙を書き終えることはできまい。名前とか念仏とかでもよいと思う者はそう言ってほしい」

結局、先生が帰るまでに、皆は満足して喜んで散っていたのだった。

■与程徳孺

虔州を発った後で程之元（字は徳孺）に宛てて書いた手紙。程之元は母方の従弟で、かつて何度も交流があり（第 10 章 294 ページなど）、恵州で和解した程之才（第 11 章 108 ページ）の弟である。このときは江淮六路発運

使という、長江、淮河流域の広い範囲の経済運輸を監督する職務に就いていた。

近ごろ特に使いの者を虔州にまで派遣して、遠く季節の衣服や寝具を贈ってくださり、またお手紙も添えてくださり、感謝いたします。ここのところ佳き日々を過ごし、おのおの健やかであります。水が増えるのを待って贛水を下り、いま南康軍に到着するところです。旅程を計るに四月末ごろに(長江沿いの)真州に到ることでしょう。そのときに息子邁を宜興(常州)に行かせて荷物を取ってこさせ、瓜洲に船を泊めて戻るのを待つつもりです。

程君は発運使の任務にありますから、常州、潤州のあたりを回られて、金山で落ち合って遊ぶことができますでしょうか。患難の末に、老いた兄弟がまた集まれたなら、広い世間にも珍しいこととなりましょう。

((1) 真州から長男の蘇邁を常州に行かせて自身は揚州の瓜洲で待つといっているのは、揚州から大運河を北上して弟のいる潁昌（許州）へ行く心積りであったのだろう。(2) 金山は真州より少し下流にある名所。蘇軾も何度も訪れていて、ここで程之元に会えたらと思ったのである)

■与黄師是

同じ頃に黄寔（字は師是）に与えた手紙。黄寔の名はすでに本章115ページで見ているように、黄寔の娘は蘇轍の息子と結婚していて、蘇軾兄

弟と姻戚関係にある。一方で、黄寔自身は改革派の重鎮である章惇の甥であることから、保守派と改革派の両方の中心人物と親戚関係にあるという微妙な立場にあった。蘇軾兄弟と関係が深かった者が皆流罪になる中で、黄寔は章惇のお蔭で罪に落とされることは免れたものの、朝廷には留まれずに地方官として出ていた。先に蘇轍が潁昌（許州）に帰るに当たって力を尽くし、いまは蘇軾の帰還を支えようとしてたびたび手紙を送ってきていた。ここに訳したのは、黄寔からの手紙に章惇が雷州に流されることになったと書いてあったことへのコメント。雷州は先に蘇轍が流され、また海南島から帰った蘇軾が亡くなる直前の秦観と会った町である（本章 3 ページ）。

章惇君が雷州に行かされると聞き、驚きがその日いっぱい続きました。雷州は遠く離れたところではありますが、瘴癘の流行はありません。弟はそこに一年住んでいてはなはだ安穏でありました。このことをお母上にお聞かせして、心配の種を取り除かれますように。

（ここにある「母上」とは黄寔の母、すなわち章惇の姉ないし妹である。かつての親友で、後に政敵となって蘇軾を海南島にまで流した当の人物に対して、蘇軾が悪しざまにものを言うことはない）

■永和清都観謝道士童顔鬢髪問其年生於丙子蓋与予同求此詩

永和鎮に至り、この詩を詠んだ。蘇軾自身の注で「私は劉安世と一緒に虔州を発った。江の水はたちまち清く漲り一丈余りの深さになり、贛石は三百里に渡って一つも見えなかった。永和鎮に至って、劉安世は舟の纜を解いて先に行き、私は独りで清都観に遊んでこの詩を作った」と添え書きがある。詩題は「永和の清都観の謝道士は童顔で髪がふさふさしていて、生まれた年を問うと丙子というので、私と同じであった。詩を求められたのでこれを詠んだ」。

唐の時代に賀知章が官を辞めて江東に帰ったときに、
皇帝は鏡湖を与えるとの勅書を記した。
その賀知章のような貴公は、
西の玉局観に帰ろうとしている私とはまるで似ていない。
私は旅の枕にいまだに春の夢から覚めていないのである。
貴公は清都観で黙って天界にいる境地に達している。
私は佳いところを見つけると息子を連れて必ず訪ねるのだが、
試みに貴公に流れた歳月を問うと私と同じであった。
私の残りの歳月は何によって過ぎ去って行くのだろうか。
笑って思うのは、
たちまち篙半分の深さにまで澄んだ水が漲って、
百の難所が空しくなったことから知れるのではないだろうか。

■順済王廟新獲石磬記

4 月 4 日、蘇軾は呉城山の順済竜王の廟の下に船を泊めた。蘇軾が南へと旅する途中で順済竜王に救われた伝説があることは第 11 章 36 ページで見ているが、帰路にもまた奇異なことがあった。

建中靖国元年四月甲午(四日)、私は儋耳から北に帰って、舟を呉城山の順済竜王祠の下に泊めた。

祠へと進んで礼を尽くし、戻ってきてから川のほとりを逍遙していると、古い鏃か槊の先を拾った。その刃の部分は鋭くて肉を裂くほどであるが、その素材は石である。

私はこのように思った。

「これは異ものではなかろうか。孔子が『楛矢、石磬で肅慎氏の物である』と鑑定した物であろうか。それがどうしてここにあるのか」

まわりの者に見せて手から手へと回しているうちに、手から失われて川の中に墜ちてしまった。そこで神に祈り、

「またこれを得て、廟の中に所蔵し、往来する者の心を驚かせ、目を動かして詭異の観を起こさせたい」

と、願った。祈りを終えてから、人を水に潜らせて探させたところまた獲ることができた。

……(以下、考古学的考察が記される)……

この鏃もまた宝なのである。順済王の威霊は南は洞庭湖から北は淮河や泗水のあ

たりにも及ぶので、とくにここにおいて出たのであろう。

私は敢えてこれを自分のものとすることなく、これを廟の中に留めて、古を好んで博く知ろうとすると君子との共有物にしようと思う。王の神聖英烈なることを示して、敬わなければならないことをこうして記しておく。

■跋所書圜通偈

4月8日は母程氏の命日で、蘇軾は供養のために『楞厳経』の一節を写した。

私は嶺南から海の外にあること七年、その間にも父や母の忌日に遇うごとに斎僧供仏をしてきたが、なかなかそれ以前のようにはできなかった。いま北に帰る途中、舟は予章と彭蠡湖の間にあって、亡き母、程氏の忌日に遇った。風に阻まれて滞留することになったので、きちんとした供養はできないけれども、『楞厳経』の中で文殊師利法王が説いた『圜通偈』の一篇を敬って写し、往時を追う思いを少しく伸べて、行く行く廬山を過るときには山中において道を得た者に施そうと思う。

建中靖国元年四月八日、書く。

（ここにあるように蘇軾はこの後で廬山に行くことになる）

■与銭済明

銭世雄（字は済明）（本章113ページ）からの手紙への返事。親しい人々の

消息について触れている。

お手紙が届き、廖正一君（蘇軾の後輩で都で交流があった人）が復官し、（罪に落とされて還俗していた）参寥師が髪を下し、張大亨君（蘇軾と長く交流があった人）が春秋博士となったことを知りました。こうして皆が幸いに恵まれるなかで、銭君にだけそれがまだ及ばないのはどうしてなのでしょうか。きっと間もなくあるに違いないと思っています。

参寥師がまた僧衣を纏うようになったことにつけても、（蘇軾が恵州にいたときに契順を使者として送った）定慧長老守欽が早くになくなったことが残念でなりません。しかしながら、定慧長老は世を夢幻と御覧になっておられましたので、僧衣をまた召されるかどうかなどは取り立てて言うまでもないことなのでありましょう。息子の蘇迨から、定慧長老が寿州で亡くなったときのこと、そのはなはだ奇特であったことを詳しく聞きました。つまりは小人どもがその僧衣を汚そうとしてもできることではないのです。そして、できもしないことをしようとした者が、それによって災厄に見舞われたこともいよいよはっきりしました。定慧長老にはかつて八首の詩を契順に託してお贈りしました。定慧長老は（罪に落とされて蘇州を）出発するに当たってそれらの詩を焼かれたのでした。その詩があることによって（他の者に）災厄が及ぶのを危ぶまれたからでした。いまその詩を書いて銭君に授けます。それを写して定慧長老の旧居に掲げてください。定慧長老の詩は極めてすばらしく、味わい尽くせないものがあります。その法を継ぐ人があるならば、語録のうちにきっと収めてください。契順がいまどこにいるのかわかりませんが、銭君が探し出そうとしているのは、舟から落ちた剣を船べりにしるしをつけて求めるようなもので、お笑い草であります。

（定慧長老（第11章127ページ）もまた蘇軾との交流故に還俗させられたのだった）

■贈詩僧道通

4月中頃に蘇軾は劉安世とともに廬山に遊んだ。これは廬山の宣秘大師道通に贈った詩。宣秘大師は詩を得意としたようで、この詩の初句と第二句は、詩をもって名の知られた思聡と仲殊に並ぶと称えている。思聡と仲殊については蘇軾自身の注で次のように記されている。「銭塘（杭州）の僧の思聡は若いときは琴を善くし、後に琴を捨てて詩を学び、詩もまた棄てて仏道を学んだ。その詩は（唐代の僧の）皎然に似て、より豪放である。安州の僧の仲殊は素早く詩を作り、立ちどころに完成させ、その工の妙は人を遥かに絶して優れている。仲殊は穀物を避け、常に蜂蜜を啖っていた」。仲殊については第9章123ページで詳しく見ている。

詩において雄豪にして妙味があり、苦くて腴い、

そのような僧は「琴聡」と「蜜殊」だけであった。

言葉に煙る霧を帯びるのは、

李白が言う通り古から少ない。

貴僧の詩はそれらを全て合わせた上に、

野菜や筍だけの淡白な料理というわけではない。

香しい林に梔子の花が咲いたかのようであるが、

これまでは古い井戸に轆轤が切れたかのよう、

貴僧の詩を汲み上げることができる者がいなかったのだ。

韓愈に告げようではないか、

賈島とか可明とかをさかんに推奨していたけれど、

大師に比べたら詩の下僕のようなものであると。

（ここでもまた偉大な先人である韓愈をからかうような言い方をしている）

■張競辰永康所居万巻堂

廬山で、かねてから知り合いであった張競辰という人物に会い、その書庫である万巻堂を詩に詠んだ。

（万巻堂の名の通りに多数の蔵書があったのだろう。蔵書マニアの張 競辰に戯れて関連する故事をそれこそマニアックにあれこれ引いて詩に詠み込んでいる。あまりに煩わしいので大意を取って訳す）

貴君の家ときたら四方の壁と書物があるだけ、

漢代の著名な書庫である天禄閣やら石渠閣やらもその中に納めてしまって、

唐代の李泌が持っていた三万巻を楽々超えているだけでなく、

貴君自身は、唐の太宗皇帝に歩く書庫といわれた虞世南を凌ごうというもの。

ところが、子供等が手を打って笑っているのは、

腹ペコのくせしてとにかく経典の議論ばかりをしているからだ。

世に稀な書物を持っていることを誇っていた漢代の蔡邕だって、

貴君の前では黙っているしかないし、

さまざまな奇妙な字体について論じた漢代の揚雄だって、

貴君とはかろうじて話ができるのかどうか。

貴君の家がある山を巡って、

碧い玉を連ねたような清らかな川が流れていて、

千年を経た竜が住んでいる。

貴君の家には酒があると思って、

竜は人に化けて夜に門を叩いたのだが、

貴君はただ書物だけで腹を満たしているのだから、

竜が来ようが何が来ようが全く意に介さない。

しかしながら、恵施はたくさんの書物を持っていたにもかかわらず、

荘子と議論してとても敵わなかったということもあるし、

漢の時代を開いた張良が読んだのはたった一巻の書物であったのだ。

（最後は張 競辰と同姓の張 良の故事をもってオチとした）

■劉壮輿長官是是堂

廬山で劉羲仲（字は壮輿）に会い、その是是堂について詩に詠んだ。

劉羲仲は、父の劉恕が『資治通鑑』の編集に大きな貢献があったことから、父の死後にやはり学術をもって朝廷に召されたのだが、貴顕の人々

と合わなくて短期間で辞めて廬山に隠棲した。

仁や義について論じたならば、

是か非かを定めないわけにはいかない。

非とすべきことを非だとするのは義に属することであるし、

是とすべきことを是だとするのは仁の内に入ることである。

それでも、人が言ったことを非とするのは訕(そしり)に近く、

また、人が言ったことを是とするのは諛(へつらい)に近いということもあるだろう。

孔子(こうし)のように善悪を厳しく分けるか、

阮籍(げんせき)のように腹に納めて曖昧なことしか言わないか、

そのどちらかになるのだろうが、

劉(りゅう)君の家の学問は三代にわたってますます独自性を強め、

古(いにしえ)のことを並べて現代を批判し、

史実を引いて天に代わって断罪し、

あたかも、明るく照らす大きな鏡の前では、

もろもろの醜悪さがはっきりと見えるようなものとなった。

そのために、

素早く飛びかかる鳥が四方に厳しい眼差しを向けるときには、

狐の群れが乱れ騒ぐように、

衆人どもは劉君を嫌ったのだった。

劉君は廬山に入り、

堂を作って「是是」の名を掲げた。

劉君は平坦な道を行くだけだと言うけれど、

孜孜として善人を称えるなら、

不善の者は自ずと遠くに去って行くのである。

これはまさにかの聖天子の禹の言葉であって、

貴君はいつまでもそれを座右の銘とするがよいだろう。

■題劉壮輿文編後

劉羲仲の文集の後ろにこの短文を記した。

今日は朝起きると、衣が緩くなって、頭が重く感じられた。ただそれほど甚だしいものではなかった。劉君が編んだ文章を読むと、疾はどこかに消えてしまった。曹操が頭痛の酷いときに臥せって陳琳の文章を読むうちにすっかり治ってしまったというのは嘘ではなかったのだ。まして陳琳の文章は貴君には及ばないのであるから。

建中靖国元年四月十二日、書く。

■予昔作壺中九華詩其後八年復過湖口則石已為好事者取去乃和前韻以自解云

蘇軾は廬山を出て、4月16日に鄱陽湖（彭蠡沢）の出口である湖口に到り、

この詩を詠んだ。詩題は「私はかつて『壺中九華の詩』を作った。その八年後にまた湖口を過ったところ、その石は好事の者に取り去られていた。それで前の詩の韻を使って残念な思いを解くことにした」。8 年前の詩は第 11 章 33 ページで見ていて、蘇軾は「壺中九華」と自分自身で名付けた石を非常に気に入ったのだが、南遷の旅の途中で入手するのをあきらめて立ち去ったのだった。

壺中九華の石は、

千の峰が立ち並ぶありさま、

川にそって戦馬が走る勢いがあった。

馬はどこに行ったのかと問うと、

冀北(名馬の産地)はすでにからっぽになっていたのだった。

優れた物は清らかな夢となって断たれてしまい、

その真の形は『五嶽真形図』(仙界の山を描いた画)を見て想うしかなくなった。

私は老いて帰ってきて、

伴うものは何もなくなってしまったのか。

頼るべきは銅盆に納めたあの石だろうか、

仙界の仇池の色を浮かべているあの石である。

(蘇軾が「仇池の石」を気に入っていたことは第 11 章 211 ページなどで見ている)

■次韻郭功甫観予画雪雀有感二首

壺中九華の石を持って行ったのは郭祥正（字は功甫）という人物で、蘇軾は湖口から長江を下って当塗に到ったときに郭祥正の訪問を受けてこの詩を詠んだ。郭祥正とは実は以前からの知り合いで、かつて蘇軾が描いた雪の雀の画を観て詩を詠み、恵州にいた蘇軾のもとに送っていた。その詩にまた次韻したものを郭祥正が持参して見せたので、蘇軾がそれらに次韻したのである。郭祥正の訪問は4月24日であったという。蘇軾の詩は郭祥正の詩を踏まえた風諭の詩で、意味がとりにくいところもあるので1首だけを訳す。

其の一

荘子が言う通り、

腐った臭いも聖なる神々しさも同じなのだ。

海の北の涯も天の南の涯もまた同じ、

私はそれらを全て経ていま帰ってきた。

風に乗って九万里を飛ぶ鵬とても、

低く低く飛んでおけばよかったと悔いたりもする。

（壺中九華の石について未練がましいことを蘇軾が郭祥正に言ったという記録は残っていない）

■与銭済明

銭世雄（字は済明）（本章 135 ページ）に当塗で書いた手紙。

人が来て、お手紙と二首の詩をいただいきました。北に帰るにつれて災いが退き、この素晴らしいお便りがここに届き甚だ幸いに思っています。詩人は窮まった後に工になるといわれている通り、詩の言葉はますます明瞭で、気力が全く衰えていないことからも、貴君の晩節の明らかなことが知れます。このごろの日々はいかがでしょうか。

私はここを発ったなら留まることなく進むつもりでいますが、風水の難には定まりがあるものではありませんし、貴君も遠くにお越しになるのは難しいでしょうから、私が真州に至ったところで使いの者を出しますので、程之元とともに金山にまでお越しいただくのがよろしかろうと思います。思うところはとても尽くせません。お会いできるのを待って、申し述べたいと思います。

（従弟の程之元と金山で会おうとしていたことは本章 130 ページの手紙で見ている。当塗から金山までは長江を下って 100 キロ余りである）

■観世音菩薩頌

湖口から長江を下る旅はほぼ順調で、4 月末に金陵（南京）に到着した。

（劉安世とはここまで一緒であったが、その後、別れたようだ）

金陵の崇因院の長老の宗襲は自ら喜捨を集めて観音像を造った。非常に好いお顔をしている。私は南に遷ったときにその観音像に向かって「北に帰るときにまたここを過ったならば、観音像の頌歌を作ります」と祈った。

建中靖国元年五月一日、南海から帰って金陵に至って頌歌を作った。

（(1) 頌歌の訳は割愛する。(2) 南への旅で金陵を通過したときのことは第 11 章 22 ページで見ている）

■次韻法芝挙旧詩

このころに芝上人（曇秀）から手紙が届いた。旧い詩を記して再会を期す言葉が添えられていたのだろう。その詩に次韻して返した。芝上人とは蘇軾が揚州知事であったときに交流があっただけでなく（第 10 章 257 ページ）、遠く恵州にも訪ね来ていた（第 11 章 220 ページ）。

春が来ると、

どこにいても鴻は帰らないことはないのであって、

牛が引かれるがままに、もとの踏み蹤に戻って来たのではない。

ただ願うのは、

老師はまことに月に似て、

その光はどこの家の甕にも届かないことはないということ。

（前半では、他人に運命を左右されることなく本性に従って帰って来たことを、後半

では、わざわざ訪ねて来るまでもなく芝上人には逢えていると歌っている）

■次韻贈清涼長老

金陵を発つに当たって、清涼寺の和長老に7年前の詩（第11章25ページ）に次韻して贈った詩。

これより淮河を過って都の方へと向かうなら、

地には塵が多く降り注いで、人を汚そうとするだろうから、

西風に扇を挙げて防がなければならない。

不思議なのは、

金陵の山（和長老のこと）が全く変わらないこと。

御存知だろうか、

川に映る月は分かれてどの身にも入ることを。

心が安らかで道を得ているなら、顔色はいつまでも若く、

事に遇っても情が動かないなら、詩句はますます新たなものになる。

私が蘆の小舟に乗り、浪で衣がぐっしょり濡れるのを、

笑って見送っていただきたい。

■与銭済明

金陵から下る船の中で、銭世雄（字は済明）に書いた手紙。旅の行き

先をどこに定めるのか、蘇軾はまだ思案を続けていた。

住居を常州に定める計画がほぼ定まったところで、弟から手紙が来て、潁昌（許州）に来るようにと強く勧められました。それで、この胸中はまた定まらなくなりました。お会いするのを待って相談して決めたいと思います。

■与程徳孺

同じころに従弟の程之元（字は徳孺）に書いた手紙。

私は今回の旅でもともとは淮浙の間に住もうと考えていましたが、近ごろ弟からの手紙を得て、潁昌（許州）に来て家族が集まることを強く勧められまし。それに違えることはできかねるので、そのように決めることにしました。汴河を遡って陳留に至ってから陸路を行くことになるでしょう。……

（蘇軾は、弟からの誘いに応じて潁昌（許州）に身を寄せることを決意した。海南島に渡る前に別れてから（第12章10ページ）4年ぶりの再会を果たしたいという気持ちも強く働いたのだろう。そして、この手紙に続いて程之元に船の手配を依頼するなど、北に向かうために具体的に動き始めている）

■書銭塘程奕筆

程之元には船の手配だけでなく、程奕が作った筆百本と越州産の紙二千

幅を所望している。これは程奕の筆について記した短文。

近年の筆を作る職人は師匠の教えを受けずに妄りに新しい意匠を出そうとするばかりで、毛の選び方が雑で、形が崩れやすく、人の手にうまく馴染まない。ただ銭塘（杭州）の程奕が作るものだけは、三十年来使っているが、字を書いて筆があるのを覚えないくらいに実に快い。北の地にはこの筆がないので、それを百枝ほど持って行こうと思っている。

■与楊子微

蘇軾の故郷の旧い友人である楊済甫の息子の楊子明（字は子微）に宛てた手紙。楊子明とは蘇軾が恵州に行く前に都の近くで会っていたが（第 11 章 11 ページ）、その後、楊子明は父に命じられて海南島に蘇軾を訪ねようとして眉山を出て、旅の途中で蘇軾兄弟が北に帰ることになったと聞き、蘇轍の落ち着き先である潁昌（許州）へと行き先を変えていた。

私は御父上の楊済甫君とは半生にわたって遠く別れたままで、ともに髪は雪のように白くなり、いつお会いできるとも知れません。このように申し上げるだけで言いようもなく悲しくなります。御父上は貴君を万里の彼方の海の外にまで派遣して、私の生死を尋ねさせようとされましたが、これは古の人でもなかなかできることではなく、伺って感心するばかりです。お手紙を拝見して、御父上を初めとして皆様が安らかにお過ごしのことを

審らかにして、極めて慰められます。私は七月の内には潁昌(許州)に到達することでしょう。そちらに少し留まっていただければきっとお目にかかれましょう。

私と弟は天の涯に流落し、それでも我が家の墳墓が荒らされずにすんでいるのは、御父上のお蔭によります。そのことを承り、感愧は言うこともできません。井戸が涸れて、いままた水が溢れるようになったとか。まことでありましょうか。そしていまはどうなのでしょうか。お会いしたときに詳しくお聞かせください。

(蘇軾は海南島に渡る直前に楊済甫に宛てた手紙を書いていて(第 12 章 14 ページ)、特に祖伝来の墓の世話を頼んでいた。ここに井戸とあるのは、蘇軾の生家のものであろう)

■与子由弟

蘇軾は 5 月中ごろに真州に至り、家族をそこに置いて少しだけ足を延ばして金山に行って程之元らと逢い、そして真州に戻ってこの手紙を弟に書いた。

黄寔君の遣いの者から、君の四月二十二日付けの手紙を得て、近頃の日々を安らかに過ごしていることを知って喜んでいます。兄は真州にいて、家族全員健やかでおります。

どこに行くかを計画しては何度となく変更してきました。このように難しいことに遭うのは、

嘆くべきであり、笑うべきであります。

兄はすでに君の言葉に従って潁昌(許州)に同居をすることを決め、潁昌に向かう旅を何日か続けてきました。たまたま程之元君が金山を過るというので行って会いに行きました。何人かの親しい人も同じ坐にいて、北方のことを詳しく聞きましたところ、潁昌のように都に近いところに住むのは決してよろしくないと言われました。それで、今は常州に住むと決めました。孫氏の家を借りて住めば極めてよろしいことでしょう。近隣の人々も喜びましょうし、失うものは一切ありません。

さらに十数日ほど真州に留まって、長江を渡って常州に行きます。一年を超える旅を続けましたので、しばらく休息します。

老境に至って兄弟が一つに集まれないのは残念ではありますが、これも天の定めなのでしょう。私は天をどうすることもできません。しかし、天は果たして兄弟がもう集まれないと定めたのでしょうか。そうとは限りません。士君子のなすべきは、自身の力を省みて行くべきところに進むことです。進んで兄弟がついに集まれないのは、本意ではないにしても、自身の力を省みて害を避けなければなりません。

あと一両月で常州に到るでしょう。息子の邁は官職を得るために都に行かせ、迨には荷物を常州へ運ばせ、過は私のそばから離さずにおきます。

(近ごろ亡くなった)黄寔君の娘(つまり蘇轍の三男の妻)をどこに葬るかは君の一存で決めてください。先祖の墓に葬るのもよく、私にはなんら異存はありません。十緡ばかりを出して、さらに墓地を買うのもよろしいでしょう。葬儀のやり方はすべて習慣に従えばよろしいでしょう。

林希君が傷寒を病んで十日余りで亡くなったと聞きました。林希君は生涯に何を得たのでしょうか。悪名を残しただけだとしたら哀しいではありませんか。

万一にもお上から起つよう命じられるようなことがありましても、兄は疾病の状況を詳しく述べて辞退するつもりでいます。治と過とともに門を閉ざし、農地を治め、性を養うだけです。兄のことはあまり気に掛けませんように。御身を大切にしてください。黄寔君にこの手紙を託します。

（(1) 蘇軾は金山で程之元や銭世雄と会って協議した結果、常州に行くべきと最終的に判断した。弟とはもしかしたら二度と会えないかもしれないと、苦渋の決断であった。それだけ政治の動きが急変しつつあったのだろう。(2) 終わりの部分に林希の名が挙がっているが、林希は揚州知事から舒州知事へと左遷され、任地へ赴く途中で亡くなっている。蘇軾と林希は同じ年に科挙に合格し、長く親しい関係にあったのだが（第 5 章 373 ページなど）、哲宗が自身で政治を見るようになって章惇が中央に復帰すると、林希はその招きに応じて要職に就き、蘇軾とその周辺の人々を激しく攻撃した。蘇軾が海南島にまで流されたのには、林希の働きが大きかったとされる。(3) 程之元は親身になって蘇軾の世話をし、金山から真州へと同行し、お金も貸そうと申し出ているが、蘇軾が弟に書いた別の手紙には、それは辞退したと記されている）

■書王定国贈呉説帖

真州に滞在する間に、王鞏（字は定国）が呉説に贈った文章を見て、蘇軾はこの文を書き添えた。以下の前半は王鞏の文章で、それは蘇軾が

恵州にいたときに書いたものである。

私（王鞏）の呉硯（五代十国時代の汪少微が作った硯）は李沆（宋初の大臣）が江南に赴任したときに得たものである。私はその孫からこれを得た。風字様の形状で、水を収めるところがわずかに損なわれたので、漆でもって固めてある。かつて蘇軾が『清虚居士真賛』を書いてくれたときに、その謝礼として呉硯を渡した。蘇軾はいま国を去って万里の向こうにいるが、果たしてその硯も一緒であろうか。

紹聖乙亥（二年）春、私は広陵（揚州）に至り、呉説が筆の技で蘇軾から贈られた『呉硯の銘』の書を見て、私は悵然となった。かねてから交遊のある人々のこの十年の昇沈を見て、ただ蘇軾だけが耐え続けている。いつの日にかまた会って、硯墨紙筆の楽しみをともにできるであろうか。

王鞏書く。

私は国を去ってから八年、帰って来て中央の士大夫に会ったところ、筆の先が開いてしまうような筆を使っていて、骨ばった字がない。市で筆を買うと、どれもが軟らかく筆先が開くものばかりである。ただ広陵の呉説だけが旧来の法式を守っている。王鞏君は十年の間に耐える者がいないと書いているが、呉説の筆の工は独り長きにわたって耐えている。私はひどくこれを嘉みするものである。

建中靖国元年五月二十日、東坡居士書く。

（蘇軾がまさに恵州にいたときに王鞏に宛てて書いた手紙を第 11 章 186 ページで見

ているが、その後、2人の間にどのような交流があったのかは確認できていない)

■書呉説筆、試呉説筆

上に記してある呉説の筆について書いた文章を見ておこう。

筆がもしも多くの士大夫の意に適うものであるならば、書に工な人はそれをうまく用いることができない。もし書に工な人によい筆であるならば、士大夫で使えこなせる者は希である。

竜を捌くことができる者は、普段のときには、豚を捌くことができる者に全く及ばないといわれている。筆だけに当てはまることではないのだ。

蔡襄は「芸にますます工な者は、人としてますます困窮する」と言ったけれど、それは空言ではない。

(前代の筆の名工)呉政が亡くなってからは、その子の呉説だけが家法をしっかりと受け継いでいる。

((1) 竜を捌く譬えは『荘子』の寓話にある。竜を捌くような特別に優れた技能は、普段は豚を捌くごく普通の技術のように役立つものではない。しかし、ひとたび竜が出現したときには、豚を捌く人の手には全く負えない。筆も、平凡な筆を作る職人の方が繁盛するのである。(2) 蔡襄は蘇軾の先輩で、書に優れていたことは第6章148ページで見ている)

唐代の史書に、徐浩の書は「鋒を画中に蔵め、力を字の外に出す」とあり、杜甫の詩に、「書は痩せて硬いものを、真髄に通じるとして貴ぶ」とある。今どきの鋒がない筆に墨を漲らせて書いたなら、いわゆる「皮の厚い饅頭」となってしまうのである。呉説の筆を用いていまこの数文字を書いたところ、すこぶる我が意に適う。

■与米元章

蘇軾の親友に米黻（字は元章）がいた（第10章298ページなど）。米黻は蘇軾に会おうと真州を目指す旅の途中にあって、蘇軾はその到着を心待ちにし、この手紙を記した。

嶺南、海外にあること八年、親類とも友人とも遠く付き合いが絶え、思いを巡らせることさえありませんでしたが、独り吾が米黻君の邁往の気概、凌雲の気迫、清雄絶世の文，超妙入神の字をいつか見て、我が積年の瘴毒を洗い流してしまいたいと思っていました。いま真に見られるのであれば、私はもう何も言うことはありません。

■睡起聞米元章冒熱到東園送麦門冬飲子

6 月初めに米黻（字は元章）の訪問を受け、蘇軾は恵州の羅浮山で見た赤猿のことなどを語ったという。ちょうど夏の盛りで、蘇軾はこのころから体調を崩し、熱を出したり、下痢をしたり、臥せる日が多くなった。この詩の題は「米黻が熱に冒された」と読めるのだが、たぶん実際の意

味は次のようであるのだろう。「眠りから覚めると、熱に冒されている私のために、米黻君が東園に麦門冬飲子を送ってくれたと聞いた」。麦門冬飲子は、咳に効く漢方薬として麦門冬湯が現在もあるように、薬の名称である。東園は真州にある庭園で、発病した蘇軾はここで体を休めていた。

枕辺に吹き寄せる清々しい風は一万銭にも当たる価値がある。
しかし、実際にそれを買って北の窓辺に眠る人はいない。
君が贈ってくれた麦門冬を飲むと、
心が開かれ胃が暖まる。
君からのものであるから、
特に東坡居士は自分の手で煎じたのである。

■与米元章

蘇軾は短い手紙を何通か米黻（字は元章）に書いていて、そこに病の様子が記されている。書いた順序は明らかではないが 2 通を訳しておく。

昨日は冷たい物を食べ過ぎたのでしょうか、夜に激しく下し、朝には疲れ切ってしまいました。黄蕷(薬草)の粥を食べたところ甚だうまかったです。臥して四印(米黻から四つの印を送られたのだろう)の奇古なるを見て、病のあることを忘れました。明日の会食はしばらく

やめておきましょう。やや良くなるのを待ちましょう。あるいは雨が降って空気が清々しくなったときでしょうか。印はお返しします。

食べると腹が脹(は)り、食べないとひどく痩せてしまいます。昨日は朝まで目を閉じることもできず、座ったままでひたすら蚊に食われていました。今夜は果たしてどのようになるでしょうか。見せてくださった古(いにしえ)の文は非常によいものです。(晋代(しんだい)の)謝安(しゃあん)の書帖は軽々しく跋文を記せるものではありません。数句を書こうとしても思い浮かぶものがなく、ぼんやり座っているだけです。眠りも食事もよくありません。

（このころから、蘇軾の詩文は口述筆記によると推測される）

■跋柳閎楞厳経後

蘇軾は病から癒えることなく米黻(べいふつ)（字(あざな)は元章(げんしょう)）と別れて真(しん)州を発ち、長江(ちょうこう)を少し下って金山(きんざん)のある潤州(じゅん)に至った。潤州には甥の柳閎(りゅうこう)がいて、その訪問を受けた。柳閎は柳子文(りゅうしぶん)の子で（第 10 章 40 ページなど）、柳子文の妻は、蘇軾の伯父の蘇渙(そかん)の娘である（第 12 章 145 ページなど）。蘇軾はいくらか復調したのだろう、柳閎と会うと、海南島(かいなんとう)で記した詩文を見せてその感想を聞き、ものの優劣を見分ける目が具わっていると褒めた。柳閎は先に亡くなった弟の柳辟(りゅうへき)のために書いた『楞厳経(りょうごんきょう)』を見せたので、蘇軾はそこに跋文を書き添えた。

……吾が甥の柳辟は早くから親に孝、兄に悌で、子供のころから優れた文章を作ったのだが、不幸にして短命であった。その兄の柳閎は弟のために手づからこの経典を写した。柳閎はすでに仏の意を知っているので、柳辟はきっと兄のお蔭で冥福を受けるであろう。

■祭柳仲遠

潤州には柳子文（字は仲遠）の墓があり、蘇軾は柳子文を祭るこの文章を作り、たぶん蘇過が墓に詣でてそれを捧げた。蘇軾は海南島にいたときに柳子文の訃報を聞いて祭文を書いている（第12章145ページ）。

私は南に流された。天が罪を憎んだからであって、古の人であれば百回死んでも足りなかったであろう。しかし、天は私を亡ぼさずに、私の友であり親戚である者を亡ぼした。我が従妹は柳子文の妻となり、夫婦は連なる璧のように仲がよかった。どうして二人とも逝ってしまったのか。天はどうして哀れんで一人だけも遺してくれなかったのか。私が南から帰ってくると、二年ごとに生える草が二度も替わっていた。私の目より涙が溢れ、二人の眠る地下へと落ちて行く。柳閎は立派な人間で、本性が金石のように堅い。私は窮して老いてしまった。このような叔父に似てはならない。墓地のあたりを占うに、ここは一万の部屋を置くによい。天の定めは人に勝るのであるから、きっと柳子文の子孫は繁栄するであろう。

（蘇軾と柳子文の妻は幼馴染であり、30年前に潤州を通過して杭州に副知事として

赴任してからは、柳子文の父の劉瑾と親しく交わった。様々な感慨を抱きながらこの祭文を作ったのだろう）

■与章致平

潤州から常州へは大運河を使ってあと一歩である。蘇軾が潤州にいる間に是非とも会いたいと、章援（字は致平）から手紙が届いた。章援は章惇の息子。章惇が雷州に流されたことは本章131ページで見ているが、章援は父の処分が少しでも緩くなるようしかるべき筋の人に口添えしてもらえないかと蘇軾に頼もうとしていた。蘇軾はかつて保守派が政権を握っていたときに科挙の試験監督を務め、そのときに章援が合格したので、2 人はいわば師弟関係にあり（第 8 章 187 ページ）、一時期は章援と蘇軾は親しくしていた（第 9 章 2 ページなど）。しかし、章惇が改革派の重鎮として中央に復帰してからは交流は絶え、まして蘇軾を海南島にまで流した張本人は章惇であったのだから、普通であれば全く頼める筋合いのものではなかった。章援は父のために、苦しい言い訳を書き連ねた手紙を蘇軾のもとに送って、何とかしてすがりつこうとしたのだった。

章援学士殿にお手紙を差し上げます。私は真州より暑毒を得て、病に臥せって昏睡状態にありました。潤州に至りましても、知事とも誰とも会えずにいます。ただ茫然としているだけで、、学士殿がこの地におられるのも知らずにいて、お手紙を得てようやく悟っ

た次第です。

お手紙を拝見してまことに感じ入っております。丞相殿(章援の父の章惇)とは交際を初めてから四十年余りとなり、その間に歩むところはやや異なりましたけれど、交情は決して変化することはありませんでした。丞相殿が老年に及んで海の隅に身を寄せることになり、その心中はお察しいたします。過ぎ去ったことはいまさら言っても何の益もありません。考えるべきはこれからのことだけです。

陛下が至仁にして至信でありますことは草や木や獣や魚も知るところであり、建中靖国の元号の意味は国を安らかに保つことにありましょう。雷州の風土はそれほど悪いものではなく、暑さ寒さもほどほどで、船が到着すると、四方の物がふんだんに届きます。我が弟がかつて南方の旅客となったときに、舟を用意して家で使う分の薬を備えて持っていきましたところ、使った余りを近所の人々に配れるほどであったと聞いています。また丞相殿は身を養う内丹、外丹について以前からよく御存知であり、それがまだ成就していなかったのは、国家のために忙しくされていたためで、いまはお仕事から解放されて閑を得ましたならば、きっと養生の術を完成なさることでありましょう。ただし、内丹法を用いるにしても、おかしな物は決して服用してはなりません。私は海の外にあって『続養生論』を作りましたので、写して差し上げたいのですが、病のためにできずにいます。毗陵(常州)に至って落ち着きましたなら、推敲して贈呈したいと思います。

住むところを定めるのは、いろいろ検討しても誤ることが多いものです。私がどこか安からなところへ行ければまことに幸いであります。いまの病状をみて、我が生死のほどはまったくわかりません。ここ半月ほどは一日に米を半合も食べていません。食べようとし

てもすぐに飽いてしまいます。いまはとにかく素早く毗陵に帰って、しばらく休むことだけを思っています。この手紙もここにまで至って、疲労困憊して筆を抛り出します。大いに嘆息するだけです。

章援学士閣下、六月十四日。

（蘇軾は章援と会いはしなかったものの、この手紙は穏やかな文言で、章惇父子への温かな気遣いを示している。林希に対して厳しい評価を下していた（本章 150 ページ）のとは対照的である。根っからの改革派であった章惇には理念があると蘇軾も理解していて、途中から権力にすり寄った林希とは一線を画すと見ていたのだろう）

■乞致仕表

蘇軾は 6 月下旬に常州に到着した。潤州からの移動の様子を邵博の随筆『邵氏聞見後録』は次のように伝えている。

> 蘇東坡が海の外から毗陵（常州）に帰ったとき、病んで熱があり、頭に小さな冠を載せ、半臂をはおって船の中に座っていた。運河をはさむ両岸では、千人万人もの大勢の人が船を追いかけながら蘇軾を観ていた。東坡は同船する人を顧みて言った。
>
> 「あの者たちにこうも見つめられては殺されてしまうよ」
>
> 人々はこのようにその人柄を慕ったのであった。

蘇軾は常州に到着するとすぐに官職から完全に引退したいと皇帝に願い

出た。

臣軾は先に端明殿学士兼翰林侍読学士朝奉郎定州路安撫使から恩を蒙って落職し、降って承議郎知英州を授かり、遂には寧遠軍節度副使恵州安置に貶されました。四年を経て、恩を蒙って貴授瓊州別駕昌化軍安置となり、また三年半を経て、陛下が皇位に登られて大赦を受け、量移廉州安置となり、また皇子様の赦恩によって舒州団練使永州居住となりました。

臣は老病をもって久しく瘴毒に伏し、しきりに道を急ぎましたけれども、まだ永州に至らないうちに、特に聖恩を蒙ってまた朝奉郎を授かり、提挙成都府玉局観外州軍任便居住としていただきました。

臣にはもとからわずかな農地が常州宜興県にあって、食がほぼ足りることから、万里の道を急いで常州に帰ろうとしまして、一年ほどを費やしました。臣は人として微小でしかし罪は重く、身体が弱くて命が薄く、陛下より賜りました再生の恩を尽くすことは難しく、五月の間に真州に至って瘴毒が大いに起こり、船に乗って潤州に至ったところで、昏倒して何日も意識を失ってしまいました。いまは常州に至りましたが、百の病が重なり、身体は腫れあがり、喉が渇き血を吐き、全く食べることができません。そのようなことが二十日余りも続いていて、必ず死ぬであろうと自ら見ております。臣は今年六十六歳、もはや死んで何の恨みもありません。それでも草木や昆虫と同じように生を貪る気持ちがあり、またこの聖世を慕って留まりたいとの思いがあります。お上からの寵禄を辞することによって、あるいはすこしでも生きる歳月を延ばせるのではないかと思い、朝廷の哀

憐を望む次第にございます。特に臣(わたくし)を本官をもって致仕(ちし)させていただきたくお願いいたします。

（最後に「生きる歳月を延ばせるのではないか」とあるのは、官職や俸給を貪る思いのないことを示すなら、天が特に寿命を延ばしてくれるという考えに基づくもので、次の手紙にもそのことが記されている）

■与参寥子

親友の参寥師道潜(さんりょうしどうせん)に宛てた手紙。

私は病が甚だしく、もうほぼお会いできないでしょう。ここ両日はわずかに息が通っているだけです。お手紙に書かれていたこと、一つ一つ了解しましたが、多く書いてお答えすることができません。病が甚だしくて死にかけている者が、官職を辞すことで活(い)き返ったということを聞き、俗な情(こころ)がそれにならおうするのを免れることはできません。果たしてそのかいがあるなら、それ以上の望みはありません。私の『遺表(いひょう)』は決して刻みませんように。私に害が及ばないように頼みます。

（(1) 最後にある『遺表(いひょう)』とは、死後に皇帝に差し出すために用意した文章で、己の生涯の思いを皇帝に伝えようとするものである。もしそれが公開されたなら、子孫に災厄をもたらすかもしれないと蘇軾は恐れたのである。蘇軾の『遺表』はここに望んだ通りになって残されていない。(2) 参寥(さんりょう)との最後の面会はついに叶わなかった）

■与銭済明

常州に到着すると、この地の人である銭世雄（字は済明）が頻繁に見舞い訪れた。銭世雄に与えた手紙。

夜にひどく熱を出しました。歯の間から血が出て蚯蚓のようなものがたくさん出ました。暁に至って止まり、甚だ疲れました。こうした病状を細かく観察するに、これはもっぱら熱毒によるもので、その根源は浅くないところにあります。清涼薬を用いなければなりません。それで人参と麦門冬と茯苓の三種を煮て濃い汁にし、渇いたときに少し啜るようにしています。他の薬は全てやめました。

荘子が言うには「天下を在宥する(あるがままにする)ことを聞くも、天下を治めることは聞かない」とあります。病気が愈えないのは天によるもので、私の過ちではないのです。

（蘇軾は自分の病気の根源は「熱毒」にあって、それは長く嶺南の過酷な気候条件のもとにあったからだと考えていた。嶺南に流されたのは自分の過ちによるのなら、病もまた自分の過ちからきたことになるが、蘇軾はそのようには捉えていない）

■与米元章

7 月 12 日、蘇軾は小康状態を得て起き上がり、久しぶりに筆を手にした。そのことを銭世雄（字は済明）が記録した文章が何遠の随筆『春渚紀聞』に収録されているので、それを見ておこう。

建中靖国元年、先生は嶺海より帰られ、四月に当塗から十一首の詩を私(銭世雄)に寄せられ、かつ程之元と金山で待っているように約束なさった。それで金山に行って先生をお迎えし、ついに毗陵(常州)に住まわれることを決議された。

六月に真州より疾を避けつつ長江を渡られ、再び奔牛埭においてお目にかかった。先生は榻の上に横になっておられ、おもむろに起き上がって私に、

「万里の向こうから生還し、後の事はあなたに託します。ただ、弟も二度目の左遷から帰って来て、ついにまた会うことはできないと決まりましたのは、堪えがたき痛みです」

と、言われ、その他には何の言葉もなく、長らく経ってから、

「私は先に海の外にあって。『易経』『書経』『論語』の注釈書を作りました。その全てをあなたにお渡しします。他の者には見せないようにしてください。三十年後にもしかしたら理解してくれる者があるでしょうか」

と、言われ、それらを蔵する箧を手にして開こうとなさったが、たまたま鍵がなかった。私は、

「ここに至って、初めて先生のお言葉を伺うようになったばかりです。どうしてにわかにそこまでおっしゃるのでしょうか」

と、言った。

(常州では)孫氏の館に寓居され、日々お見舞いに参上した。お会いするときには必ず時長く過ごし、嘆きつつ昔のことを論じられ、いまのことに及びもした。嶺海での詩文を示めされ、とき笑われることもあって、まわりの人々をはっとさせるほどに生き生きとした表情をお見せになった。

七月十二日、疾いが少し安らぎ、先生は、

「今日は気分がよい。筆や硯を手にしてみようと思う。ためしに君のために数枚書いてみよう」

と、言われて、「恵州江月」の五首の詩を書かれた。次の日には『桂酒頌』の跋文を書かれた。（「恵州江月」は第 11 章 215 ページで見ていて、『桂酒頌』も恵州で作った作品である（訳さなかった）。銭世雄のために書いた跋文は残念ながら残っていない）

7 月 12 日は調子がよかったのだろう、米黻（字は元章）に与える跋文も記し、これはそれに添えた手紙である。

この病のためにほぼもう会うことはできないでしょう。今日は初めて糸の一筋ばかり病が減じたように感じています。まだ十分に字を書くことはできませんが、この跋文をお納めください。

■夢中作寄朱行中

夢の中で朱服（字は行中）に寄せた詩。朱服はこのとき広州知事であった（本章 94 ページ）。病が悪化するなかでどうして特に朱服に詩を寄せたのだろうか。恐らく、夢の中で最も過酷であった嶺南の日々に戻り、今も自分と同じように広州に置かれている朱服のことを思い起こし、大切なメッセージを伝えようとしたのだろう。政治情勢が危うくなりつつあるなかでうかつなことを言うと朱服に迷惑が及ぶかもしれないと配慮したのだろう、故事を連ねた歴史オタクのような詩になっている。

舜が諸侯に授ける玉の高下を定めなかったならば、

璵璠の玉が貴いものだとは誰も知らないままだった。

哀れなことに、

卞和は、これを磨けば立派な玉になると言ったことを誰にも信じてもらえなくて、

原石を抱いて空しく山で泣いたのだった。

藺相如は国の宝の玉を守るために、

敵の王の前で大芝居を打って、無事に玉とともに帰還した。

それとて、鄭の子産が玉を求められたときに、

礼を守って国の安泰を保ったのには及ばない。

理に基づく応対をされたならば、

誰もが恥じて要求を取り下げるのである。

今に至るも大切なのは宝を貪らないこと、

そうしていてこそ凜然とこの塵の世を照らすことができるのである。

（この詩は、「玉」に相当する自身の天分を大切に保つならばいつか世に輝きを放つということを歌っているのだろう。改革派がこの後で完全に復権すると、朱服は蘇軾と親しく交際したことが罪として問われ、安置処分を受けることになる）

■答径山琳長老

7 月 18 日、蘇軾は死期が来たと悟って息子たちに最後の言葉を遺した。

その後わずかに復調し、維琳長老の訪問を受け、起き上がって話をし、この詩を贈った。維琳長老はこのとき武康県（常州と杭州の中間にある）の隆教院にいたが、かつて杭州の径山にいたことがあるので、詩題では「径山琳長老」と記されている。

貴僧と私はともに丙子（景祐三年）の生まれ、

それぞれすでに三万日を過ごしたことになる。

鳩摩羅什（蘇軾より700年ほど前に西方から渡来した高僧）は一日に一千偈を誦したというが、

歳月はいかにしても電光のように過ぎ去ってしまう。

大いなる患いはこの身があるに縁る。

この身がなければ疾もない。

鳩摩羅什がいよいよ終わりのときになって神咒（呪文）をやたらと唱えたのを、

私はこれまでは笑っていたのだが、

いよいよ私にもそのときがきたようである。

（(1) 真偽のほどはわからないが、維琳長老が西方浄土を念じて経文を唱えるように勧めたところ、蘇軾は無言であったといわれている。(2) 清代の紀昀は、この詩も含めて嶺北に戻ってからの蘇軾の作品を評して、「皆冗漫浅易の作、蓋し是に至って、菁華竭く」と厳しいことを言っている。それが当たっているかどうかはわからないが、口述筆記によるものも含めて十分な推敲を経ていないのは確かであろう。蘇軾は電光石火のように即興で詩を作るのを得意としたが、完成した詩として書き残すまでには

十分な彫琢を加えていたことが幾つかの随筆に記録されている）

■維琳

維琳長老とはかねてから知り合いで、蘇軾はかつてこの文章を書いていた。

径山長老維琳は、行いが峻厳で、仏の教えに広く通じ、文章が美しく清らかである。昔、径山の祖師は、今後は弟子の序列に従って順番に住持にしてゆくよう定めた。しかし、私は、事に適うように祖師の定めを廃止し、山門において徳のある者を選ぶのがよいと考え、維琳に継がせるようにした。初めは維琳のことを喜ばない人が多くいたのだが、悦ぶ者が増え、かつそれが正しいことはどうすることもできず、いまではすっかり定まっている。

（この文章は恵州で書いたと推定されているが、どのような事情から筆を執ったのかはわかっていない。蘇軾が序列によらずに維琳を住持にしたのは杭州知事であったときなのだろう）

■与径山長老維琳

維琳はこの後も繰り返し蘇軾を見舞ったが、面談はもはや叶わなかったようだ。維琳に宛てた手紙が 2 通あり、7 月 26 日に書いたとされるものが蘇軾の絶筆となった。

病に臥せて五十日、日に日に劇(はげ)しさを増しております。すでに頽然(たいぜん)として命が尽きるのを待つばかりです。ここ両日は微かに生きた心地がしていますが、決してよくなったわけではありません。たまたま眠りから覚めたときに、ふと老師の名刺を見て、長く嘆息いたしました。このような暑さの中で、耆年(きねん)の人が山を出てどのように旅をしてこられたのでしょうか。いかなる日々を過ごされておられましょうか。私は人に助けられても、数歩を歩くのがやっとです。じっと座っていることもできません。臥せたままなら少しばかり老師とお話できましょうか。夜に涼しくなりましたらお知らせしましょう。もう一度お訪ねください。

私は万里の彼方の嶺南(れいなん)の海で死ぬことはなかったのですが、田野に帰って宿ってからはついに起きることのできない憂いのうちにあります。これも天の定めなのでしょう。生死は小さなことで、言うに足りないことでしかありません。ただ仏のために、法のために、衆生のために自重されますように。

（蘇軾は7月28日に息子や維琳(いりん)長老、銭世雄(せんせいゆう)らに見守られて息を引き取った。その最後の様子もふくめて、蘇轍が記した兄の墓誌銘の一部を見ておこう）

蘇轍:『亡兄子瞻端明墓誌銘(ぼうけいしせんたんめいぼしめい)』

私の兄の子瞻が南に謫居(たくきょ)すること四年目の春正月に、今の天子が即位されて海内に恩を施され、その余沢が鳥や獣にまでも及び、夏六月、公(こう)(蘇軾のこと)は命(めい)を被って海を渡って北に帰った。あくる年、舟は淮浙(わいせつ)に至り、秋七月に病を被って毗陵(びりょう)で亡くなった。呉越(ごえつ)の民は道に出て哭し、君子はその家に

弔問に訪れた。訃報が四方に聞こえると、賢者も愚者も皆が驚き嘆いて涙を流し、太学の学生数百人が率先して恵林仏舎に布施して法要を行った。嗚呼、斯の文(蘇軾の文のみまらず正統な学問を指す)は墜ち、これから後の者はもう仰ぎ見ることができない。公は初めて病んだときに、手紙で、「私が死んだなら、嵩山のもとに葬り、君が銘を作ってくれ」と、私に頼んできた。私は手紙を手にして哭し、「心して我が兄の銘を作る」と、誓ったのだった。

公の諱は軾、姓は蘇氏、字は子瞻、もう一つの字は和仲。代々家は眉山にあって、曾祖父の諱は杲、その妻は宋氏、祖父の諱は序、妻は史氏、父の諱は洵、妻は程氏である。公が生まれて十年、父は四方に遊学し、母が自分で書物を教え、古今の歴史の肝要なところを語った。母はかつて『後漢書』を読み、「范滂伝」に至ると、慨然として太いため息をついた。公はそばにいて、「私がもしも范滂になったら、母も范滂の母のように私を許してくださいますか」と言った。母は「そなたが范滂になれるのなら、私が范滂の母になれないはずはありません」と言った。公は奮起して世のために働こうとの志を持った。母は喜び、「私にはこの子がいる」と言った。成人になるころには、史書や経典に通じ、一日に数千字の文章を作った。

嘉祐二年、欧陽脩が礼部進士の試験委員長になり、いまの時代の文章が奇矯なものになっているのを嫌って、修正したいとの思いがあった。梅堯臣も試験監督になっていて、公が(試験の答案で)刑賞を論じた文章を欧陽脩に示すと、欧陽脩は驚き喜び、公は並みの者ではないと考え、首席にしたいと思った。しかし、もしかしたらこの文章は(自分の弟子の)曾鞏が書いたのではないかと疑い、公を二番にしたのだった。また、『春秋』について問う試験では首席で、殿試(科挙の最終試験)は乙科として合格した。そして、蘇軾は諸公に合格した謝礼の挨拶をし、そのときに欧陽脩に初めて会った。欧陽脩は梅堯臣に手紙で、「私はこの人を敬って避けなければならない。人より頭一つ抜きん出ている」。人々はそ

れを聞いた始めは面白く思わなかったが、後に信服した。

……(以下、官界における蘇軾の事績が記される)……

公は恵州に居ること三年、蘇軾を流竄にした者たちはまだ十分ではないとして、紹聖四年、さらに瓊州別駕安置昌化の処分を下した。昌化は人の住めるようなところではなく、水も食べ物も十分ではなく、薬などはなかった。初めは官舎にあって雨風をしのいでいたのだが、役目の者がそれを不可としたので、土地を買って家を作った。昌化の士人が土を盛り 甓 を運んで手伝い、三部屋の家ができた。人々はひどく心配したのだが、公は芋を食べ水を飲み、書を著して楽しみとした。時にその地の父老と一緒に遊び、分け隔てすることがなかった。

元符三年、大赦によって北に還り、最初に廉州へと移り、再び永州に移ることになり、朝奉郎に戻って、提挙成都玉局観居従其便となった。公は元祐年間以来退任を願ったことがなく、これが最終の官職となった。……許州に住もうとしたのだが、暑さのために病気になって下痢をし、ついに常州に行った。建中靖国元年六月、致仕を朝廷に願い出た。それから十日もしないうちに、子供等をそばに呼んで言った。「私は生きて悪いことはしていない。死んできっと(地獄には)墜ちないだろう。哭くしたり泣いたりして、死を妨げるようなことは慎んでしないよう」。後のことを問うと、答えなかった。湛然として逝かれた。時七月丁亥(28日)であった。

公は王氏を娶り、その従妹を継室として、王氏は公より先に亡くなった。息子は邁、迨、過の三人がいて、孫の男子は簟、符、箕、箘、荃、籌の六人である。明年閏六月癸酉、汝州郟城県の釣台郷上瑞里に葬った。

公の文は天において得たものであった。若いころは私とともに父を師とし、初めは賈誼や陸贄の書を好み、古今の治乱を論じ、空言をなさなかった。『荘子』を読むと、喟然として歎息して言った。「私は昔、こ

れを心の中で見た。口ではうまく言い表せなかったのだが、いま『荘子』を見て、我が心にぴったり合うと知った」と、言った。また、『中庸』を論じて、微妙のところに到り、それは古人も言わなかったことであった。かつて私に、「今の世の学問をする者を見ると、私と君だけが上か下かになるだけだ」と言ったことがある。

黄州に謫居すると、門を閉ざし、家の奥深くにいて、馳騁翰墨してその文章は一変し、まさに川が自在に流れるかのようになり、私は瞠然としてとても及ばなくなった。後に仏教の書物を読み、深く実相を悟り、それを孔子、老子の教えと融合させ、自在に広く弁じて、浩然としてその涯を見ることはできなかった。

父は晩年に『易経』を読んで、その爻象を熟考し、その剛柔、遠近、喜怒、逆順の本質を得て、その言葉を観て全てを刃をもって捌くように解釈をして、『易経』の注釈書を作った。完成する前に、病が悪化し、その志を述べて公に命じた。公は泣いて命を受け、ついに完成させた。千年の間、その含意が隠されていたものが明らかに知れるようになった。また『論語』の解釈書を作り、孔子の秘められた教えを発見した。最後に海南にいて、『書経』の注釈書を作って、上古以来絶えていた学を推して明らかにし、儒学の先人がまだ至らなかったところに達したものも多くあった。この三つの書物が完成すると、それを撫して言った。「今の世においては必ずしも信とはされないだろうが、後に私のことを知ってくれる君子がきっといるだろう」。

事に遇うごとに、詩、騒、銘、記、書、檄、論、譔を作り、どれもが人よりも優れていた。東坡集四十巻、後集二十巻、奏議十五巻、内制十巻、外制三巻がある。

公の詩はもとは李白や杜甫に似て、晩年には陶淵明を喜び、その詩のほとんどに和した。およそ四巻がある。

幼いときから書を好み、老いても倦むことなく筆を手にし、「晋の人には及ばないにしても、唐の褚遂良、

薛稷(せつしょく)、薛耀(せつよう)、顔真卿(がんしんけい)、柳公権(りゅうこうけん)にはおぼろながらに近いところにきただろうか」と言っていた。

……(以下、韻文の銘などが続く)……

((1) 蘇軾が葬られたのは崇寧(すうねい)元 (1102) 年5月で、蘇轍は兄が亡くなってから1年足らずの間に資料を集めてこの墓誌銘を書いたのだった。(2) 蘇軾は弟のもとに行くのは危険と判断して、断腸の思いで弟との再会をあきらめたのだが、事態は予想を超えてより悪い方向に進み、崇寧元年9月には、蘇軾を含む保守派の人々117名は国政に害を為した罪人であったとして朝廷によって公式に認定され、翌年の 4 月には、蘇軾の詩文を集めた本の印板を破壊するよう命令が下された。蘇轍はそうした情勢のなかでもはや官職に就くことなく、兄から後れること 11 年、政和(せいわ)2 (1112) 年 10 月 3 日に 80 歳で亡くなった。(3) 蘇軾が亡くなった直後に大勢の人がその死を悼む詩詞を詠んだ。その中から参寥師道(さんりょうしどうせん)潜の詠んだ長い挽詞から一節を読んで、この訳の終わりとしたい)

峩冠正笏立談叢、(冠を高くかぶり笏を正しく持って朝廷に立って議論するときには)

凛凛群驚国士風。(凛凛(りんりん)と国家を担う風格を示して群臣を驚かせた)

却戴葛巾従杖履、(葛布(くずぬの)の帽子を載せて杖をついて歩くときには)

直将和気接児童。(たちまち和やかな様子で子供等と遊んだのだった)

(蘇軾は皇帝の前でも田舎の子供等の間にあっても常に自然に振る舞っていたのである)